

# 蹴 球

創刊號

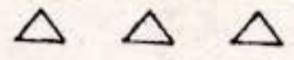
長瀬兄送別を記念して



August—1934

東京商科大学蹴球部誌





涙の地石神井去りて國立へ

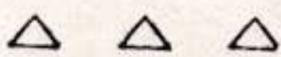
緑の風のそよぐ頃

玉汗光ありて明日を待つ

健兒微笑む所—蹴球部あり

二五九四・七・一〇

T・T 生



今は逝きし蹴球團創設の恩人

〔本文蹴球團時代参照〕



〔故 兵 藤 世 平 治 氏〕



蹴球部創設六人男

右ヨリ 川村通 松本正雄 兵藤世平治 明石毅 進藤靜太郎の諸氏

内圓 高橋朝次郎氏

蹴球部再建の救主

長瀬凱昭兄

(上)



之は誰ですか？

(下)

〔長瀬兄十三才の時〕

蹴球團第一回の對外試合を終へて

於東高師



郎太靜藤進 郎次朝橋高 リヨ右列後 毅石明 テイオ人一 治平世藤兵 進村川 リヨ右列前  
 [照參代時團球蹴文本] 輩先諸の雄正本松 テイオ人一

送別會に臨む一時間前の和かなる集ひ



〔島田・村川

いさ下知通御迄員委急至は方の知存御ず得し記明を名氏の員全らがな念殘頃年四三十正大〕

長瀬吉村両兄送別會の状景

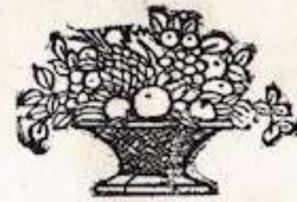


澤熊 堂階ニ 枝淺 木鈴 井荒 田森 田角 //同 央中 見重 瀬長 村吉 田林 田淺 ヲヨ右列前  
 プツカ贈寄々日戰和浦にび並 プツカ勝優部三はプツカ 掛大 野神 井村 藤後 島田 //同列後

THE FOOTBALL



△ 號 刊 創 △



(次)

(目)

### 創刊號

## 蹴球部誌

表紙……………	横山松濤畫伯
扉……………	T T 生 生
卷頭言……………	田 島 生
蹴球部生活を考へて……………	本科 二階堂謹司(二)
緊張と疲勞……………	本一 水島 茂(六)
煙草の煙……………	養一 枝村藤三郎(九)
バツクについて……………	豫三 村井恒典(三)
社會生活……………	豫三 淺田英暉(六)
◇先輩寄稿	
所感……………	高橋長次郎(三)
卒業に際して……………	長瀬凱昭(三)
練習所感……………	同人(五)

(商) (大) (蹴) (球) (部) (誌) (目) (次) (2)

### ◆部員紹介欄

豫三 林 田 毅 (三)

無名氏合作 (四)

### □追想感想集

隨感……………本三 後藤博基 (四)

所感……………本二 神野光司 (四)

昭和六年を顧みて

本一 荒井文男 (四)

思ひ浮ぶまゝに

本科 角 田 昇 (四)

一、春を迎へて

二、悲境の経験者

感想……………本一 田島輝重 (五)

一、序

二、ヘッレヘムへの道

三、懐かしの昔

四、疑

五、四部優勝まで

六、進歩

七、練習と私

八、友

九、大なる愛

十、結び

### □送別文集

送別之辭……………

ながせ……………本三 二階堂謹司 (七)

長瀬君を送る……………本二 神野光司 (七)

長瀬先輩を送る……………本二 水 島 茂 (七)

長瀬兄へ……………本一 淺枝彦太郎 (七)

長瀬さんへ贈る言葉

本一 荒井文雄 (七)

離別……………〔詩〕 荒井文雄 (七)

長瀬兄に捧ぐ……………本一 田島輝重 (八)

### ◆創作 英雄と叔父さん

豫二 熊澤博文 (六)

筆のまゝに……………豫三 大掛隆久 (六)

四部の優勝……………豫三 村井恒典 (六)

拙なき体験……………豫二 小西正夫 (六)

長瀬兄を語る……

本一 角田 昇 (八三)

思ひ出……

本一 森田昭之 (八五)

長瀬先輩とのお別れに臨んで——

豫三 大掛隆久 (八七)

長瀬先輩を送る——

豫三 重見敏之 (八九)

長瀬氏を送るに臨んで——

豫三 村井恒典 (九〇)

長瀬兄を送る——

豫二 熊澤博文 (九一)

長瀬凱昭兄を送る——

豫二 小西正夫 (九三)

長瀬さんの印象——

豫二 後藤虎雄 (九三)

一年を送りて——

豫二 岩崎寛貞 (九六)

### ◆蹴球部回顧録◆

〔その一〕

#### ◆蹴球部時代——

！故兵藤氏を中心として——

川村 通 (九)

蹴球部の今昔(上)……………渡邊 弘 (二四)

保田の合宿……………伊藤健吉 (二七)

### ◆最近蹴球部戦績

◎昭和六年度戦績…………… (二八)

◎全七年度戦績…………… (三〇)

◎全八年度戦績…………… (三三)

◆部員名簿…………… (三六)

◇編輯後記…………… (三三)



### (卷)

### (頭)

### (言)

我が商大蹴球部は、今、緊張の度を昂めつつある。再生蹴球部の健在は、一つの誇りを與へた。其の誇は、我等が望み得る最も大なるものである。従つて、我等は大なる誇りに當然随伴すべき大なる責任を感じざるを得ないのである。

全部員諸子は、蹴球部再生が非常な忍苦、暗然たる涙の結果である事及び指導者が、如何に深き感激を以て終始したかをよく記憶して置かねばならぬ。かうした感激に伴ふ緊張は得て、緩み易いに拘ず、今日も持續せられてゐる。寧ろ次第に緊張の度を昂めつゝ、我々全部員の目的とする所に向つて、急速度に近寄らんとしてゐる様にさへ思はれる。

仰げば高き先人の功、なつかしき蹴球部生活の思ひ出を永遠に我が物となすべく、欣然として最後まで努力せられん事を願ふ。

幸にして今や部誌あり。蹴球部関係者全てを一丸として商大蹴球部の發展多幸を祈る。

## 蹴球部



## 生活を活かして

三 本

### 二階堂謹司

何んの爲に蹴球をやるか——。今更こんな事を事新らしく考へて見る必要もない事かも知れない。何故かならば多くの部員は蹴球部に於て、現在少くとも表面的にはこんな疑問を忘れた様な安心した生活をしてゐるからである。

其は僕達が入部した當時のほんとの所謂蹴球部の搖籃時代に於ては、本科生で蹴球をやる人は極めて少数で、殆んど豫科生からなり、背丈比べにドングリを集めた様なものだつた。それでも始終勝つて伸びて行く蹴球部であつたなら別に部員が何んの爲に蹴球するか考へさせられる事も少かつたであらうが、大休中學校時代に蹴球をやつてゐた人の少い我が部が、少し位の練習で次第に其のレベルを上げて来た他の學校に勝つ好運も見出せず殆んど出ると敗けの状態だつた。それが爲に試合が済んでも集つて考へる事は別に蹴球の技術に就いて云々するのではなくて、寧ろかゝる弱い蹴球部生活を、何が故に續けて行かねばならないかに就いて話す事が多かつた。又時代としても此の頃は未だ資本主義社會を怨む社會主義思想の流行してゐた時代なので、半ば英雄的の氣持で殊更に、はつきり蹴球をする意義が言葉で言ひ表はせないのを理窟で攻撃した人も時折あつた。何かはつきりした蹴球をやる意義、又は論理が要求されてゐた先輩が来て馬車馬的にやれと云はれても、そんなまるで雲を掴む様な言葉を信んずる事が出来なかつたのが當時一般の蹴球部員の考へだつた。こんな時に豫科生より考へる事の多い本科生がゐる馬鹿の様になつて安心して一生懸命に蹴球をやつてゐれば、部員も幾分あの人もやつてゐるのだからと別に心配しないで續けてやるだらうし、又少くとも本科生が馬鹿になつて安心してやる以上は幾分蹴球をやる信念らしいものもあるだらうから殊更に心配する苦勞性の部員

には此の氣持を傳ふれば又安心してやる事にもなつたのであらう。

所が此の時はこんな本科生がゐなかつた。故に豫科生で勝手に試合をやつて勝手に負けて各自で勝手に心配してゐる貌だつた。こんな工合に部員がふらふらしてゐる時には練習も力が入らず充分に爲されず、試合は大低負けで東京學生リーグに於ても二部から三部、四部と釣瓶落ちに落ちて行つた。弱り目に祟りめと云ふ言葉の正しい事をまざ／＼と味はつたのは此の時の事であつて、部員は一人抜け二人抜けと弱い不愉快な蹴球部に愛想をつかし、他の自由な晴れやかな生活に逃げて行つた人が多かつた。四部に落ちた時に後に残つた人々はと見ればそんな技術はうまくななくても、少くとも弱くして置いて捨てるのを男の義理でない。何んとか回復させなくては、顔が立たぬと考へた人、又二年か三年か蹴球生活を續けてやる中に其の意義に思ひ當り幾分安んじた氣持になつた人、又負けてもほんとに蹴球の好きな人々であつて所謂比較的氣の合つたあまり理屈にとらはれない人が多かつた。此等の人々で最もはつきりした信念を蹴球生活に見出し皆を導く人となつたのが長瀬であつた。四部に落ちる迄と云つても皆が徒手傍觀したのでは勿論なく、もがきながら落ちて行つた貌で此の逆流に棹を取つて船の方向を變へやうとしたが皆の調子が合はないので涙ながら落ちて行つた。然し更生の意氣物凄く眞剣なる努力に依つて四部陥落の翌年は辛うじて三部に返り咲き部員一同は此の好調を、又上向きを心から喜び合ひ益々氣を合はして精進したので、再び昨年度は二部の古巢に漸く歸へる事が出来た。此の間に於て貴い体験は部員一同の中に得られてゐる事であらうし、又此處で改めて述べない事にするがかくの如く曾つては大いに議論され、又云々された、何故に蹴球をやるのかの問題は、此の頃乃至此の二三年には問題にはされないのは前にも述べた様に、蹴球部が伸びてゐた事と蹴球部の主宰者が長い間眞剣に蹴球をやり此の間に意義を見出す事が出来た得た事、即ち蹴球を落着いてやり得る信念を得る事が出来て、部員全体も落着いて之に従つてやる事が出来る様になつた事に原因する。

故に部員も最近はこの様な氣持でこんな事の爲に蹴球をやるのだ。蹴球をやればこんな爲になるのだ。位の假令は

つきりしなくても各自で主宰者等の考を多分に含んだ或る考へを持つてゐる事であらうと思ふ。

其處で今茲に事新らしく蹴球部生活の意義に就いて考へ直して見る必要が何故にあるのか。少くとも現在部員がそんな事を求めやうとしてゐない時に殊更に述べる事は痛みを忘れかけてゐた古傷を突つついて却つて迷惑な事をする非難を受けるかも知れないが自分はそんなに考へない。寧ろ今こそ之を今一度思ひ直して、今後の部生活に力を與へる、又安心立命を與へる素にする必要があると思ふ。

人の一生に於て何んの爲に生きてゐるか云つた事に就いて、誰しも一度は疑問を抱き、凡そ自分で勝手に考へある信念を得て其を根本にして日々の生活を通じて其の信念を思ひ返へして附け加へたり、考へ直したりして段々とより確かな信念にして行く事と思ふ。勿論考へない人、忙しい人は進む事が急で考へる事もなく敢へて考へる事を非難するかも知れない。然し進む事の出来る中は問題はないが、いざ衝突したり行きづまつたりした時にやり直して見る爲にはもう時間がない。仕方がないと諦めねばならなくなり、諦めきれないで苦しむ人も出て来る。假令はつきりして誰にも通用する様な信念はそんなに容易に得られないかも知れないが、少くとも可成り自分で考へ又考へる癖をつけて置けば自分丈の考がぼんやりでも得られて、之が次第に伸ばされて行く事になる。之と同じ事が蹴球部に就いても云はれる。蹴球部が四部から三部へ三部から二部へと旭日昇天の勢にある時には、別に問題は無い。然し一度何か事が起つて行づまりを生じた場合に信念も何もない時には忽ちくずれて仕舞ふ事明らかだ。泡を食つて考へて見た所で急にいゝ考へも出まい。涙を吞んで再び下向きの動きに身を任せるのも亦大なる犠牲を必要とし、我々として忍び得ない。落ちる事もなくては上る事もないと云つてなるがまゝに任せんとする忙しい人には却つて其の主義に逆ふ事になる。少くとも茲に理性あり考へる人は再び我々が曾つて体験した如き大きな犠牲を拂ふ事なくして、過去の犠牲に於て得た貴い体験を根本にした或る信念を思ひ返へして、出来る限りはつきり今一度擱んで、更に此の傳統的な信念或は精神を受継いで之を伸ばして行く所に、大いなる意義を見出す事が出来ると思ふ。

ふ。

こんな信念を考へ直して此處に述べれば、蹴球が好きで青春時代に若々しい元氣を大いに此の蹴球に依り自由に一切を抱擁する自然に親しく接しながら發散して人生の春を謳歌する人々には、蹴球を元氣でやつて居ればこんな事も考へ得られる様になるのだなと半ば副産物的の意義に考へられて、若さを楽しむ蹴球をより以上、元氣一杯で楽しむ事が出来るであらう。又人生の春を楽しむよりも少しでも老後の爲になる生活を自由に何んでも体験出来る。又修養出来る此の學生時代にやつて置きたいと考へる人、否少しも意義ある生活を又考へのある生活を爲したいと考へる人には此處に述べんとする信念を讀んで、同じ蹴球をやるにしても、こんなに考へてやる人もあるのかなと今後の其の人の考への中に、此の信念が少部分か或は大部分か又直接に間接に入つて来る。そして益々今迄續けて来た蹴球生活が止められなくなり、益々此の生活より信念の糧を得やうとする。即ち茲にこんな信念を改めて述べれば、蹴球をやる事にはこんな考も得られるとなる。そして全然こんな事を考へない人にはかゝる考へ方もあるのかと云ふ事になり。これに近い考へを得てゐる人にはさうだこんなにも云へると云ふ事になり、何にしても部員全体が今後も尙一層安心して力強く蹴球をやる事が出来、又躓かうとする蹴球部を正しい歩みに援け、誤り進まんとする道行きを正しくする。そして更に此の信念を伸ばして行く事も出来ると思へられるので意義を認めて、茲に蹴球をやる信念に就いて述べて見たいと思ふ。

紀平先生は確か昔の武士は武士道的訓練に於て「何くそ！」と常に「自己を顧る」の精神を体得し、人間として歩むべき道を正しく進んで行くべき修養を爲したと云つてゐられる。固より兩者は決して二つと分たるべきものではないが、何れにしても此の武士道的訓練こそ、人間を正しく歩ますに大いなる効果を與へた事を、云つてゐられる。蓋し之は我々として大いに味ふべき言葉であると考へる。古の武士道的訓練は現今に於ては、所謂スポーツに見出す事が出来る。古の武士道精神こそ我々の唱ふる所のスポーツマンシップである。又小さく蹴球精神である何が

故に蹴球をやる精神が古の武士道に通じ引いては、人間の道に通ずるものかを考へて見たい。

◎蹴球に於て一つの小さな技を獲得するにも決して容易な事ではない。即ち單にキックに上達しやうとしても容易に出来ぬ。何度も練習して之でもいけない。彼れでもいけない。今のは少しよかつた。今一度やつて見ようと云つた具合に、何度となく繰返して練習する中に次第にうまくなつて来る。即ち一度失敗しても之にへこたれる事なく「何くそ」の元氣で頑張り続け、何度となく考へ直しては、敵となるべき人の、或は味方の人のより秀でたるキック振りを見て自分の其を思ひ直して磨いて行く。之は決して容易な事ではない。況してこんな一にして容易に得るを得ざる技のその他数々例へば、stop, head等併せた蹴球。又かゝる個人的伎倆を再び調和よく、意氣投合さし纏つた一体として同じ様に絶えず續けて精進して居る他校チームと試合して勝たんとする。此の蹴球は決して容易な事ではない。如何なる競技に於ても他の相手と競争して始めて其の競技を爲すにより大なる意義が認められる。此の競争の激しい蹴球に於て蹴球の技を練り一致して、試合に優勝する事は容易でないと同時に、之を爲さんと努力する所に又大いなる意義が存在する事になる。試合に勝つと云ふ事は、一朝一夕に簡単に出来る事ではない。簡単な個人kickから出發して此等を調合綜和せしめて、組織ある纏つた強い一体となす事は、一つの技を練習するより以上の困難さを伴ひ、それ又又修養にもなる。常に自分自身を顧みて、不足な所はないか伸ばしたい所はないか、他人に劣る點はないかと考へて見る。即ち正しく蹴球をやり、眞剣に蹴球をやる以上は、常に我と我が身に反つて我を強めて他の人の短を補ひ自分等のチームを強くして敵を破らんとする。そして決して他の人に自己の短を補ふべく、不味さを求めたり、或は敵を味方以下の實力に下さんとして、あらゆる奸策を用ふる事はしない。敢へてかゝる事を爲す人は眞に、蹴球をする人と云ふ事も出来ず、大いに進んで蹴球を爲さなくてはならない人々である。勝ちさへすればよい、「勝てば官軍」の古言に大いなる味方乃至後援者を得たとして勝たんが爲に一切をと意氣込む人も自ら出て来る事ではあるが、又勿論勝つて始めて總ての眞理なる事正しい事も認められ、負ける間は百萬言の

名言を用ひても實際勝てないではないかと云はれた時にぐうの音も出ない事にもなる。即ち云ふ事は眞なる事であつても他の事情の爲に勝てない場合もあるだらう。又眞なる言葉を知らなくても好運の波に乗つて勝つ事があるかも知れない。だからと云つて常に好運を求めたり、或は不正なる奸策を用ひて不本意ながら勝つと云ふ事は、永遠の勝利では勿論なく、又快き勝利ではなくなり、勝つても負ける事になる。即ち永遠の快き勝利。又眞なる永劫の勝利は常に自己自らに反つて思ひ直し見直して磨いて行き、相手には常に寛容なる襟度を以て對し正しき道への一歩一歩をお互で歩む事に於てである。自己の不足を補ふべく、他に求めたり、自己の弱さを償ふべく相手を陥入れる事なく、お互が各々全体の一員として、自己の分を又務を屢々考へ直しながら盡して行く。自らを磨く事なくして諦め唯之を他人の長するに頼り、以て全体としての勝利に與り自分こそ勝利の唯一の殊勳者としてゴマカシ威張らんとする人は、寧ろ蹴球の如き團體競技は爲すに憚せずして、個人的鍊磨を要求せられる。個人競技に歸へるべきであらう。自らの努力を擲つて他の力に頼らんとする人の加はる團體は、此の人を啓蒙して導かねば遂に此の團體は破れる事必定だ。又相手に奸策を弄して、勝得た人は、又團體は近き將來に敗北の憂目に遭ふ事又必定だ。勝利の秘訣は正堂堂々の陣を張り、公明正大フェアプレイに生くる所にある。茲にスポーツの又蹴球の實に大なる意義があり、且つ古武士道精神に通ずる所である。眞にスポーツをやる人は正しき道を歩み、自己の本分に忠實なる人である。此のスポーツに於て自分自らに反り、思ひ見直す考へ方、即ち其れが單なる一つの技術であつても、常に自己の技術を他人の其と比較して何は置いても自分の其を思ひ反へしては磨いて行き、人の技術を悪く爲さんとする所はない。否寧ろ相手も充分に技術鍊磨が出来たる様にあらゆる寛大さが拂ひたくなる。更に一つの單なる技術にあらず、チームを形成する一員としても他人に頼る事なく、常に自分が悪いからこそ、此の敗北を齎らしたものと自分に反つて考へ直して大いに自分から改めて行かんとする。此の實に謙遜な態度こそ、最も正しく又常に他人の失敗に對して寛大になつて自分をとがめる事こそ、スポーツに於て、「我に反る」最も有難い体験である。是こそ人

間の道で、スポーツマンの味ひ得又味ふべき意義である。常に自分自らを考へ直して自己の行を導いて行き、始めて落着いた正しい歩を爲し得るのである。

①又蹴球をやると「何くそ」の精神が培はれる。此の何くその精神の歸へるべき所は結局自分自らを考へる事であるが、然し此の何くその中にこそ力強い意氣とか元氣とか或は不撓不屈の精神とかを見出す事が出来る。下手なプレイをして又敵に敗れて黙して意氣地なく引込んで仕舞ふ事も出来ず、「此の野郎」と意氣込む。そして自らを磨き精進を續けて勝利を獲得する。弱いから負けたのだ。弱いものが負けるのは世の常だ。仕方ない事だと半ば諦めて自ら勵む事もしない人は決して自己自らに忠實な人でもなく、安んじた生活の出来ぬ人々であらう。負けてなめるものとふんばる、此の野郎とばかりに深く考へ直して頑張る。而して次第に勝利に近づき、又正しき勝利に赴く。一寸した事に破れ、尻込みする事もなく、常に張りきつて Error and Trial 錯誤試行を續けて行く爲には、スポーツの興へて呉れる此の何くその精神が重要である。

意氣がなくて熱血がなくて何んの青年ぞ。早くより世を達觀した脱俗者流の言を用ひて、眞剣に世の中の事を考へんとする人を笑ふ。又感激し易い人を卑下する人は、憐むべき不具者、青年にして青年にあらざるものである。涙あり。感激のある時代。それこそ青年の唯一の特權にして、青年ならではの持つ事の出来ぬ。然も人生に裨益する所極めて大なる所のものである。稍々もすると感情に盲目的なるものがあるが爲に、一切の感情的なるものを非難するには當らない。青年の藝術的敏感なる良心は俗悪なる社會にあつては、神聖にして清き社會を憧れ慕ひ、不正なる行の後には正しき行に生きん事を痛感し、醜惡偽の世界に於て眞善美の世界を求むる事敏感にして切なるは青年を於いて之を求むべからずだ。青年に正氣を満す所のもは、而して青年を強く驅つて正しきに導き人生社會を正しきものと致さんとする所のもは、スポーツより得られる。「何くそ」の精神であらう。

鳩山前文相がスポーツに就いて語られた中にも、スポーツ精神は寛容と自信を持つ事の二つにありと言つてゐら

れるが、之とても左記の事を別の言葉で述べられたに過ぎない。勝たんがために總てを辭せず。唯ガムシヤラに勝をのみ求めんとする輩の如きは、敢へて寛容なるべき事を忘れる事が多いが、之では眞の勝利に、到達する事は出来ぬ。常に寛大なる氣持で敵に或程度迄譲り、小部分の負ける所はあつても大局に於て勝を制する事が正しき勝利である。正しきものが戦に勝つ正しきものを求めんとして戦が存在する。故に不正を以つて戦に勝たんとする相手なれば破り易きはさて置いて、寛大なる精神に依つて正しさの爲に彼を導いて行く。あらゆる世の中の事に於て此のスポーツに於て得られる。寛容の精神の如何に大切であるか。寛容或は謙讓に於てのみ人間は正しき道を歩む事が出来る。プレイに自信を持つ事は必勝の鍵である。此が爲には絶えざる懸命の努力をしなくてはならぬ。努力をしないで自信を持つと云つても無理であらう。誰にも負けてなるものか。此の野郎馬力で頑張る。何事を爲すに當つても此の意氣や愛すべしだ。

凡そ此等は所謂蹴球部生活と云ふ団体生活をする事に依つて、他日社會に出でてからの社會生活の訓練をして置く。即ち社會生活に於て必要なべき諸要素を全く其の縮圖である部生活の中から得る、或は又此の部生活を通じて、社會生活の理想状態に考へ及ぶ事等が、部生活の唯一の意義なりと、從來屢々考へられて來たものであるが、此等の事々は上述の事を纏めて云つたに過ぎないのである。纏めて言へば社會生活を爲すに必要な諸種の要素を得る。即ち人間としての道、進むべき人間の道を考へ到る事の出来るものが即ち蹴球部生活と云ひ得るのである。

②更にスポーツを爲して得られる貴いものとして、健康性に伴ふ明朗快活性である。一點の曇りのない鏡は顔の如何なる細い點迄残す所なくありのまゝに示して呉れる。明朗快活なる性質の人はありのまゝの世の中の事をそのまゝ映す事が出来る心に陰慘な曇りのある人には、その人の色眼鏡を通じて世の中が陰慘に見易い。然し我々は單に明朗快活になりたいと思つても容易になれるものではない。それには信念が確かであつたり、或は健康である事が必要である。健康なる事こそ人間から暗い所を除いて明朗にする重大なる要素である。先づ健康にする。即ち形を

整へる事が心迄整へしめると等しく、体が健康であれば別に僻む事もなく、心迄健康であり得る。病ある人の如く世の健かなる人を羨む事もなく、又世の何ものかを怨む事もなく、寧ろ感謝の氣持が湧いて来る。蹴球をやれば健康を保つ事が出来ると言ひたいが、然し蹴球をやつて体を毀した人には此の言葉は肯はれないらしい。健康を損しても此の害した健康を害しない前にも増した健全さに、蹴球に依つて得たる精神的のもの、即ち信念や信仰力に依つて齎らす事の出来る人は別として、否之こそ求むべき眞の境地かも知れないが、自分は心迄毀して蹴球を続ける事は危険性を伴ひ易いと考へる。即ち別な言葉で云へば、蹴球は一面に於ては健全なる体を得る爲のものと考へた。だからと云つて少し苦しいから練習を休むと云つた、所謂鍛錬を志さないで直に降服して仕舞ひ、体をより強めて行く事に心を注がない人は排撃すべきだ。即ち程度の問題で必ず或程度迄は精神力に依つて此の野郎とばかり頑強り、張りきつた時は少しの過度なる運動も何等体に支障を來さず、寧ろ其が爲に次第に体も強く鍛錬されて來る如く經驗に依り考へる。此の點より精神的に弛みの來た時に体を毀す事が多いと云ふ事も出来る。醫學の方で如何なる程度迄は体が精神的なものでもちこたへ得るか。即ち体の健康性が激しい運動に對して、持應へ得る弾力性は如何なる程度であるか。説明出来るかも知れないが然し極端に精神的なるものを主張する人々は精神療法のある如く、一切の病は精神力に依りて癒す事が出来ると説き、殊に禪宗門の人々は精神的のものを極端に強調してゐる様である。各自で体の弾力性も經驗を通じて考へられ得る事であらうが、常に張りきつて、又同時に自分は運動してゐるとの強い自覺の下に充分に注意して節制に務むれば概して体を毀す事も少く、否、益々蹴球をやる事に依り健康性を増進さす事が出来得ると考へる。節制と云へば若い時代は体の健康なるをよい事として、老人等が見ると冷汗を流す様な危険な事を平氣でやる人があるが、然し之が英雄氣質から生ずる所の意氣及び元氣ある點を強める爲に爲すものであるとするならばかゝる點は充分に蹴球生活自体の中に得られる故に、蹴球生活が自由に又大いに出来得る様にかゝる半ば危険で亂暴で、無節制な行爲は寧ろ慎しむべきであらう。蹴球をやつて得られる有難い

修養訓練の爲に、又自分の大目的實現の爲には好きな事も止して此の修養が充分に出来る様に務める事が蹴球人の眞の氣持であり、正しい行ひであらう。此の常の精神的モリ／＼と絶えざる節制とに依つて必ずや蹴球をやる事に於てより健康さを得る事が出来ると考へる。更に明朗快活である爲の他の原因は前に述べた所の蹴球を眞にやることに於て人間としての道を悟り得、然も強く此の道を進んで行く様になるとの強い確信、或は信念を持てば益々安心して深く眞剣に、蹴球生活をする事が出来る。即ち自分として間違つた歩をしてゐるのではない。否寧ろ理想に近づくに最も確實にして、近い方法を取つてゐるのだと確信する時に、蹴球生活をする事が愉快になり。安心して來て自然と明朗になり、快活性が浮かんで來る。少くとも自分の日常の生活にしっかりと意義付けが爲し得られた時、即ちかゝる信念の下にかゝる態度で生活するのだと凡そ確然とした考へが出て來た時に、其の人は可成り安心した生活をする事が出来る。又力強い一歩々々を踏む事が出来ると考へる。假令其が獨斷的であるにしろ自分であらゆる場合から考へて、間違ひはないと爲し得た、信念に沿つた生活を毎日送る事が出来る。人はその生活を樂しむ事が出来る。即ち朗らかに其の生活を送り、殊更に不必要にも人を怨んだり羨んだり別に不安を感じたりする事なく、落着いて總ての事物を正しくありのまゝに眺め、よろしくない事物に當つては新らしく改めたい事を思ひ、結構なる事は心の底から楽しみ賞讃する事が出来る。

朗らかな生活をすればする程、人を怨む事も羨む事もなく暗い點も偏屈な點もないので、自分の缺點も直に解り早く直さん事を思ひ次第に正しい道に直つて來る。そして益々朗らかさを感じ暗い所もなく奥の奥、裏の裏を考へて人を憎んだり疑つたりする事もなくなり、次第に人からも仲良くされて來る。或は人から悪く云はれられつつも信念強ければ動かす、世の中が明るく見え出した頃に、即ち總の物事が快く嬉しく見えたり、考へられたりして幸福なる自分に氣が付き何かなし神の存在を思ひ、感謝したい氣持が湧いて來る。かくして常に不幸をかこつ人、淋しく暗い人々が氣の毒になり、決して憎めなくなり出来るなら何とか救つてあげたい氣持になつて來る。容易に入らなくて救ふ事が出来る物ではないかも知れないが、然し次第に佛様の御慈悲に會つた様な神の恩寵に巡り合はせた様

な氣持で人の爲に何とかしてあげたい様になるのである。人の爲に少くともなり出來得べくんば人を救けんとする事は唯その人の修養に待つ外はない。その時に自分は懸命に修養して、立派な人間になつてあらゆる人々を出来る限り廣く救ひたくなつて来る。之が亦唯一の重要な蹴球人の得る意義であらう。此の邊に社會生活の理想的なるものも潜んでゐる如く自分は考へてゐるが、尙今後此の點は十二分に考へなくてはならぬ事であらう。潜越な言分ではあるが、クリスト教の愛とか、眞宗の感謝の生活、御慈悲等總て上記の如き生活に信仰的に、高僧名僧の言を通じて、或は多くの佛の御慈悲の有難い實例を擧げて以て直接に入れしめんとしてゐる如く考へられる。

以上で大體自分の考へてゐる蹴球生活より得られる意義に就いて、極めて抽象的に根本的な事のみを亘つて述べて見たがその外人々の口にする色々な意義も總て此等の事より演繹される事とは考へるが、多くの部員に蹴球生活を爲し終つた時に述べたい様な、かゝる數々の右の言葉を今から始めんとする人に申述べる事は、案外自分の所期を裏ぎつて之丈が蹴球生活の意義かと諦められたり、或は安心して仕舞はれると聊か慌てたくもなるが、然し幾分人間として根本的に歩む道として蹴球生活の意義を考へんとした、此の文より蹴球生活をしてゐても決して人間として誤りはなく、寧ろより正しく又より近い『不踰矩』への道行きであると考へて、今から此の蹴球部生活を始めんとする人は安心して此の生活に入る事と爲し、又今尙此の生活をやりながら、不安なる人は之で安心し、又落着いて生活してゐる人は、こんな考へ方もあるなら、今後益々安心してやつて行く事にと云つた事になれば、大いに此の稿の意義ありしと考へられる。

かくして皆が根本的に確かなる信念の下に、安んじて蹴球生活をする時には如何なる危機も容易に此の部を毀す事なしと考へられる。意圖する所宏遠にして内容粗末に失するの甚だしき非難大いに當るかも知れないが、更に此の後稿を新にするに次いで内容を豊富に致したいと考へる。

更に文末に大學生活の本質と、蹴球部生活に就いて考へ、即ち最近しきりに唱へられる、大學教育の知育偏重

人格主義又德育を重要視すべし、等の言葉を蹴球部生活との關係に就いて考へて、聊かなりとも大學生活に對して此の蹴球部生活の意義ある所を明に爲し、更に「我々の生活を力強いものと爲したい。

普通教育は知育・德育・体育の三つに分たれてゐる如くである。大學に於ては既に其迄の段階、殊に高等學校時代に所謂德育体育の凡そ事了へた人を教育する所と考へられ、爲に大學は此等健全なる德育なり体育なりの土臺の上に専ら知育を植ゑ付け、所謂學理を深く究め徳体の三者を揃へ持つ完全なる人間を作る學府なりと考へられてゐた。然るに文化の發達に伴ひ、科學研究の領域が廣く深くなり、短日月で科學一部門でさへも容易に究める事が出來得なくなり、一見するに極めて明らかで容易で便利な科學の研究が益々強調され、同時に早くより之に携る人多くなり、遂には德育、体育迄も忽にする傾向が生じて來た。此の反面、高等學校の亂設に對する高校卒業生對、大學入學者の比率が大となり、劇しい競争が行はれる爲に、所謂人格修養の最も大切な時期の高校時代は、大學に入學せんが爲の已むを得ざる受験準備に忙殺されて、落着いて充分に人格修養、即ち心身の鍛錬に勉むる事が出來なくなつて來た。かゝる過程を通つて來た大學學生に如何程宏遠な學理を説いた所で、頭ばかり大きくなる人の様にフラフラして早晚倒れて仕舞ふ様になるのである。丁度砂上に立派なる樓閣を築くに似た所のものであらう。極言すれば馬鹿か氣狂ひに利刀を興へた事になる。此の點は我々商大豫科に於ては其等高校時代に比較して、十二分の餘暇を持ち、大いに人格の涵養に盡す事が出来るのである。一面に於ては科學、即ち學問の研究に一面に於ては人格体育方面の練磨を爲す事が出來得て、始めて完全なる人間と爲る事が出来るのである。

成程殊更に運動しなくても、本を読み、博く學んで、而して慎しんで之を考ふれば、人格方面の修養も出來得るかも知れないが、稍もすると科學研究を深めると同時に、此の用ひる抽象的言葉の便宜なる事と、明瞭なる事とに先を急がれた貌で、其の具體的なるものを忘れて「之はなかくいゝ、よく解る」なんて事になつて一も二もなく何から彼迄科學で事足り、又本を讀んだ知識で事足りるとすれば、とんだ大間違ひの基となると考へる。勿論

科學に意義のある事、無くては濟まない事も、今日の向上された文化生活の中の人間の便利なる生活様式を見ても理解出来る。然し科學文ではない別に人格的なもの思惟するものがあるべきと考へる。此の人格的のものにはあらゆるものを讀んで深く考へれば得られるかも知れないが、完全に得る爲には古に於ては武士道的訓練であり、今日に於てはスポーツに依つてであると考へる。眞剣にスポーツをやれば常に人間的修養、所謂徳育、体育は出来得ると思ふ。スポーツが何故にかゝる教育の爲になるかは前段に於て述べた所であるが、此の點よりスポーツこそ今將に過閑視されんとしてゐる教育の中の徳育、体育に資する所極めて大にして、實に意義ありと考へる。稍もすると悪い事を考へる餘暇を無くする爲に、又ゴマカス爲に學生にスポーツを奨励すると學校當局が考へてゐるのであるならば、暗き事甚だしく、且つスポーツを冒瀆するものと云ふべきである。

「かゝる態度で常にかゝる考へで人生は進むべきだ」が蹴球で得られる人格的のもので「それは然らば具体的に如何なる方法手段に依るか」が即ち所謂學問に於て得られる所と考へる。「よく學び、よく遊べ」もこんな所を意味するのであらうし。何しろ運動と勉強共に人間生活には必要なるものと考へる。運動丈で之が全部と考へたら、足らぬ所甚だしきものであらう。唯先づ運動して根本的なるもの、人格的なるものを得て置くべきであらう。

子曰。學而不思則罔。思而不學則殆。(罔昏也、殆危也)此の論語の言葉も此の邊の所を云つてゐるのであらう。科學研究を爲しても、猫に小判にならぬ様注意しなくてはならぬ。

「運動しない奴に何が出来るか」の言葉も此の邊から云ふ事が出来る。第一に意氣あり、元氣あり、我武者らに文句なしで頑張通す。眞に行はなくては氣の濟まぬ所、一も實行、二も實行、一も張りきり、二も元氣で行き、更に第二に常に謙讓な態度で又寛容なる襟度を以て自己自らに反つて考へ直し、己自らをきはめて本心まごころに従つ

た生活をする事等が學校スポーツに依り得られるとき學校スポーツの人間生活に於ける重要性が大いに認められる。此の點に於て學校生活上スポーツの必須性が強調され得る。殊に高校豫科時代に於て。

以上で凡そ蹴球部生活に就いての常々の考へを思ひつくまゝに書き綴つた。人間として、最も意義ある生活の爲に蹴球部生活を考へ、落着いた安心した、力強い歩みを以て此の部生活を今後大いに續けて行き、益々以て自分の生活に人間としての考へを加へて、神の道に近づくべきと考へる。

然し此等の言葉は抽象的表現にして、之丈と云つて諦める事も、安心して仕舞ふ事もいけない。此等の信念こそ又此以上のものこそ！蹴球を誠心から一生懸命にやり、蹴球部生活に感謝の氣持の湧いて來た時に於て、十二分に我がものとなつた。又實のある信念を得る事が出来るであらう。

部員全體が之等の、抽象的なる叙述に信念の力を得て、之に勵まされ導かれながら、熱心に蹴球する人々となり大いに蹴球部生活に感謝する境地に到り、人としての至道に達せん事を衷心より期待して擱筆する。

昭和九年五月一日

——脱稿——





リーグで優勝するチームは幸運である、チームには種々ある。

技術のチーム。体力のチーム。傳統のチーム。熱のチーム。個人的の業又は力に生きるチーム。團體的な結合連絡に活躍するチーム。而して優勝校は兎に角この何れかに屬してゐるに相違ない。

併し此の他に優勝校に共通なる勝因が見出される。それは何れも幸運に恵まれてゐたといふ事である。幸運と云つても僥倖を意味するのではない。偶然に勝つたといふのではない。勝つべき實力を有しながら、戦敗

の涙を呑まねばならぬチームが多い時、優勝した唯一のチームが幸運だといふのである。リーグ戦を控へてどのチームも一様に緊張の中に練習をする。その結果當然に疲労といふ現象が起る。

練習の烈しい程、緊張の期間の長い程、疲労が増加する結果、試合には疲労したチーム同志が相對する事になる。緊張し、練習するチームほど實力は増す。然しその實力は疲労により打消されて行く。此の矛盾を解決すべき積極的な、具體的な、手段はない。

矛盾を含んだまゝ、試合は行はれる。故に疲労の程度が偶々軽い時に試合を爲す事が出来たチームは幸運だといふことになる。即ち比較的良好のコンディションで戦ひ、實力に近い結果を示す事が出来たからである。

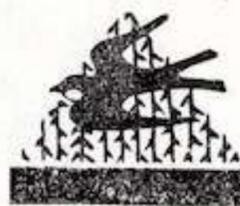
伯仲したチーム間では、斯かるコンディションが頗るものをいふ。殆ど勝敗の分岐點となる。例外的には、試合になると、疲労してゐながら元氣に見えるチームがある。

それは闘争心、愛校心によるカンフル注射を受けたチームである。然し疲労が或る程度を越えてゐると、カンフルは直ぐにきかなくなる。

兎に角、リーグの各部に於て勝つことを得たチームは、何れも絶えず相手方より比較的良好のコンディションで戦ふ事が出来たといふ點、幸運であつたと云ひ得る。

私達商大チームも三部で優勝した。勿論實力で勝つたと言つてよい。

たゞその裏に、今迄に述べた様な幸運が私達を勝たして呉れた事を自覺してゐればよい。斯かる自覺があれば何時迄も勝利の美酒に酔つてゐる氣にはなれまい。小成に安んずる勿れ、理想は高きにあり、その實現の爲め、更に一步を——二部優勝の爲めに進めん——二部に於ける優勝！これが目下の唯一の最高目標だ。——完——



## 煙草の煙

養 一

枝 村 藤 三 郎

どんな事を書いたらいいのか、さつぱり見當が付きません。だから思ひきつてこんな題をつけました。

入學する事に僕が願つてゐたことは、もう一度涙のある蹴球生活をしてみ度いと云ふ事でした。それに對して心よく入部を御許し下さいまして心から感謝して居ります。

過去の經驗（決してそれ程のものではありません）から第一線に立つて働く人々と同様に、縁の下の力持といふ役目が、どれ程大切なものであるか充分了解してゐるつもりです。と同時に喜んで縁の下の力持になる覺悟を持つてゐます。それが何もかも未完成な僕になし得る唯一の事だと信じて。

僕が先輩やコーチから教へられ、又休得した事等をまとめて、本當の蹴球を行ふ爲にはどうしたらいいか？について書かして戴いて終りにしたいと思ひます。

一、各個人が旺盛な闘志を持つこと。

二、各個人が完全に理解し合ふこと。（プレイの上の事は勿論それ以外の點に於ても）

三、最初から最後まで敵に球を渡さず、自分の側だけで持ちつゞけねばならぬこと。

四、その爲に激しく而も粘り強く動くこと。

一と二については省畧し、第三と第四について練習方針といった様なものを擧げるならば、

(1) 比較的短時間の中に出るだけ多くの運動量をつめこむこと。

(2) 練習を實戰的に行ふこと。

即ち常に敵を假想し試合中に起る場合を聯想しつゝプレイすること。例へば一つのキックも味方へのパスと思ひ、相手方のキックは敵のそれであると考へて、その方向、種類等を豫測し、それに對應する處置を取るやうにし、ストップをする時には常にその後から敵が殺倒してくるものと假想して、正確なストップ、その後の素早い處置に注意する等、一蹴一止が機械的な練習でなく、試合中の一部を切り離したものと考へて行ふこと。

(3) 試合らしい動きの中にボールを持ち続ける練習として、シックス・アサイド等を出來るだけ練習すること

(4) 味方のチームの特徴を知り、その特徴に相應したパスの型を作ること。

更に一つ附加へたいことは、グラウンドに於ける練習に熱心であると同時に、理論上の研究を盛にして、それを實際に行ふことである。

以上何か御参考になる點があればと思つて、敢て駄辭をつらねました。



## バックについて

豫 三

村 井 恒 典

この稿を読んで誤つてゐる事は訂正する事によつて、又正しい事はそのままにサッカーのバックについて正しい認識を持つ事が出來るだらうと思ひます。

### 一、基礎技術について

三部二部と上つて來た我部にとつて益々基礎技術を錬磨する事の必要さは言を俟たぬ。いかによいフォーメーションを以てゐてもあやふやな技術しかもつてゐない時には、そのフォーメーションは何時敵の恐怖とはならぬ卓越した技術を以つてゐる。チームはフォーメーションの可否に關らず。強いと言ふのは三部以下に於て言ひ得る。二部以上に於ては相當の粒選りの相手と對するのであるから、基礎技術に加ふるにフォーメーションと意氣の三拍子がそろはねばならぬ。その意味に於て基礎技術は現在の我部にとつて重要なものである。

バックの基礎技術とは何か。曰くキックス・ストップ・タックル、ドツチヘッドの五である事はフオーワーズとかはりあるまいが、特に必要なのは良き判断とダッシュ・シュ・乃ち出足である。

バックにとつて多くの場合、球は敵が持つてゐる。この敵に對して僅かのミスにつけてこんで球を取るのがバックの第一の使命である。ワンサイドカットありスライディングタックルあり様々の方法はあるが、完全に球を制御してゐる敵に對しては、先づいかなるアタックもきくまい。そこで敵の僅かなミスを早く判断する正と最善のウエイに

活動する素早い出足が必要となる。敵のノーコントロールをいくら早く察してもそのすきを素早く利用しないと敵は直にコントロールしてしまふ。最初に於る出足の一步の遅速は後に後の數十歩に及ぶ。バックの最も必要とするのは好判断と出足の時期である。

キックもバックの生命である。如何に巧にボールを取つてもすぐそれをコントロールしフイードしなければ再び取返される危険がある。それにはキック(自由な好いキックを)必要とする。少くとも反対側の *Wide* まで樂にとどく様なキックは持ちたい。之が出来ないとサイドチェンジに際して中間にある味方の労力を必要とし味方はよりへばるであらうから。フキードには二法ある。一旦球をキープして味方に進出の機会を得させるものと、ノンストップでフキードして敵に暇を與へない方法である。勿論両者は一長一短両方を共に使ふ事にその價値は増加するのである。下り目に守つてゐる敵に對しては徒なロングキックはつゝしむべきであり、攻撃的な敵に對してはロングキックで味方のフオワーズを自由に使ふのが上策だらう。フキードイングは兎角亂暴になり易い。五人と言ふフオーズに對する觀念からだらうが、フキードこそ最も丁寧にする可きでないか。善き一本のフキードは得點に最も多き機会を與へ、悪いフキードは敵に逆襲の機会を與へる者だから。而してフキードは自由なキックによる。

タツクルは最も勇敢に慎重に行はる可きものだ。猪突的なガムシヤラなタツクルは敵の好餌である。タツクルを惜むのが悪い事は言をまたぬ。タツクルにも様々の場合がある。逆襲された時には——之は主にフルバックに於てであるが、——タツクルは消極的である球を取る事は第二義的であつて、敵に時間を費させる事が主義である。出来ればタツチに蹴る法もある。睨みあつて時間をつぶす法もある自分が最後の防禦線でなければ球に關せず原則にならぬ程度に敵の身体をブロックする法もある。シュートしつゝある敵に對しては、身を以て飛込むのを原則とする。最近の蹴球の著しい傾向に於て、非常に身体を使ふ事がある。之は最もシユアである。而してその爲に頑強なる肉体を要求してゐる。特にバックは受動的であるから能動的な敵のアタック、ラインに對してより頑強な肉体を

當然要求せらるべきである。

ドツチングはバックに取つて非常にデリケートな技術である。味方が壓迫されてゐる時に一旦取つた球をドツチによつてより前方に運びしかる後、フキードするのは特にキックに自信のない者にとつて必要であるが、ドツチをやりすぎは徒に攻撃時期を延し敵のマークを完全ならしめる欠點がある。バックはいくらドツチに巧であつてもそれにより直接シュートし得點する事は絶無である。遅かれ早かれフオワーズにパスす可きである。どうせパスするなら最善の時期に球を離して、フオワーズを存分に活躍せしむべきである。ドツチして球を弄しすぎる事は往々にしてパスの機会を失ふものであることに心すべきである。

ヘッドの重要性は語るを要しないと思ふ。絶對的なテクニクである。之は我部並に特に筆者の研究課題だと思ふ。

バックに於るストップの失敗はよく敵に一點献上する動機となる。動いてゐるボールを完全にコントロールする事がストップであつてピツタリと止める事は必しもそうでない。ストップの重要性は以上の通りであるが、ストップに餘り力を置きすぎる事はノンストップキックの大なる妨害となる事がある。ストップの上達にもなひあらゆる形のノンストップキックを研究する事がバックの重大なる使命である。

#### 二フオメーション

三人のハーフ二人のフルバックの間のコンビネーションの必要なる事は勿論 LH & LF・RH & RF・CH & CF・LF の連絡の二との連絡等々バック相互の連絡は仲々必要である。完全な連絡によると一加へる一は決して二でなく三にも四にもなる。

三人のハーフの好連絡は攻守共に非常な力である。守つて完全な壁を作り。攻めてはよく敵陣を圍む。一昨年慶應の優勝はそのハーフによると言はれてる程三人の良悪は強大な結果を與へる。ウイング、ハーフの中へよりすぎ

る事は○Eとかち合ふ事により中央は反つて稀くなり、外部は全然無人の境となり敵ウイングに自由に暴れさす因となる。餘りに開きすぎる事はウイングハーフがゴールに對し極外的になり、中央又稀くなり宜しくない三人個々の活動量によつて常に好連絡を保つ可きである。近よる事は必しもよいコンビネーションを意味しない事はわかりきつてゐる。

二人のフルバックの連絡は益々六難しい。全局を見渡せる位置に居る事は、相互の連絡はつけよい事は事實だ。併し五十米以上もある廣い地域を限られた活動量を以つた二人で守るには、餘程コンビネーションがなければならぬ。これで足らぬ所を○Dの進出性によつて補ふのは絶対條件でキーパーの確実性と出足を利用するのは、防禦に於ける穴を少くするに役立つ。○Dの進出性に伴つてバックのカヴァーが必要になる。併しバックメンがゴールカブリーに専念しすぎる時は消極的になりすぎ進出の機会を失ふ懸念がある。ゴールはキーパーの確実性にまかせてバックは敵にシュートさせぬ様にマークにより又ブロックによつて積極的に防ぐ可きである。バックが度々カブリーにまわる様では先ず勝目がないし。カブリーによつて防ぐよりもゴール前で敵をおさへた方が手を使へぬバックによつてより有効である。

ミッドフィールドに於て三人のハーフが活躍する。一方ウイングハーフとフルバック間に連絡が欲しい。ハーフとフルバックによるワンサイドカット外側の二人の適宜なポジションチェンジ、乃ち○EのダッシュによりWHに替る事球のない側のFBが敵のサイドチェンジの球を早い出足によつてカットする事等である。WHとFBの悪連絡は敵のISとOSとにまはされるし。CHとEBの悪連絡は敵のCEの獨壇上となるだらう。

例へば敵のOS Aが球を以つてゐる。味方のWH・Yが之をアタックする。その時FB・ZがぼやくしてゐるとBとAの爲にYは抜かれZまでも軽く抜かれるであらう。之は無連絡の失敗である。一方YがAをアタックした時ZがすぐBをケアすればこの防禦陣は仲々抜かれない。乃ち連絡の爲である。之は良くある。又わかりきつた例である。

がWHとFBの間の連絡の重要性をつくづく悟る事が出来る。又逆襲にさいしてはこの例に於てZがBをアタックする事になる。その間にYは早くバックアップしてBをケアする。つまりYとZはポジションをかへた事になる。各人は單に一のポジションに固定せず多少の流通性が必要になるこの連絡が十一人間の好連絡の單位である。

バックのディフェンスに二法あるマンツーマンとゾーンディフェンスである。マンツーマンには活動量を制限され、相手に追隨的となりつられる欠點がある。そして往々にして反つて連絡をみだし、自分自身でデッドポイントを作る危険はある。併しフォワードにとつてこれほどうるさいディフェンスはないさうだ。

好連絡によるゾーンディフェンスは敵に観破されぬ時は策戰的に勝利を握れる。自分の活動範囲を忠實に守る事によつて、相當堅實に守れるものであるが一旦敵に弱點をしられると連絡的にそこをつかれるから破綻を生ずる。この二法はどちらを是としどちらを非とする者でもない。両者の特長を併用し、よく休得するにしくはない。

これはよく生ずる事であるが、ゴールの傍に後生大切にバックメンが重りあつて一二點のリードを確保せんとしてゐる事がある。餘りゴールに接近して守る事はお互に動きを制限されかへつて悪いものである。心す可き事である。

其他WHは味方のFWとのトライアングルに依り又チャージングボールを放つ事により、又極端なる例に於て○Dがチャージングボールを放つことによりバックメンも間接的に攻撃に参加す可きである。そして之は仲々強力なものである。

バックはフォワードに比して自陣で戦ふと言ふ優越性がある。だからバックはあくまで之を利用しおちつきを以つてプレイを有利に運ばねばならぬ。之はバックの有利な條件である。フォワードにはゴールと言ふ目標があり。之に直接間接近すく様に努力するのであるが、バックの目標は可なり漠然としてゐる。敵のゴールをねらふのは勿

論であるが直接に之をねらひボカ／＼敵のゴールにむけロングキックを放つのは禁物である。だからバックは如何にしてゴムの五人にフキードするかが問題である。ゴールは一つだがフォワードは五つある。この五のフォワードの中何人に渡すのが最も有利であるかを考へる必要がある。誰も彼も蹴り良い方にはけりたいたいの山々だがそれは一方のサイドは閉却される。折角十一人居るのに片方のサイドを使はぬのは勿体ない。敵の弱みのあるそして最もフリーなポジションにゐる。味方に球を渡す可きである。それにはバック同志でパスし合ひ敵の目を眩惑させる方法もあるし、逆モーションの法もある。だが之は高等戦術で筆紙の限りでない。實際に体得するのが最上の方法である。要するに目標が多すぎると言ふ點はバックの不利な事である。第三に多くの場合從屬的——少しこの言葉は當はまらない——事である。球を以つてゐる敵のフォワードが如何なる動作に出るかを見た後にこちらの動作が起る。決して山感的ではならぬ。山の當るうちは良いが當らぬ時は實にボーンヘッドを演ずる。必ず當る様に山感のけいこをつめば良いが、敵の動作に對する從屬的の動作は第一歩の優先權を敵に與へる事になる。之バックの不利な條件その二、フォワードは五人居る。誰かとして呉れるから、とにかくれば良いと言ふのはバックの有利な條件のようだが、そも／＼その觀念が誤つてゐるのであるから、問題にならぬ。以上の事は變な言ひ方だがバックと敵とのフォーメーションである味方の有利な條件を活用し、敵の有利な條件を封する様にし、敵の裏へ／＼とまはるのはバックメンの頭腦的プレイであり之をうまく實行する事は戦を有利にみちびく所以である。

バックの任務は敵に點を入れさせない許りでなく、フォワードに對してより點を入れる様に助けるのも重大な役目である。

### 三、意 氣

「技が伴はず只熱に走る事は往々にしてラフになる」之はこの道の先覺者の後藤氏の曰つた名言である。我々は今

までに随分ラフな相手と試合をした。商大自身ラフになつたと言ふ事は、自分の耳に一寸入つた言である。或はそんな點がなきにしもあらずの感にうたれる。事實我部の二年間の優勝は非常な熱を以つてなしとげられたのだ。プレイに於て僅少の差異しか認められぬ二校の間で、意氣は大切な戦勝へのキーである。意氣で壓倒されたチームはプレイを充分に發揮できない。我部は確にこの二年間非常に氣が強くなつた。喜ばしき次第である。之はバックに止らずチーム全体の事になつたが、餘り意氣にたよりすぎる事はプレイをなほざりにする害がある。如何に意氣あれども段違ひのゲームには勝てぬ。表面に表れる意氣よりも内燃的な意氣、相手に壓倒されない意氣の養成が大切である。意氣と個人プレイと連絡の三拍子揃ふ事が最強になる所以である。意氣がその三の中で第一義的のものなる事は、いなめないが三つとも並行して進歩するのが理想的である。

バックとフォワードを分けて論ずるのは十一人からなるチームに不都合かもしれぬ。だが便宜上分けた。このバックの特徴を見る事は、フォワードにもよき参考となるだらう。誰かフォワード論を書いて参考に供してほしい。





# 社會生活

豫 三

淺田英暉

吾々は日々蹴球部員として、一個の社會生活を營んでゐる。今その部誌の創刊せらるゝに際して、社會生活の意義及びその進展を考へる事は無意味ではないと信ずる。

遙かに遠く人類生活の歴史を省みる時、吾々はその初期集團生活を營んで居た。當時吾々の祖先はその集團に屬しつゝも各個に自給自足經濟を營んでゐた。——その衣食を野に山に、將又水に求めて——、乍然流れて止まざる時の経過と、外界の變化は遂に人類をして物々交換の形式を採らしめるに至つた。(アダムスミスは此の點に就いて、人間には生來交換慾なる慾望があり。それを満足せんが爲に此の形式をとるに至つたと述べてゐるが)斯うして彼等の經濟生活は、日に月に進み遂に今日見るが如き状態に迄達したのである。

かく人類の經濟生活が愈々複雑性を増すにつれて、次第に單純なる意味の集團生活より、錯綜せる生活に即ち完全に近い社會生活に進んだ事實は否み難い。最早單に自己のみを考へては、換言すれば自己以外の一切の外界と交渉には暮し得なくなつた。大きく社會人として生きんが爲には、社會に較べて餘りにも小さい存在なる自己を犠牲にする場合も起つて來る。然る時この現象を餘りにも重大視した者は、社會生活は個人の犠牲に於いてのみ行ひ得ると極言する者もある。

一体、社會生活とは協力の生活である。自己とその屬する社會との完全なる協力、それは果して全然自己をその社會の外に犠牲として退かしめる事に依つて行ひ得るであらうか?——。

人間は殆んど絶えず同胞の助力を要するが、而も此の助力を彼等の仁愛からのみ得んと期待するのは、徒勞である。寧ろ其よりも彼が自己の利益となる如く、他人の自愛心を刺戟し、而して彼が他人に求むる所を、彼の爲に爲す事が彼等自身の利益たる所以を示し得るならば、其の方が其の目的を達するに近いであらう。

抑々吾々が日々食事を爲し得るのは、農夫、屠獸者、醸造者の仁愛に之を俟つのではなくして、彼等が彼等自身の利益を尊重するからである。吾々は彼等の人情に訴へないで、彼等の自愛心に訴へ、彼等に對して決して吾々自身に必要に就いて語らないで彼等の利益に就いて語る。

苟も乞食でない限り、何人も主として其の同胞の仁愛に頼らんとする者はない。かりそめにも吾々が自己を社會より退かしめる時、吾々にはこの社會の發達を促す事は出來ない。吾々が社會人たる以上。その屬する社會に何等かの意義と役割を有して居ねばならない。否有して居るからこそ吾々がその社會に屬してゐるのだ。

自己犠牲のみを至上の美德と考へて、自己の社會に對する奉仕に於いて被る利益(物質的精神的を不問)即ち恩恵を拒絶するが如きは、社會の圓滑なる進展を亂すものである。前に述べたる農夫の場合に於いて、彼が自己犠牲の極その勞働と交換に得られる何物かを、例へそれが自らの生活力の源泉ともなるべきものであつても、固く辭退する時、それは社會美談として、皮相的に善行、篤行と讃へられるであらうが、然し一度慎重に事の結果を眺める時、農夫達のそうした善行は?、彼等の生活を如何に制約せるか? 生産者が滅びんとする社會の將來は?

x

かく考へ來る時、吾々の社會生活は偉大なる仁愛全智の實在、即ち神の御心に反する不必要、不自然な自己犠牲よりも、神の人類に與へ給うた自己心、自愛心の巧妙なる適用に依つてのみ圓滿に進展するのではなからうか?



所感

高橋長次郎

商大の運動部には調子がある。調子がよいと相當な強敵も忽ち斃す。調子が悪いと容易に弱い敵にも敗ける。調子なんかふつ飛ばして最後迄喰ひ下つてでも行かんとする意氣が欠けてゐる。商大のあらゆる運動部を通じて此の事が言へると、同時に他校より著しく商大に之を認むる事が出来る。即ち商大の運動部には、所謂、fighting spirit 或は反撥心、意氣、熱が欠けてゐる。戦の前半調子がいゝと其の調子に乗つていゝ成績を納めるかと思へば、一寸した前半の失敗に最後迄最早駄目だと利害の打算の早い點から試合を振つて仕舞ふ事がある。「何獲」で最後迄眞剣に意氣で頑張る。カッタつて、無我夢中で頑張る事が絶對的に必要である。社會に出でて此の反撥心のある人、又 fighting spirit のある人こそ大事業を爲す事が出来る。故に我々は、學生時代に運動部に於て、此の闘志を養ふべきである。「そら火事だ」の瞬間に未だ擔いだ事もない重い荷物を一人で背負ふ。火事は一の非常時である。此の非常時に出す事が出来た力を自分が出したいと考へる時何時でも出せる様にする爲に我々は練習なる形式を取る。日本刀を以て唯無暗矢鱈に力任せで庭木何本を斬つても決して斬り得ない時、何を！ と、腹から出る反撥心で之位のものが斬れなくて何だとむきになつて斬り下ろした瞬間に思ひも寄らない大木が足下に斬り倒されてゐるのを見出して此のカツとなつた時の不思議な偉力に驚く。此の力が人間の社會生活の中で常に事に當つて出す事が

出来る様に爲すべく運動に於て全身是闘志、闘志満々たる事を養はねばならぬ。

然らば此の反撥心は如何にして休得出来るか。其は唯、「猛練習」にあり。へばりにへばらして、更に練習さすと、何を此の野郎と反撥心を起す。へばつて動けなくなつた時怒鳴る。頭から怒鳴りつける。大抵の人がカツとなる。むきになつて自分の休の事も忘れて、あなたまかせで無我夢中で練習する。之が大切だ。練習がつらいとて止めたり、叱られたから、又怒鳴られたから腐つて仕舞ふ様な人は何をやらしても駄目な様に、當然こんな人はオミツトする。此んな練習を續けて行けば試合に出れば直に休の中に燃ゆる闘志外に溢れ、食ひ下つても最後迄唯ガムシヤラに戦ひ抜く、強引なるスピリットが出て来る。此の反撥心は理屈ではない。唯猛練習に於てのみ得られる。へたばつても走る。へたばつても走る時其の意義ある練習があるのだ。練習は此の意味では苦しい。自分は外國に於ける楽しむ爲のスポーツを喜ばない。少くとも外國に於ては楽しむ爲に起つたかも知れず、又續いて行はれてゐるかも知れない此のスポーツも我國に入つた瞬間、苦しむ爲の運動競技に變つて來た。我が國では心身の鍛練の爲に之を行ふのである。少くとも學生が之を行ふ場合には然り。之が我國の特長である。かくして始めて運動を學生時代に爲す意義が生れて来る。此の點より練習が苦しい事は始めから十二分に認むべきであり、又苦しくて始めて此の練習が爲すに重大なる意義を齎らすのである。

練習に於て爲されるべき事は二である。一は右記の精神訓練である。他は理論技術の研究である。後者の必要なる事は勿論である。然し後者も前者即ち精神があつて始めて生きているのである。火事に於ては荷物の持ち方を又日本刀で木を斬る場合には其の斬り方を研究する事が即ち、理論技術の研究である。蹴球に於てキック、ヘッドストロブ等の方法を研究するのも之である。此の他に猛練習を重ねて得たる反撥心、闘志こそ前者即精神的訓練であつて之あつて始めて其の理論技術の研究も役立つのである。概して理論が出来ると安心して精神的のもの研究を忽にする。之よりも或程度迄の理論の欠陥は、又不足は、スピリットで補ふ事が出来る確信の下に此の精神的訓練こそ

より重大なる練習の本質である。勿論一方を取つて他方を捨てる事は不可なれども、精神的のものの重大性は充分に認むべきである。殊に我が商大に於ては然りである。

ポートメンが力漕に力漕を續けて今少しも漕げない時に、死んで仕舞へと怒鳴り散らして更に力漕をさした時に始めて眞の力が出て又文句なしでよく調和して素晴らしい舟足が出る。自分と云ふものを忘れて、コーチヤか或は能手に身を任して仕舞つて唯夢中で漕ぐ時に、調和ありチームワークあるチームが出来来る。之こそポートメンの最終の境地である。之を早く何時でも出せる様に猛練習が必要である。

猛練習に猛練習を重ねて、力強き闘志満々たる食ひ下つても負けぬ意氣あるプレイヤーにならねばならぬ。

「坊主になれ」豫科生徒位で髪を伸ばす氣持が分らぬ。頭の事等は氣にもかけないでガムシヤラな力強い人間でなくてはならぬ。小さい事の様だがこんな事から先ず入つて行かねばならぬ。學校で一年生を強制的に坊主にさしてゐるのは全く當を得た處置で二年三年と、實行して豫科の間は少くとも坊主のまゝである事がいゝ事だ。少くともポート部では、昔は全部坊主だつたが今頃は、實行されない。然し對校チャン文は必らず坊主にさせるのだ。坊主の方が實に氣輕で晴々さへする。頭の事を氣にかける人は弱くていかん。

X X X

麻雀、撞球は成程面白い遊びだ。然し此を爲す人々の空氣爲される場所の空氣がいかん。此の點で運動を爲す事と相背馳すると考へる。即ち麻雀、撞球其のものは遊びとしては悪くないが、之を爲す場合に之に付き纏つて別に悪い影響が走る。今日殆んど其等は賭けて爲されてゐる。賭ける事は絶對的にいけない事で、運動を爲す主義と相反する事甚だしい弱々しい氣分投機的な頹廢的な氣分を益々強くする。其等の遊びを自分は排撃する。麻雀を稱して支那の亡國的遊戯なりと云ふも蓋し故ありと思ふ。

昭和九年六月廿六日

## 卒業に際して

長 瀬 凱 昭

とう／＼卒業をしてしまつた。一生懸命に先生の語を洩らすまじと何も彼も忘れて聞入つてゐる所を時鈴に呼びさまされてほつと我に歸り、ノートを疊んで教場を出るあの時の氣持にも例へられやうか。實際六年間はまた／＼間に過ぎてしまつた。そして教場を出る時と同様に朗らかな氣分で煙草を一服する氣持になつて来る。平凡な講義坦々たる道を行く様な筆記より、熱を帯びた講義、内容の複雑なる講義、そして苦心して要約したノートを手にして出て来る時が一層嬉しい様に、又味ひ深い様に、波亂に満ちた蹴球生活を終へた感じも又一しほ深い。

又我を忘れてグラウンドをかけ廻り、思ふ存分にボールを蹴り全く意氣と熱に身を委ねて猛練習をして歸る時のあのさはやかな明朗な氣分と何の變りもない。又今日一日の激しき活動にほゝえみつゝ。明日を楽しみに寢に就くあの安らかな悦びに満ちた氣持と何の差があらう。卒業しての氣持は言辭には云ひ表せない。色々の例によつて傳へ得るのみだ。

然るが故に六年間只ボールを中心に過して來た事を少しも悔ひない。まして蹴球生活によつて大きな教訓を得た悦びは其を實際に自ら體驗し感得したものであるが故に、耳から聞いた教場の講義より勝る事幾層倍である。斯く何の悔いる所もなき反面に別離の悲しさ、故郷を憶ふなつかしさの湧くのを制止出來ない。グラウンドよりの歸途には明日の練習を思ふであらう。時鈴に呼びさまされた時は明日の講義を期待して待つであらう。時の移るを忘れて胸中を開いて語り合つた友は明日の再會を楽しみに別れるであらう。然し卒業しては明日の練習もなく、明日の再會もない。オアシスを後にして旅立つて行く隊商の氣持と何の相異があらうか。砂中に野宿して昨日のオアシスを憶ふのは人情の然らしむる所ではないか。

憶へば蹴球部は意氣と熱のつぼであつた。敵を倒すか我倒れるかの体當り、双方何れかの足を傷ける果敢なタツクル、ネットも破れよと許り飛込むダツシユ、そして常に敵を倒して、敵の足を傷つけ、ネットに打勝つのは意氣と熱の優秀者であつた。ポルト並にオリンピックの應援歌に、校歌に、國歌に涙したあの感激、其は熱と意氣の高調せる時であつた。自己を全く没却して過度の練習に堪へ得せしめたものは意氣と熱である。實に蹴球部は若人の血を十分に燃やさするつぼに外ならない。

而して蹴球部は又愛に充ちたる境地であつた。四部迄落ちた時の他部の傍若無人の振舞、他校の冷笑の中に思はず目に涙しつゝも、猛練習に精進せしめたものは相互の固く握り合つた手を通じて流れる愛の力であつた。選手をして益々振ひ立たずんば非ざらしめるのはサブの自己を超越した大きな愛の然らしむる所である。相互に眞身になつて健康を心配し休養をすゝめる言葉こそ、反つて最も強く鞭達と激勵する天の聲ではなかつたらうか。慰めに行くと部員の顔を見、聲を聞く事は何よりの良薬ではなかつたらうか。共に悲しみ、共に悦ぶの境地に入つて誰か此の大きな愛に感謝せず居られやう。感謝の念は自責の念を伴ひ。眞面目なる研究を促し、眞摯なる努力に至らしめる。霸氣に富み、意氣と熱に充ちた若人、そして研究に――努力に――たゆまざる若人、又大なる愛に全く一致團結したる若人の前に其の目的を防止し得る者何處にかある。四部へ連續落部したにも不拘、其の直後の連年の優勝は又當然の事ではなければならなかつた。

曾て支那へ旅行し、日本を離れた時俺の祖國は日本だ。と強く／＼感じたが、卒業して又同様に『蹴球部は俺の故郷だ』と痛感し云ふに云はれぬ嬉しさを禁じ得ない。そして、故郷の名を恥づかしめざらん事を念じ益々緊張せざるを得なう。

擱筆するに當り、蹴球部の發展を祈り、商大の名の彌高く榮えん事を祈る。

九・六・一六

## 練習所感

長 瀬 凱 昭

先日下關へボール蹴りに行つた時は、久し振りで意氣と熱に充ちたスポーツに接し嬉しかつた。此處には練習後の所感を述べやう。

ショートキック、ランニングパスを見て感じたのは各自が其の急所を掴まず、其の練習を活用してゐない事だ。本を読む事は何か得る道であらう。併し其の著者の云はんとする急所を掴まずして読む者と急所に注意してゐる者との間には讀書の効果が異なるのは當然の事である。意義價値の存する所を知ると共に其を得んとする者は漫然と事に當る者に比して、一事が万事進歩の早き事は衆知の處だ。何うして蹴球の練習のみ此の例外となり得やうか。下關商業の人達は或はランニングパスの急所を知らないのかも知れぬ。急所をよく承知してゐる君等は幸福だ。併し承知してゐるだけでは何にもならない。一步を進めて急所を掴むべく努力せねば駄目だ。

ショートキック又然り。殊にショートキックは練習の態度で之を活用し得るものだ。形こそ簡單ではあるが、味へば味ふ程、汲めば汲む程盡きざる泉の様な深奥さを有してゐると思ふ。制度は運用の妙に待つとは古人の云へる所であるが正に此の言に當てはまる様だ。ショートキックを活用してゐないプレーヤーを見て、つく／＼氣の毒に思つた。彼等は形こそ同様の練習をしてゐるけれど、急所を掴まず、活用せず、皮を食つて肉を捨てゝゐる類だ。

コムビネーションは各自の力の和ではなくて、各自の力の乗であるとは曾て手嶋氏の云はれた所だ。一人の個人

プレイを十二分に發揮させるものは周囲の者の動き如何にある。二人共同して敵のボールを奪はんとするは一本々の矢は折れ易くも二本共にすれば其の力の大となるの理に外ならない。又而して斯るコンビネーションの意義を發揮せしめ得るは己の力を知り、味方各員の力を知る者の間に於て見る所である。各自接觸の機會を多くし、心より融合し、共に練習に勵み互に長所短所を知悉する必要又此處に存する様に思ふ。常に自己本位に立ち、協同して事に當り得ざる者の間にてはコンビネーションは求めらるべくもない。又己の勞の少き事を欲し、人にのみ頼るものも亦コムビネーションの敵である。コムビネーションは個人と全体の融合であり。個人が全体となり、全体が個人となるの境地ではなからうか。

毎日の言行こそ信用の根底であり、毎日の勉強こそ試験勉強であるが如く。練習と實戦とを切離す事なく、常に實戦に活用し得る練習を心掛け實行せねばならない。一練習試合をし、一試合を見學して何事かを教へられて翌日からの練習態度が従前の其と同様であるなら、其の人には上達を期待し得ない。惰性を廢して常に研究的態度に出て練習に精進せねばならない。今日我軍の練習してゐる時敵も又練習に余念なきを思へ、急所を徹底的に把握し、研究的態度を深めて活用せん事を期し、コムビネーションの成果を高め優勝に一步一步近づかねばならない事は一朝一夕に成るものに非ざる事、百練自得の力強き事を思ひ、我が力に適さざる高尚の理論に飛付くの愚をなさずして、一步一步足を踏みしめてたゆまざる精進こそ、最上の道である事を確信し實行せん事を望む。

—— 九・六・一七 ——



豫 三

林 田

毅

先づ皆さんダブルことではないものとして本三の人から始めませう。

—— 二階堂さん ——

キンポーの方がとほつてる。今度から吾が部の大将となられる人です。中々愉快的面白い人ではありますが、とかく下級生にカモられ勝ちです。大将ともなる人だからもうチツト威厳が欲しいです。

又の名を海賊 その名に恥ぢず、猛烈な事國大との試合でみんなごとボールをパンクさしちやつた位です。

あの方面もこの前の記憶なほ新たな事件あつて以來、相當なものとしてされてるデス。

—— 後藤さん ——

思ヒ出シーマリス ゴツさんのキー／＼聲で、何所に何方向いてゝもあの聲でゴツさんの居る事が分ります。

小さな体でチョコ／＼歩くゴツさんと、大きくてキングゴングの様にドシ／＼歩くキン坊恐らく吾が部の名コンビでせう協會の方で働いてゐるお蔭で時々人場券をフンダンにモサつて来て呉れる所有難いです。

神宮に行つてサッカーの試合でも見てゐると『只今のは〇〇君のバックチャージでした』て可愛らしい。併し少し氣取り氣味の彼氏の聲が聞えて來ますよ。

—— お次は本二の二人 ——

—— 神野さん ——

カミケンだ。

先づ保険勧誘員にでもしたら成功疑ひなしといふ所でせう。

この人にかゝつたら誠にチャツカリ何のかんのでしほられる。吾々つらいカナデス。彼氏の居る限りサッカー部は赤字なしでお家万々歳でせう。

ニヤ／＼と笑はれる所おスキらしいですよ。

——水島さん——

この人が居てくれて僕アリガタイです。といふのは僕よりHの大きい人が居る事をこの人のお蔭で知つて心強く思つたからなのです。

中々シブい方で冷いゲイシャガールが極く好きらしいです。

そのお次にづらりと控へて居られるのがこの度小平の片田舎からヤツパリ田舎の國立に行つて角帽冠り初めの本一のゴジン達デス。

先づ本一にして恥しくないのは浅枝さんと田鳥さんの二人です。あとの三人は貫祿ゼロ、でもまあ／＼といふ所が森田さん。後の二人はまあ／＼を五乗か六乗してやつと本科ボーイになります。

カクデンなんかまだ小學生です。そのくせ女學生はイ、なあと口癖の様に言ふ。ガラにもないデスゾ。

荒井さんと呼んでみるとボンといふ反響がある様な気がする。伸ばしたら何所にも取柄がないと言はれた髪とその角帽姿が見たいです。

お次に書いてくれと待つてゐるのが僕達のグループです。同じ四組によくも五人も集つたものです。併しこの五といふ数どうも工合悪いです。麻雀のメンズに一人多すぎるから、皆相當なものらしいですドノ道皆ドングリのせい比で身長は村井がバカみたいに高いがドイツといつて偉い奴は居らんやうです。

鈴木さんその綽名の如く、中々精悍です。商大のメンバーが皆こんなだつたら拓大といふ勝負になるかも知れない。一人々々書くと始終一緒に居るのでコチトラが危いから遠慮してをくです。

サテどんちりが二年生の方々

クマさんにトラさん、まるで落語に出てくる二人の様だ。

「ヤア！ 熊さん——」

「ア、！ 虎さんかい今日は」てな風に、それから海賊の子孫小西君とお嬢さんの様におとなしい岩崎君だ。

クマさんの寄附金の集めつぷりは凄いなもの。カミケンなき後は頼みますぞ！

これで第一巻の終り。

相當エンリヨなく書きましたが、どうぞ悪しからず。

お次に今度入つてくる一年生。  
面白くて少し位手強いんでもいゝやでもあまりうま過ぎて予科チームの時僕がサブだなんてあんまりカンパシクはないなあ。

何しろサッカー部の人々は皆面白くて一生皆と一緒に居たい位です。

四月からボールが蹴れるんだと思ふと三ヶ月間しまつて居いた、「おみあし」がなります。

(附記) 田鳥が本科生らしいとは勝手に直したのだといふ評判が委員に起りましたが、決してそんな事はありません。

せん。林田君はオツカナビツクリ書いた文で事實を明かに指した氣なのです。コリヤどうかといふ点の削除權を私に與へましたが、そのまゝに採用しました？

——田鳥——

## 部員の紹介

- 本三 二階堂謹司(廣一中)改名以來偉くなりまして主將です。主將は偉いんですぞ。
- 後藤博基(高師附中)姿は見えねど聲ありて知る君が存在、仕事から仕事へ移る君の精力はそれでも餘つて乙な真似に使ふとはヤケますね。
- 本二 神野光司(高師附中)最近改名したのは、二階堂の女房として致し方があるまい。中々に夫大切によい奴だのう。この一二年の間に性格も變り夫たる金坊もうれしいでせう。しまり屋ですが口だけは上手です。でも私はオゴつて貰ひましたからほめるです。委員長は汝の後に汝なし。來年もある事頑張つてくれ。
- 水島茂(名古屋高商)名残おしとて別れた故郷の酒の香に想出す。中々の酒豪で頼もしい。頭もいいし、顔もよく人が好い。之でほれなければ、名古屋のゲイシャは馬鹿だ。FBとしての君の上手さは人の知る所、好漢自重せよ
- 本一 浅枝彦太郎(廣一中)ダマつてるが故に強い。目下アダナを探索して居ます。CFとしての君は將來の一橋主將だ。
- 荒井文雄(松山中)純情の郎與詩人荒井君は、FMの人氣者で部の人氣者です。女の子がさわいでくれたら多分三原山で死ぬでせう。
- 田島輝重(四中)若いくせに何か考へてる奴さ、まあ苦しいだらふが秋には働けよ。GNは君にまかすよ、といふ反面、誘惑して遊ばせると斷らないでよく遊ぶです。將基はサッカー部のチャンピオンです。小學校の校友會の大將です。多分女の子が居るから熱心なんでせうといへば失禮なとキリストの教へをくひさうだ。
- 角田昇(府立五中)新宿は伊勢丹でよく買物をしました。GMの中でいや蹴球部でのランナーです。女學生に英語を教へてる性か女學生といふと見ると、眼の色は變るです。が之は淺見で彼氏は只努めて皆と打とけん爲にピエ

## 部員の紹介

- 口の役も買ふのです。親孝行な彼氏はもつと偉い人ださうな。
- 森田昭之(府立一中)昨年明菓のストアに働いてより彼氏は幸福です。強いですからこはいです。戸山ヶ原で高山に登つた氣で氣分だしてる。彼氏は何を見てるのでせうスローモーションの麻雀は健實すぎるよ。HBに居るフアイト一つの君は又得難き人だ。
- 養成所一年 枝村藤三郎(青師)とらさんは、丈も高いし技もうまい。それで叔母さんをラヴさんと間違へられる光榮に浴したです。専門部との問題でもめましたがおール一橋の爲に頑張つて下さい。
- 予三 大掛隆久(高師府中)予科の委員長、君はGMの俊雄です。ガケと申しまして既に以前の悪名は中學丈で消えてしまつた事を借みます。
- 重見敏之(神戸一中)右近達の友として今少し奮發して貰ひたいです。君の眼を見顔を見ると、人々は何かきまつて想像します。神野君達は君に本が借りたいと申しています。中々勉強家ですな。HBにおります。
- 浅田英暉(京都一中)大坂に京都に居る君は、サッカー部一の色男でしょう。勉強家な君にはしかしどこかに寂しみがある。人よ、慰めてやりたまへ。GMをします。
- 林田毅(青島日本中)眞白な君は黒い人の中で氣味がわるい程目立つので、大きな頭と共にウイングとして端かくれてる。所がGHをやつても何しても馬力があるのですこいです。
- 鈴木彰(府立一中)主將としての君はその強い自信と共に適任だ。予一の時野外教練で銃剣つけたまゝの敵を投げて味方を勝たせたといふ熱血兒であり、又射撃は上手です。GMで五尺八寸の丈を有し、初段の人こはいですかゲーリックパーだと思つてるんです。勝負事一切強し。といふ人。
- 村井恒典(府立一中)五尺八寸の君は坊ちやんすぎるね。君の口はシャベル爲にあるのでシャベリクタビれて物を食ふのです。だから三度の食事は少ししか食べませんが、外へでて食べるのは大好きです。最近FBからFWへ轉向して大きな身体とキックに物いはせんとしてる。
- 予科二年 熊澤博文(松山中)荒井君の後輩、角田の弟子といふ關係、最も円満なる人格者で、中々讀書してる

部員紹介

ので知識のある事サッカー部一。クマさんはいゝ人だよ。CHとして頑張りました。

●小西正夫（広島高師附中）尾道の海賊で腹がへると倒れるです。それ迄練習する君の熱心が今日をもたらしたのだ。近頃どこでおぼへたか言葉のあやがうまく本科生この所クヂくです。一つの活動を一日三回計五回も見んとするガツチリした強さは練習態度をつくりで主題歌をもこの手でおぼへるです。CHです。

●後藤虎雄（湘南中）トラさんはトラガリ頭ですべり込、必ず相手を倒すからすごいもんだ。FBは君ありて又強みをます。予科の爲に頑張れよ。

●岩崎寛貞（府立二中）『ニンジン』を見た人は彼をさう呼ぶ。何故か彼は大変いゝ人なんだ。それがわかってくると人は彼を『ニンジン』と呼んで可愛がる。彼は自殺なんかしないで人を救ふ偉い人になるでせう。一卷の終りといふ譯です。FBとしては只努力によつて生きた人だ。

●一年 池尾隆二（府立五中）『新人』としての君は強い身体と精神により未來の『主』として、最も期待される人だ。おとなしい人ですね。

●菅瀬十郎（府立五中）やはらかな身体と熱心は僅かの中に君を進歩させた。級チャンの優勝も當然だ。頑張りましたまへ。

●二階堂晴三（広島一中）兄貴より更に世間知らぬ純情の若人、美を求める人だ。FBです。

●西田徳治（高師附中）西ビンの後を受けて矢張り弟としてその名をつぎました。兄貴の西ビン以上かもしれない酒豪振りに予科本科の先輩を啞然たらしめたです。

●長谷川勉（岡山中）音楽に興味ありと聞く君は今少しフアイトを養ふ事だ。FMとしての君はそこに一段と進むだらう。

●安田祐立（横濱一中）君はしかくありける坊ちやんでハマに來いといふとうれしさうだね、しつかり練習してくれたまへ。

●高原龍雄（府立一中）顔をすぐそばにもつて來て話する君は面白いくせを持つてるねワシは外人かと驚いたです

●狩森君（上野中）偉大なる体格とキツク朗かな人だ。熱血で浦高戦の應援を一人で引き受けた人だ。一以上



隨感

追	感
想	想
集	

追想集

眞面目

眞剣

後藤博基

本三 後藤博基

すつかり夏になつてしまつた、今度の休が最後と思ふと何かすばらしい事をやつて見たいと思ふ。僕が蹴球部へ入つてから六年目だ。全然蹴れなかつた僕は石神井のグラウンドでKICKAのBCから習つた。

球ひろひをしながら人数の少かつた當時云はれるまゝに色々なポジションをうめて居た。第一回の浦高戦にはGKとして出た。それから三年になつてはじめてレギュラーとしてリーグ戦に参加出来るやうになつた。爾來浮き沈みはげしき人生にも似た歴史を経て二部から四部を往復して歸へつて來た。其間殆ど全部のポジションを手がけて來たのは閉口したと同時に好い経験になつた。しかし僕はプレイヤーとしてよりマネジャーとして専心した方がまさつて居ると考へる。今

所感

本二 神野光司

神野光司

中學校時代には餘り蹴球と關係の無い自分が予科入學以來今年で五年目、同期部員中最後の一人としてボールを蹴つてゐるのは實に感慨無量である。

今から三四年前「ア式蹴球部は何をしてゐるのだ」「何人で練習をしてゐるのだ」と云はれた頃から現在に到る迄、若い歴史を持つ蹴球部は實に大きな試練を経て来た。こうした過渡期の時代に幸ひにして力強い先輩の指導により、及ばず乍らも今日迄部と共に行動出来たのは此の上も無い喜びである。多数の昔の部員が殆んど部を去つて新らしく入つて来た人々がこれに代つて了つた現在は、部の雰囲気も一變した。然し乍らクラブチームの如き色彩を多分に持つてゐた昔から力強い選手制度の商大蹴球部が出来上る迄には二部から四部へと轉落した。根本的立直しの萌芽は斯くの如き轉落の中に芽生へたのではあるが、史上に残した汚点は余りに大きい。これも蹴球部の歴史が未だ浅いからであらう。力強い傳統が無かつたからであらう。

傳統の力は非常に大きなものである様に思ふ。一部に動かない帝、早、慶の如き部には、傳統による無形の力、そしてこれを決して打ち壊さないだけの努力が毎年の練習に培われてゐるのであらうと思ふ。

商大の部の生活は、まだ過渡期にある。

將來より立派な蹴球部を築き上げる試練の時代にある。

現在は傳統と云ふものがはつきりしてゐないだけに、その

る。決して全体の何分の一かの一人では無く、少くとも一面の仕事に於ては部を代表する人となつてゆくに違ひない。各自の適する分野に於て或はプレイに或はマネジャーとして或は學生リーグに一身を投じて、日本蹴球界に貢献する。ボールを蹴る事とは全く關係が無い方面へ向つても、やはり商大蹴球部の爲に盡すところに變りはない。

予科一には唯ボールを蹴ると云ふ愉快な氣持で入部してくる元氣一杯の新部員も一年毎に蹴球部を中心として無数の糸を以つて繋がれた他の世界を知つてゆく。縦に横に又全く對外的にこの複雑な糸を一つ／＼たどつてゆくと思はぬ尊い体験が身について来る。

しかしこの糸はその中心である蹴球部の大きな理想に立つて引いてゆく時に始めて意義がある。

或る時はこの糸が太い力強いものになり、或る時は非常に弱い強く引くと切れさうになる。何時もこの糸を強く引いてゆく爲には中心がしつかりしてゐなければならぬ。

この中心は蹴球部の理想であつて、これをしつかりと捕へた人は予科一の人も容易に全体を動かす得る。

部の爲に無くてはならぬ自分であると云ふところにファイ

指導者が全体を動かすところも非常に大きい。その性格が部員全体に反影し部の雰囲気も次第に變つてゆく。其處に新しく伸びゆく力をはつきり感ずる。

この伸び行く部の歩みは、何處までも確固たる理想への歩みであり、尊い傳統を築く一塊の土でなければならぬ。

今や蹴球部も数人の同好者の集りであつた昔のクラブチームから多数の部員を持つ選手制度の大世帯へと變つて来た。これに伴つてその構成部員のする仕事も多方面に涉り、より専門的な分業を必要とする。キャプテン一人が何も彼もやつてゆく事は到底不可能な事だ。

グラウンドに於てはプレイをぐん／＼伸ばす爲にプレイのみを研究しチーム全体の動きを見てゆくグラウンドマネジャーも必要であり、對先輩對リーグ對學校その他部の財政及び雑務を行つてゆく者もあつて蹴球部といふ有機体の活動も益々活潑になつて来る。

現在は未だ過渡期にあつて總べてを充す事は出来ないが、數年後の將來はこうした人材を養成することが、一部に於ける商大の活躍に是非共必要になつてくる。

後輩の諸君は、各自皆部にとつて無くてはならぬ人々であ

チングスピリットを養ひ何分の一かの自分であるところに謙讓の氣持を持つ。少くとも蹴球部の一員としてこの誇りを持ち度いものだ。

## 昭和六年を顧みて

本一 荒井文雄

顧みれば昭和六年こそ、我が部がその悲しみを最も深くした年だつた。前年二部より三部へ落ち、没落の涙乾かざる此の年我が部は、更に三部に於ても全敗を喫し、三部を追はれ榮ある籠城事件により輝かしい歴史に一段と光彩を添へた母校と相反する方向を辿つて悲しくも四部へと落ちて終つた。

當時を回想する時私は唯暗然たらざるを得ない。敗戦の生々しい記憶憐れむが如く輝く夕陽涙に染んだユニフォームさう言つたものが胸を強く打ち、新しい涙を誘ふのである。

靜かに敗因を考へて見る時、種々の事が今尙燒きつく様に腦裡に残つて居る。

纏まりの無い事闘志の無い事、無力のFW其の他弱いチームが持つ様な多くの缺點を持つて居た當時のチームを思ふ時、

私の頭に残る一筋の事は「我がチームは勝つ可くして負けたのではなく負ける可くして負けたのである」と言ふ事である。小數のものを除いて、其の頃多數の人達は蹴球を第二義的に解釋してゐたのではあるまいか。僕も實はさうだつたが、部員が少い上に、此の様な傾向があるために練習に出る人は極小數で、十一人揃ふ事は殆ど零に近い確率の上に置かれた。そして自分勝手に練習を休み、練習に出ても冗談まじりに練習する傾きが無いとは斷言出來ない状態だつた。

練習が此の様に疎なるものであつて見れば、メンバーを決定する事も困難であつて、試合毎にその位置を交替したり選手とサブとを交替したりして、その試合に臨まねばならなかつた、確かにメンバーを交替する事はよい事である。もしその時と所とを得るならば。然し絶えざる交替はその位置に對する責任感を除かしめ、更にコンビネーションを破壊せしめるものではなからうか。ひどい例を上げれば鈴木君がL・Wをやつたり、西田さんが長瀬さんが病床に斃れた時、止むなくO・Dになつたりした例である。之は其の當時の事態から萬止むを得ざる事であつて、我部の當時の没落前の状態の然らしむる所である。

稿に示さねばならぬ事を悲しむ。或人達は確かに闘志を持つて居た。然し一般の傾向として、敵に對して闘志を持つ前に味方に對して闘志を向ける様な事があつたのである。即ちベストを盡す前に闘志を燃え立たす前に、友軍の非を責め罵る様な傾向を持つたものがあつた。私なんか随分とエラーをなし敵に貢獻する事多かつたのか、味方から闘志を向けられた。其れ故責任逃れのプレイをして、以て味方の叱責を受けない様にしてゐた。球を持つと直ぐに味方の誰彼となくパスしてドリウルする事は毫も考へず、なる可く球から離れ様とする傾向の中に生きて居た。球を持つて居る事はエラーの前提である、それ故一刻も早くボールを離してエラーをするチャンスもなくする様に務め、敵のゴールへの努力をなす心のゆとりさへ持つてゐなかつた。

斯くの如くFWのL・Iの私が全然攻撃能力を持つて居ないのであるから、他の四人がどんなに頑張つたとて得点を許される事の稀なるも又首肯出來る事であらう。

要するに當時のチームは纏まりなく、闘志もなく、FWには寄せのヨの字もない典型的と言つてもよい位の悪いチームだつたと思ふ。

その上試合では練習中餘り顔を合はせない様な人と鉾を揃へて攻戦中の自分を見出す様な事がしばしばあつた。その人の走力もパスの性質も分らずまして癖も分らない。之は練習の疎なる事を現はすと共に、纏りのない事を明かに語つて居るものである。

FWの無力はリーグ戦の得点5よりして推察出來る。當時FWの各員の個人プレイは決して今の商大チームのそれに劣るとは斷言しないが、チームワークは確かに落ちて居たと斷言する此のFWの總得点中5の中にはノータッチインのコーナ1、キックが一つあつた。之は面白い事ではなからうか？何を語るものであらうか。私は次の様に之を解釋してゐる。即ち「當時FWの各員はノータッチ、インのコーナキックを得る程の個人プレイを持ち合せて居る反面にノータッチインのコーナキックに頼らねばならぬ程の纏りしか持つてゐなかつたのである」と。更にFWの無力さは此の如き事實で裏書きされる。即ち昨今ですら兒戯に等しいプレイを以てFWのL・Iを守る私が其れよりも尙みすばらしいプレイを以てFWのL・Iを守る當時に於ては之又無理からぬ事である。

闘志については又悲しむべき闘志の記述を悲しむ可き此の

私達が四部三部と二年連勝出來たのは之等をよく考へて補なつた良き長瀬さんの指導と共に、それによつて得たる纏り闘志と言ふものによると言ふ事も出來るだらう。

私達は此の纏りと闘志とを助成する事を心せねばならぬ。昨今闘志換言すれば元氣がなくなりつゝあると言ふ事が少しでも感ぜられる事は遺憾の極みである。

我が部が今後の發展を期するためには是非之等の事を考へねばならぬ。更に言ふべきは私達は三部四部に於て闘志と纏りにのみ頼つて以て如何やら斯うやら個人プレイを補つて居たけれど、そしてそれのみで成功してゐたけれど、之からの試合は一部二部の舞台だ。それ故、私達は纏りや闘志の必然性と共に更に個人プレイの練磨に心せねばならないと思ふ。

## 思ひ浮ぶがまゝに

本科 角 田 昇

一、春を迎へて

冬の鈍重な壓迫から解放されて、春は生れ出る。遠山に未だ白雪の暗暗と光る三月の下旬に於てさへも、早や大自然の

大地には大空には既に春が芽ばえ初むる。春！其處には深い冬のねむりから醒め得た喜びがあり、更に新なる營みに出發せんとする希望が秘められてゐるのだ。

この大自然の脈動の省察を、若しも吾々が吾々自信に回轉して見るならば、吾々の現在の心情の春と一致するを恐らく誰しもが感ずる事であらう。長い冬のねむりから醒め得た大地大空の喜びは吾々の長い間の苦闘から再び二部に返り咲き得た喜びであり、かの澄澗たる初夏への跳躍の秘力は吾々の將來への躍進の希望であり力である。

かくして大自然の春も、その將來への希望に充てる点に於て雄々しき活躍を期する点に於て全く吾々自身にとつては同一と斷ぜざるを得ないのである。

而しながら吾々には吾々現在の心境が例へ大自然の春と同一であるとしてもそれは單に瞬時に於ける吾々の心持に於てのみかくあるのであり、兩者の性質上自ら春を得たる手段に於て隔絶した相違がある事に氣づかねばならない。そしてこの手段の相違があればこそ、吾々は吾々の春を勝ち得たるがために又重大な危機に逢着せざるを得ないのである。

大自然の春は天然自然そのものゝ行動の結果として來る。

## 二、悲境の經驗者

一步進む前に一步退いて、今迄自己の歩んで來た道を考案する事は、何事についても極めて必要な事と思ふ。従て吾々が更に／＼に歩を進めて一部昇進の大旗を目指して邁進せんとするならば吾々は益々冷靜に今迄吾々の辿つて來た道を熟考しなければならぬ。

吾々の今日迄辿つて來た道は、即ち涙の歴史であり苦闘の歴史である。二部から三部續いて四部へと、止むるを知らざるが如く一路陥落の道を辿つた當時の部員の悲壯な心持、更にかかる難を忍び苦を嘗めて、悲運と戦ひ更に屈せず光明を求めべく精進した部員の努力、これは到底吾々の筆舌につくすべくもなく唯この歴史を経験した人々にのみ知り得る貴き過去なのである。或るドイツの雜誌に次の様な事が書かれてゐる。『嘗て重病にかゝり、死に直面した事のある者は生きると云ふ事實が何であるかを知つてゐる。生命は吾々にとつてそれが忽然として消え去らんとするやうな危険に瀕して初めて善きものだと思はれて來るのだ。病氣なき生命は盲目である。生命は己が何物であるかを知らない。病氣にして初めて吾々に生命と健康を尙び且ついたはる術を教へる。病氣にして初

斯うして春になれば大空に大地に太陽に山に丘に海に春の女神の足跡は歴然として現れる。そしてあまねく大自然の草木は萌黄色の若芽を吹き枝を出し葉を生ずる。これ全て宇宙の進化であり眞粹である。そしてこれら森羅万象は人力に依つて支配され得ない所にその偉大さがある。

これに反し吾々の春は、かく自然的なものにはあらずして吾々の努力の結果のみに依り興へられ、而して又吾々の努力に依つてのみ支られてゐる。即ち吾々の草木は吾々の努力の如何に依り、芽を吹き枝を出し葉を生じ又一瞬の内に全て枯死してしまふ。

かく云へば賢明なる讀者は、吾々の春が自然の春と違つて如何に危険性のあるものなるかを觀知し得るであらう。而るに吾々は長い苦闘から脱れ得た喜びにやゝもすればかゝ危険を没却して自ら得た春に酔ひ自ら得た春に溺れ勝ちである。かくして艱難の間の緊張は一時に弛緩され努力に依つて築きあげられた春は、たちまち陰惨な冬に轉換してしまふ。

乞ふ部員諸君徒らに春に躍るなかれ！靜かに沈思して吾々の春を得たるの源泉：過去の苦闘：を想起せよ。そして吾が部永久の春を建設すべく更に／＼に絶えざる努力を続けよ。

めて吾々に元來生命がどれだけの價値を有するものかを教へる」と。

この言葉は單に病氣にのみ適用さるべきものではないと思ふ。吾々蹴球部の悲境を味つた貴き經驗も、全くこれと同一の内容をもち同一の貴さをもつものだと思ふ。

吾々は今これらの過去の千万の困苦その味はふべきものは悉く味はつた長瀬兄を失ふ。そして長瀬先輩と同じ様に、三年の後にはあの悲惨な歴史を経験した人の姿は恐らく全て吾が部から消え去る事であらう。

この事に關し長瀬氏は常に云ふ『蹴球部の本當の意味に於ける危機はあの苦しみの過去を知る人全てを社會に送り出してしまつた後だ』と。この言や洵に然りであると思ふ。

『七轉八起沈ばにや浮ばぬ世のならひ』とか、吾々の世界には『盛者必衰の理』が繰返されねばならぬらしい。そしてこの盛者が滅亡の悲運に辿りはぢめる時期を考へて見る時それは苦境からたつて浮世の荒波にもまれ艱難苦闘の末盛者を勝ち得た人の代に於てではなく、寧ろ二代三代を經てようやく過去の苦難が忘れられんとする時代に於てである事に氣付く。即ち盛者必衰の理は貴き過去の經驗者の存在が没却さ

れた時現實として働く事になる。

かく思へばあの涙の歴史苦闘の歴史の経験者の年々少くなる吾が部の將來こそ實に多難なりと云はざるを得ないであらう。そしてこの盛者必衰の理をくつがへすがために吾々の將來なさんとする努力も到底凡々たるものでは不可なる事を知るであらう。

部員諸兄：感謝の過去を常に念頭に於て悲境の経験を常に眼頭に浮べて、更に／＼に大きな未來に出発しようではないか。

一九三四年三月三〇日

## 涯しなき道

本一 田島輝重

### 一、序

今回蹴球部で部誌を發行するを幸に、過去、現在に連る私の生活から或るものを握り自己をあるがまゝにあらしめて眞の自己を究め以て新しきスタートにつく考へで書き綴つて見ましたが、私事に關する事多く部誌に載せる程のものではありません。がこんな馬鹿も居るのかと思つて讀み捨てて下さ

い。小學時代中學時代予科時代を通じて、私の受けた感化等を想つて見ますと大なり小なり私を裨益して下さつた方々への感謝の現れとして此の一文又無駄ではないと思ひます。

### 二、ベツレヘムへの道

存在するものは全て眞理なりとすれば私の此の世に生を得ましたのも又意義ある事かも知れません。如何にして己の生命に意義を與へるかが私に取つての神の與へた宿題です。

存在の生命は發展にあります。人に内在する發展の原動力こそ自己を常に創造して行く生命の力です。存在を意識する心があつてこそ存在の價値を生ずると致しますと心こそ發展に方向を與へる重大な作用を爲すものです。價値ある生活こそ意義ありとしますと心こそは決定的な役割を演ずるものとなります。そこで人は生命ありて存し生命は心ありて價値ありと考て見ます。人生に意義を與へるには心の動きに意義を見出さなければなりません。複雑な現象もかくて心に歸納されて來ます。

心は心を求めて成長して行くのです。肉体が食物を求る如く心は心を求めて居ます。物質と異り感應によつて心と心の受授は完成され二者は共に自らの力によつて大となつて行き

ます。苦しみて樂みを知り笑ひて悲しみを知るのもじなければこそその玄妙な働きです。

無限の發展力と包擁力を有するこの心が各人毎に趣きを異にするると知り宇宙の神祕に自己の微たる知り何時の日五尺の短軀に心安んずるかとははてざるを得ません。

人は而も自らの心を遇する事餘りに當を失し自己の心を意識する時には本來の清き状態より既に一步泥濘にふみ入れた後である事がよく起ります破壊は仕易いが再建は困難なる如く、汚す事は容易だが洗濯するのは大變であります。汚れた心の世に多き時洗濯した心も干す場に困る事になります。

世は末世であらうとも人情の美しさは未だに大和心を誇つて居ます。眞を求め善に覺め美を憐れる若人よ、永久に汚れを知らぬ青年處女であれかしと希ひ望む者私一人ではないと存じます。靜に四圍を見ますに、心を求める人の意外に多いのに驚かされます。心の糧に飢れた人の盡きない事に悲しみをさへ感じます。

物質文明は何等人に幸を持たらしませんでした。

始祖の心を離れた既成宗教の没落、心の存在を見失つた思想界の混迷、救主を求める聲は次第に高く強まつてゐます。

幸を求めてやまぬ人の目も黄金の光に迷ひ心の所在が見えないのです。山の彼方に幸を求めて行く旅人の失望した顔、心を把握しないでは幸にあつても見定められないとは知らないのです。外在的な幸とは迷へる心の幻想で眞の幸は内在的なものと思ひます。

此の世に生を得て滿二十年、愚な私はたゞもがく丈で未だ入口に戸まどひして居ます。ベツレムへの道は我が心の中にある事を知り得た丈でやゝもすればくぢけ行く心をして果して何時の日神の榮光に浴し得るのでせうか。心寂しくはありますが、貧しき心にともる理想の光明だけは烈々と燃えさかつて居ます。

(九、五、一一)

### 三、懐しの昔

大正十二年四月十四日、私は只一人縁側でヒラ／＼舞込む櫻の花を縫ひ連ねてK子さんにあげる花環を造つてました。

母が肋膜炎で入院して以來毎日慰めて下さるK子さん一家の親切に私は寂しささへも忘れて居ました。三年引き續いて冬になると發病して衰へて行く弱い母。毎日薬を取りに通つた山邊さんの家、T君の顔今日は未だ一人も友達が來いなので

四圍の静けさを破りゴトンと突然音がしました。友達かなと振向いた私の耳に一言「母が死んだ」といふ聲が入りました。私は涙する人々を見上げつゝ考へてしまひました。母が病院に入った日寂しくて泣いた私には再び歸へらぬ母の死は何か重苦しい感じを與へました。昨日病院で握つた冷たい手ぢつと見つめたやさしい顔、そして今は永劫に眠つてしまつたやさしい眼。忘れ得ぬ痛みを胸に残して幸は過去と共に消え去つた如くに思はれました。日につのる寂しさ悲しさの中に私は小さいながら兄としての自己を見出しました。肺炎からやつとなほつた弟を遊ばせるのが私に出来る一つの仕事で毎日弟と父の友人宅に半日を過し日暮れて家に歸りました。日曜毎に通ふ澁谷のキリスト教會で、友情の美しさ愛の偉大さを教へ込まれて亡き母がマリヤ様の様にも思はれ空にまたゝく星のどれが母なのか夜空を見上げて考へたものでした。その頃の私は教會に来る人でなければ學校の勉強も出来ないものと固く信じてました。

Kさんは女子の一番で副級長でした。F君は男子の一番で級長でした。そしてF君と私とは同じ教會に通ふ親友でした。

私達大坂上組は男女共に組の五番以内をしめ、運動で他を

大人の世界を知らなければなりません。不正と虚偽が大人の世界に力あれば子供の世界は正と眞です。正と眞にある中は唯々として境遇に甘んじた私は不正と虚偽に會ひました疑を生じました。疑は進歩の前提であり不正と虚偽の克服により解決されます。即ち眞理の道の追求によつてのみ一段高き進歩を得るのです。

求道者は星の數程世に充滿しつゝ然も救はれる人少きは一体何を意味するのでせうか、神は一視同仁ですが人は他人に利他主義を強ひ己は利己主義により誤れる自由を享樂せんとするムジユンにあります。自ら救はんとせず救を待つ人の多きによります。天は自ら助くる者を助くとは心の救に對していひ得ると思ひます。教會の説教も寺院の法話もすべて之暗示であります。心から本當だ。とうなづけた時救の道は示されるではありませんか蹴球をして居ましてもうまい人の模範も見る人に暗示を與へる丈であり進路を示すのみで自ら爲さなければ悟り得ないのです。なまじ下手に學問をした私等は簡単に物事を信じ得なくなりますが一つでも二つでも本當にさうだな…といふ感じを實地に悟りたいと存じます。疑の後に来た信念は只信するものよりは一層強い根據がある氣がし

壓へて居た私は勉強で下位に甘んじつゝも人氣がありました。K子さんの家で櫻桃を頂く頃には私は大坂上組の大將となり同時に大將は頭でも勝つべきだと思ひまして急に自信を強めました。すると奇妙にも成績も上りだしました。然も今冷靜に考へますと私に同情した先生の感化と大坂上組の感化並び教會の感化なるを知ります。不思議にも會ふ人すべて私の味方でした。「愛する者は愛される」この時代を通じての感じはたゞこの一語につきます。

#### 四、疑

第二の母を迎へると共に父の務の關係で懐しい大坂上組に別れを告げました。大坂上組も既にヒロインK子さんを秋田に送り、又私が去つたのでさびれましたが頼母しい後繼者は又豊富でした。今迄の明るい生活に引きかへて大坂上を去つてからは病魔に魅入られた私一家は、暗い空気におほはれてしまひました。母は昨年亡なるまで七年間遂に床を離れ得ず父も私が中學四年の時腦溢血で倒れましてからは元氣なく全ての不快と不運とを一人で背負つて去りました。

弱り目にたゞり目とか、人を恨んでも致し方はありませんが、不運は不運を招きまして止る所も解りません。最早私は

ます。不正と虚偽の彼方には正義と眞理がある筈です。正と眞を根本に有して始めて反對の不正と虚偽を克服出来ます。孝行したい時に親はなしと申しますが私は痛切にこの事を感じました。成るべくくんば死して悔を残さざる様自己を修養して行きたく存じます。

#### 五、四部優勝まで

(九、六、二四)

商大予科の單調の生活は無慘に私の夢を破り希望を傷けましたが、蹴球部生活に入つてはじめて美しい友情に浸りました。しかし私の心の扉は容易に開かうとは致しませんでしたが利己主義に傾いた人々の中にあつて協同生活を續ける部員の間に伍する事は心安い快さを與へました。

練習は辛くて苦しいもの、サブはつまらないものといふ考へから他の部員諸君程熱心ではありませんでした。夏休みに患つた心臓脚氣の爲、運動も禁ぜられてまして予科一年の時は殆ど練習しませんでした。かゝる私を部に留まらしたものは友情の力でした。その熱に動かされて予科二年のシーズンは始まりました。私に決定的な道を與へた人は長瀬さんのみではありません。一夜ゆくりなくも聞いた教會の説教でし

た。私は皆の友情に報いなければならぬ。友情を無視するは人の道に反する事だと自ら怠惰な自己を戒めたもので、蹴球部は常に非常時でした。長瀬さんの信念は見事に之を克服して行きます。私はいつも長瀬さんのどこにそんな力があるか考へ込みました。此の秋のリーグ戦に初出場致しまして三試合に出ましたが、父の死其の他の理由より十一月最初の大切な二試合に缺場致しました。今にして思へばつまらぬ事ですが父の死により練習をしなかつた私は、技も身体も私より優れた荒井君に代つて出場する事を非常に心苦しく思ひ缺場を決意したのです。拓大戦が引分となり我が覇權に動搖を與へました事が大いに私の責任感に痛打を與へ優勝するまで負けたら申譯がないといふ觀念に支配されまして相手の弱い事にもよりますが、トズによる一点以外に一点も許さなかつたといふ結果を示して居ります。この一事以來、私は長瀬さんと特に打解けた關係に入り得た事を記憶してす。

#### 六、進歩

一度安住した私の心は又又昨秋崩れまして母の死を見ては自己の責任の餘りに重き事に氣づき、プレイを續ける事の可

否が問題となり三部に優勝したら辭める覺悟でした。親類も世間も私に運動を許しませんでした。

一人家にあつて部生活の抽象的價値等を考へては惱みませんでした。現實の問題を前にしては具體的の説明こそ重大であれ抽象論は力薄きものでありました。しかし各人が得る結果は各人の主観により價値評價され、万人に同一を求めるとは無理です。然し各人の自由な心のおもむくまゝに委ねたとしても大體に於て與件の等しい部員の協同生活に於て抽象的結果を得る又不可能でなく、主観的臭味はありますが抽象的説明の生ずるに根據がある譯です。更に考へますと問題は存在價値の有無に來ますが之は一昨年邊りに盛だつた運動部廢止論により考へさせられた事です。進歩のなき存在は許されないの反面解釋としまして存在は進歩する所に意義があるとなります。この進歩を意義と認めるは内部の人々で、内外主観の相違が論議となり争点となるのです。外部の人に進歩を知らせ意義を知らせる事は大いに難しい事です。毎年結ぶ果實により始めて他人は眼を向けます。見えない内的的意義のより大に美しく結實し行くを見ないでせう。ですからしてかゝる問題は各人が進む道それ／＼に考へ得る事で或点に行きついて

他を考へる時、たどり來し道の相違を見るのみで悟り得た事は等しく眞理であつたとなりませう。されば已に彼等にあつては問題にならない事に悟り得ぬ若者共が争ふといふ愚な事を現實に見て私共は唯意義ある存在たらしむべく進歩の道をたどるべしと思ひます。再びいふ進歩なき存在は許されなう。

(九、七、一)

#### 六、練習と私

予科一年入學以來早四年頭に角帽重みありといへ、身に備はる若さはそれを消してしまひ、相も變らぬ予科〇三であります。

連日の休みなき猛練習を見つゝ過去の自己をおもつては悲しい心にとらはれます。入部した年は一年間何もしませんでした。夏休みの心臓脚氣の結果運動を禁ぜられたのです。大掛村井等熱心で上手な新部員を迎へて二年の時、病床の父も母も私の身を心配する餘り、運動をすゝめませんのでこの春は私も、心から熱心には練習しませんでした。早く家にかへる事之は第一に私にとり大切な事でした。一ヶ月おくれ練習に加はつた時、キーパーの練習をさせられました。淺枝荒井兩君の上手なキーパー振りを見て居りましたので氣が引けて困

りました。然し心臓を弱めた私には他の位置は苦しくて出来ない、否下手な私は使ふに使へないのでキーパーに來たといふ方が正しいのです。想へば正式にキックもならはずに來た私は、一生サブで結構と思つて居ましたし又氣が弱くて試合に出て敵に對す事など思ひもありませんでした。籠球部に居た爲か、キャッチだけが取柄でした。立教の試合に荒井君程の人が數点を入れられて泣き顔になつた時はあゝいやな商賣だ。負けると見ちや居られないと思ひました。秋には何時か私もキーパーとして皆と共に試合に出ました第二回の合宿に父が死に参加しませんでした。幸に拓大等の強敵には荒井君が出て下三試合には出ました。幸に拓大等の強敵には荒井君が出て下さつて私以上の働をした爲めの優勝と思ひますと、弱いチームの時にのみ出た私の心には拓大戦不出場の結果の部に與へた結果が良かった事を信じて苦しい心を一人慰めて居ます。たゞあれ程迄に商大を苦しめた、拓大とやつて見たかつた時に思ふ事もあります。父の死は必然的に私の部員たる事を拒みましたが寧ろ生前よりは樂に部員たり得た逆の結果を示しました。予科二年を通じて最も練習しなかつた私にリーグ戦出場を許した部の幹部の方々に深くお詫び致します。此の

秋にやつと私は部と離れられない心を抱くやうになり高商大  
會も終りました。タイムアップ直前、不覺に落した球をさば  
かれて決勝の一点を與へた事が心に残る丈です。

予科三年になる時、家の爲に働くつもりでしたが何故か七  
對一で私を委員長にしましたので一年位は何とかなるだらう  
と家の人が辭めよといふのを本科になつたら辭めるからとい  
つて練習に出ました。此の頃から私は自分ながらハツキリ一  
二年の間にどうしてからも變つたのか我が身をみつめて驚き  
ました。予科二の春まで部生活に安心しなかつた私が今何故  
に安住したのかわかりませんでした。じつと考へますと乃  
公の部生活も今年限りだといふあきらめの心が強く自分を部  
生活にひたらしたのだと思ひます。秋に又母を失ひ遂に練習  
を休み、本一諸君外多數のおいかりを受けましたが長瀬兄の  
お蔭でリーグ戦には全部出場しまして優勝の喜びを味ひま  
した。以後三商大戦高商大會と不運な試合をしました。が之が  
私の心の動搖の爲でないといひきれませうか、長瀬さんにも  
二階堂さんにも話しましたが結局辭める決心をにぶらせズル  
く、と年の瀬を迎へました。あの時にあんな事がなければ勝  
つたど私は思つて居ます。やつと委員長の任も終へまして現

かなブレーは健實みがない。浅田君がキャッチに専心し得な  
い原因に荒井君等の華かなるブレーの實演の日々に渡りて多  
き事あるを信じて歎きの中に自己の拙さに己をむちうつ者私  
一人ではありますまい。一度は心の中も申し上げたのです。浅  
田君のキャッチを責め不安に思ふ前に、かゝる小さな事にも  
心して貰ひたいと思ひます。そして健實なブレー正確なキャ  
ッチの後に華かなブレーも生じ得る事を信じてます。徒らに  
身を前倒し横倒しての結果はよくないと思ひます。成程眞似  
はよくないでせうが、バック・ホワードが良き指導者により進  
み來た中でキーパーのみは私共一人一人の進むにまかせてあ  
つたのですからひがみもでるのです。慾を言へば練習中に私  
共の練習も考慮していたゞきたいのです。練習中よく手をい  
ためますのでキーパーが幾人もいたらと思ひます。浅枝君や  
荒井君に未だに及ばないであらう私をキーパーとする部の苦  
しさを考へますとこんな事も浮んでくるのです。勿論私の方  
が健實だとは思ふのですが、毎年つまらぬ事から一年を通じ  
て練習し得なかつた私にとりこの一年は自由な氣持ちで球を  
けり得る事を喜んで居ます。春はともかくも秋だけは出来る  
限り無理もしますから、日曜に練習を殆どしなかつた事も大

予科諸君に送別されて本科入りして以來早一學期も終りま  
す。長瀬さんが卒業しなければ私と二階堂さんの約束も實行  
出來たと想ふのですが、如何せん一人立ちになつた二階堂さ  
んに強く約束を迫る程慘酷にはなれず一部にあげて二階堂さ  
んを送りたいと思つてます。成程私は勝手かもしれないが  
兄弟四人きりの我が家の生活に私が居ない事がどれ程不幸か  
私が働かない事がどれ程苦しいか、安心立命を求めて狂ふ我  
が心はたぎる若き青春の血をおさへ自由を享樂せんとする慾  
望の克服に疲れ時に奔流の如く心の立脚点をおし流します。  
友と遊びにふけりつゝも覺めては悲しい現實の夢でした。私  
は成程部生活にある限り不幸だとはいへませんが残せし我が  
家に幸ありや否や、選手でなければと思ふ私が馬鹿なのでせ  
うか浅田君も昨秋以來相當試合にも出ましたが今期に私に勝  
る程の上達を心から願つて居ます。練習中荒井君達がキーパ  
ーをする毎に浅田の心を想ひ我が身をふり返りさびしくその  
ブレーを見守ります。こゝで一言苦言を提して大方の評を仰  
ぎたいと思ひます。自己のポジションに忠實なるが故に健實  
なブレーを心掛け又後進者をもさう導くが、他人のポジショ  
ンをなす人は往々無責任なるが故にスタンドブレーをする華  
目に見て下さい。練習の日數は少なかつたが張り切つた練習  
の出來た事を喜んでゐます。

練習は辛い苦しい我が家は寂しい静だ。そして私は何處に  
若さを笑を求めるか、問ふ勿れ君よ、私には私の道があり考  
があります。チラツとよぎる哀愁の中に大きな喜びを見出し  
て行くのが私の進み來た道でした。

#### 八、友

以上一寸ばかり荒井君に痛い事を書いてしまひましたが本  
一の五人はそんな事では離れない友だと思ふからです。

浅枝君は無口です自分でもさういつてますが彼の本領は練  
習に於て現れるのです。深い淋しみを藏してブレーに専心す  
る君の姿に雄々しさを見出します。又それ丈につき合へばと  
てもよい人なのは他人にはわかりません。或る事から私と彼  
の二人は泣きたい程のうれしさを感じた事もあります。東京  
に雨の降る時廣島にも雨が降つて居ました。私はそれ以來淺  
枝君がすきになりました。たゞお願ひしたい事は身体に無理  
をしない事です。さうく彼は不正の事は大嫌ひな人です。

荒井君を予科の人は皆さん可愛いと申しますが矢張一年  
でも上な丈に立派な人です純情な人丈に染りやすく麻雀に球

に熱中しますがその驚くべき精力は練習でも平常でも使へば使ふ程出るようです。荒井君あつて本一の五人も朗かに談笑できるのです。

角田君はなか／＼の快男子です。勉強家です概して東京者は社交性に富んでゐますが、彼もその一人です。將來の蹴球部は角田、浅枝二人の上にあると思つて自重をのぞみます。予科二諸君は話をきいたでせうが試に彼と話をすれば部の爲に如何に眞剣な努力をしてるかがわかると思ひます。

森田君は色白の美男子ですが法律などをよく読んでます。すべてを熱でつらぬく所に彼があります。去年は夏季アルバイトをしたりして商大生活に新方面を開いたりして居ます。健實な所は麻雀にあらはれて居ます。私と彼と二人になると勉強の話しかしないのですからといふと嘘のようですね。

以上四人ならべて見ますと本一の人は皆私より偉い人ばかりです。私はともかく以上四人のする事を見て居れば部生活に間違ひはないと思ひます。

友は多くて少きもの交りありてなきものの感は深いのですが、幸に我が蹴球部ありて友多く交り深く日々を意義ある生活にひたれる事は私一人の喜び丈ではないと思ひます。私は

愚なかりに何をいはれても憤りませんから、本一四人の後に従つて歩いて行きます。私が黙つて居る時は何か一つの事を一生懸命に見改めようとしてゐる時で位置を變へて前と異なる結論を得んとしてる時です。決して憤つて居るのではありません。又時に悲しさを顔をして居ますが、それは一人で感傷に美しい夢をえがく時ですから御心配なくお通り下さい。

我が蹴球部は涙と汗の中に心を結び基礎を築くのだと思ひます。そこで皆さん涙と汗に大いに自己を語り現はし大きなカップで酒をのんで一晩どこかでさわぎたいですね。

私に友達がなかつたら喜びも半分の價值がなくなります。學校生活は友ありてこそ楽しいのです。蹴球部三十人を友とし得る事を想へば如何なる義性を拂つても惜しくくないです。

#### 九、大いなる愛

運動選手に女と酒煙草は禁物と申しますが、之は取りよにより色々異つた結果を生みます。リベラルな人、保守的な人、それぞれの主義がありませう。私は煙草は嫌ひですし酒も好きではありませんから論じても偏るおそれがありますから

論じません。

大哲ソクラテスすら、我その性多淫なるを知りて自ら努めて修養せしためにこそ今日あるを得たり……と申して居ます。

女人との問題は中々難しいものです。幸に部員は志操堅固若き感激を全て運動に注ぐのでいゝのです。やれ電車の中で誰が笑つたとか傘をさしてくれたとか、邪心なき好意を行動を曲解して女の一笑一動に、さゝやかな自己満足を味つて喜ぶとは情ない人も多いものです。私も本性女子に無關心たり得ぬ事は知りつゝも此の二三年私の關係する仕事の上から又教會等にての教からリベラルな交りにいつか女子といふ觀念がうすらいで來たのです。それでまあ私の見解と方法を傳へて見るのです。

我々運動人としてはシーズン、オフの時が最も動搖する時です。シーズン中は決してそんな事は考へもせず考へられなのです。只最近頃に自己の修養を考へまして、私は先づこの女性といふものとの戦を第一に持ち來つて心を試したのです。幸男子には理想があり向上心あり事業慾がありますので一つ二つの仕事に熱中し理想を求めて進みますと比較的樂に此の問題は解決されます。我が部員の道もここにあると思ひ

ます。

然らば戀愛は果して悪いものなるか？ 決してさうではありませぬ。「たはむれに戀はすまじ」このたはむれが悪いのです。世紀末的な態度もよくありませんが煮へきらない小さい自己満足に恍惚たる人の多いのにいさゝか物悲しく思ふのです。

女は一人じやない幾人も居るとよく申しますが女性に取つては何と慘酷でありませうか、一人居れば結構ですし又一人しか居ないんじやないか然もその一人にも一生會へない人が居るのではないかと思ひます。美しき純情はおもちゃではありませぬ。輕々しき戀は失意の因です。たゞ獨占慾からして一人を得べく熱中して他を顧みず幸を感じる人と意識して更に大なる愛にすゝまんとする人とあります。然し常に自己を高めて行くのを忘れてはなりません。

芭蕉と壽貞尼、の關係等を考へれば流れ出る美しさに清さに頭が下ります。孤獨に生きた俳聖芭蕉にかゝる事のある事が私には一つの尊い教へであります。藝術的修行が同時に氣も貴い宗教的勤行であつた此の人の踏み來し道は、運動に精進する私達にも一つの教へを與へます。死ぬる迄自己を高め

ていつた彼を想ひますと戀愛も女も小なるものとして大なる宇宙に抱かれて行くではありませんか。

愛は求めるものでなくして與へるもの、戀愛は自然發生的な愛の授受と見ます。自ら意識して之を求めるなんて心得違ひだと思ひます。初戀の夢は美しいですが私共は更に大なる夢にふけりたいのです。

男女七歳にして席を同じうせずと昔は申しましたが、只今ではさういふ人も居りません。決して異性をおそれてはなりません。大いなる愛に信頼し奉仕し合ふ時清き交りを續ける事は大いに意義があります。良寛と貞心尼が關係、清くして良寛の死する迄つゞいた交友をして共に自己を高めていつた事は私共の仰いで讚美する所です。誠をつくして交り、そして互に自己を高めるなら相手を男と限る必要はありませんが併しわからぬ若い中に強ひて理想を求めて飛躍しては大變です。たゞ私のつたない經驗からは部で得る誠心の交りはそのまゝ何處に通しても間違ひありません。何事も自己の心の安定さへ得ましたならば、問題はありませぬ。若き部員諸君よ自己を高め部の生活に没頭さへすれば自然と偉くなつて行きます。長瀬さん、二階堂さんが御手本です。

## 筆のまゝに

### 豫三 大掛隆久

想ひ起せば、僕がボールを蹴り出したのは丁度小學校の三年の頃で、今からざつと十年も昔の事である。當時僕等の小學校が附屬して居た高等師範學校がサッカーで相當鳴らして居た頃であつたので、勢ひ小學校も蹴球熱が旺んであつた。父にせがんで蹴球靴を購つてもらひ、それをはいて毎日通學したものであつた。あまり歩き良くも無かつたが、彼の頃は非常に嬉しくもあり得意でもあつた。

附屬中學校に進むと、此處も小學校以上に蹴球熱が盛んで今日ではそれ程でも無いらしいが、入學當時は運動と云へばサッカーに限られて居て各學級とも大低ボールを持つて居て學課が終ると十分位の休みでさへも運動場に飛び出してボールを蹴つてゐたものである。

中學校ものんびり過し、商大豫科に入學したのは、ほんの昨日の様な氣がしてならない。勿論豫科ではサッカーをやる積りで居たのだが、入學當時、書物を買ひに行つて學校でゴツサンに逢つた時「サッカー部へ入るんだらうな」とか何と

私にはどうしても戀愛に全てを與へる事が出来ません。自己を高め行く道に、理解のある友はうれしいが、長き人生修行の旅路に相互に自己を高めゆく交りを求めるものです。

小學生の入交りて騒ぐ中に、又は小さな子供の友として一緒に遊んで始めて忘れてゐた童心を想ひ起します。私はこの中にあつて自己を洗濯致します。一點の偽りなき世界は常に清き流れに音たて、私の歸るを待つてゐます。

愚鈍な私、進歩おそき私はここに力を得て又自己の生活に飛び込みます。戀愛を超越し苦しみを起え、偽りと惡に汚れずんばあゝ榮光の日近きにありと感謝の中に大いなる愛の朝の明けかゝるを悟ります。

#### 十、結び

現實に目覺めて幾多の辛苦も經、今や想出は唯美しいものと残つてゐます。蹴球部も最早十二年を過しまして悲しみ苦しみも美しき想出となつてゐます。

フラ／＼と部に入りて三年餘りさ迷ひ歩いた私もどうやら一つの道をたどるやうになりました。進歩の自覺に心は喜びふるへて居ます。前途は遠く路又險阻でしやうが、何か心の中にグイ／＼と私をひいて進み行くものがあります。現實に感謝しつゝ進歩を求める心それが私の現在で漠とした未來にたゞ心の燈一つを以て正しき人道に足跡を残したいと思ひます。

—九、七、一〇—

か云ふだらうと思つて居たら、とたんに「本を買ふのはよせよ、部員からもらつてやるから」と云ふんで、すつかり面食つてしまつた。實に彼氏チャツカリしてゐる。

そんなわけで、何の事無くサッカー部に入つて二年間ボールを蹴つて來ました。

)(

嬉しい事も數々有つたが、悲しい事も無かつた譯でもない。想ひ出せば涙の種！まさかそれ程でもありませんが、一昨年のリーグ戦中、日本大學との一戦の時、足を怪我して動けなくなつた時には、何と云つても淋しかつたです。ゴール前で一人ドツピングして、いざシュートしようと思つた瞬間に大きなやつに猛烈にチャイヂされて、起き上つて見たら何だか足がしびれて動けない。良く考へて見たらどうも膝を脱臼したらしい。なに此の位大した事はあるまいと思つて續けて行つた。

球が飛んで來るともう夢中でいたい足なんか忘れてボールを蹴つてしまひ、其の爲に一層ひどくなつて、とうとう動けなくなつてしまつた時には、實際涙が出た。

)(

春！陽炎のもえ立つ石神井のグラウンドに立つて、清らかな春の氣を一ぱいにすひ乍ら希望に胸をおどらせて、愉快にボールを蹴つたのも楽しい想ひ出の一つである。

夏！焼けつく様な夏の日も西に傾いて野中のグラウンドにも次第に夕暗がしのびよつて來ても、練習は続けられて行き、細長い眞黒な影が疲勞を知らぬ様にボールを追つて行く。

あやめも分たぬ様になつてからやつと練習が終る。皆が一日の成す可き事を充分に成し遂げた満足にひたり乍ら、足並そろへて合宿に歸へる頃には、空遠く夕星がまたゝいて居る。之は忘れられぬ夏期合宿の想ひ出である。

秋！リーグ戦の期節だ。

群がる敵を蹴散し、最後に優勝の榮冠をかち得た時の喜びは例へようも無い。永い過去の苦しみも楽しみと變り、來る可きシーズンへの希望がひしと身に迫る。

大切な試合が終つた時、たとへ其の試合に勝つたにしろ、負けたにしろ、其の直後には全く無感情な瞬間が來る。しば

## 四部の優勝

豫三 村井恒典

リーグ戦の始まる前まで日大が何となくこわいと思つてゐた自分だつた。蓋をあけて見ると先ず第一戦は外語だつた。案外チヨロかつた。當時フルバックをやつてゐた自分はリーグ戦をスコルクで通そうと思つてゐた。對外語戦を終て我々は合宿をやつたその最中、成溪が日大を雨の中で破つた報に皆喜んだが、ゴッサンから日大の「除のうまさ」を充分にきかされた東齒も軽くかもつて問題の對拓大戦だ。

こんな亂暴なチームは始めて見た。戦前外語と拓大の試合を見た時は大して感じなかつたが、いざやつて見ると彼等の身体には驚いた行みたいにかたい前半あの太つたCFにプロックされた時には岩かと許り驚いたが、前半幸運に三點收めて三對〇と離れた元氣もあつたし、萬事彼等をリードしてゐた。後半になつて風が出たかなと思ふ間もなく猛烈なのが吹きだした。味方のける球はする／＼と上にあがつて吹戻される。敵はどん／＼かぶせてゴールにあの身体で殺到して來る。我軍は完全に消耗して三點をとりかへされた。敵の猛威

らくするとやつと喜び又は悲しみの情が湧き起り、涙がにじみ出て來る。實際人の心は變なものだ。

運命を賭けた試合に敗れた時には、止めども無い涙が流れるものだ。此の涙は、永い間献身的な努力を盡してくれた指導者に對する名状し難い複雑な感情から流れる。自我を没却した涙である。此の涙で悲しみは幾分なりとも洗ひ流される。

僕等が豫科に入學してから此んな涙を流した事の無いのは幸福な事にちがひない。

自分の生活をかへりみると、若しも自分から蹴球と云ふものを除外してしまつたら、さぞかし無味乾燥な生活をせねばならないだらうと考へざるを得ない。

ボールと共に土にまみれボールと共に走りまはる中に替へ難い喜びを見出す事が出来る。

は益々烈しくまるでけんかみたいだ、あれでよく同點で食ひとめられたと思ふ。敵が同點でほつとしないでぐん／＼おされたら完全に負けたらう。とにかく我軍は完全にファイティングスピリットを失つた。しほ／＼と引上げた歸りの電車の中で鳩首會議を行つた。このまゝ両方とも勝ち續けたら再試合になる。誰も彼もあんな所と二度とやらないと曰つてゐる消耗の極致と言つた形で引上げた。

當時當番校だつた我校は日大對拓大の試合の爲に明大代田橋まで出かけた。同行四人長瀬、田島、鈴木と自分、成溪にまけた日大が萬に一つに拓大を破る事を期待して、長瀬田島の二氏はあつちのゴールで鈴木氏と予はこつちのゴールで、ゴールチャッチー知らぬ者がきいたら偉そうな名前の下につゝたつてゐた。除のセンタリングを小穴が先ず一點入れた時には實に嬉しかつた。その嬉しさは何とも言へない程であつた。考へて見ればするい話だ。日大は完全に拓大を破つた。その歸り四人は日大の先輩が拓大の應援團になぐられるのを見てなぐり方はあゝするのかと悟り、又拓大の荒さに感心した。「之で日大を破ればいや引分けでも優勝だね」「他力本願も仲々いゝね」等と語りながらわかれた。だが日大の強さには少

なからず心配した。とにかく徐をマークしちまへと言ふ事になり氣の強い鈴木氏ははりきつてゐた。對日大戦は變な試合をして一對一の引分けに終り最後の成溪を五對〇で破り、一先ず優勝した。

なんてまあ幸運な優勝だらう。幸運のかけには危げが付きものだ。事實非常に危げのある優勝だった。實際當時はまさかつたと思ふ。それに比べて昨年の優勝は實に堂々たるものだった我ながらよく進歩したものだと感じる。たつた八點で優勝するなんて他の五校が實に都合よく勝つたり負けたりしたものだ。

だが何と言つても優勝はうれしかった。久しい沈鬱をやぶつて始めての優勝だ。戦勝會で長瀬氏が泣いて喜んだのも無理もない。實際うれしかったのだ。おそらくあの感激は一生忘れられぬものだらう。

## 拙き体験

豫二 小西正夫

短く浅く一年の経験ではあるが、其の間自分の感じた事に

付いて少し語つて見る。この短い一年ではあつたが僕として

は何時も蹴球と勉強、蹴球と自分の身体、技術の進歩、部員としての氣分など色々考へて見た。それは試験が近づくと濃くなり、終れば又消えて行く氣まぐれなものではあつたが、先づ蹴球と勉強、僕は實はこれを一番恐れて色々考へたが、一時は蹴球を止してしまはうかとも考へた。それは丁度夏休みの合宿の頃である。兎に角運動をやつてゐて時間のなくなる事は確である。それならばその補ひはどこでするか、結局今のところでは時間に對する觀念を強くしてそれこそ一寸の光陰輕んずべからず的にやらねば到底將來成功する事は出来ぬと考へてゐる。そしてそれをやり得る人間たらん爲に蹴球もしてゐるのだと考へた。次に蹴球と自分の身体これは要するに充分の攝制をしてスポーツマンの本分を守るにあると考へた。技術の進歩これは自分の規律正しい研究、練習より外ない。そして良書を讀まねばならぬと考へた。最後に部員としての氣分これは幸ひに我部では相當成功しており、それが昨年の優勝の根本原因となつてゐるのだと考へる。何をやるにも氣分の一致は大切な事ではあらうが、特に我が蹴球に於ては著しいものがあると思ふ。以上大体この一年間僕の考へた事を全部簡単に書いて見た。今後大いに部員を獲得して蹴球一橋を作るべく一部員として努力する決心です。



## 創作

### 英雄君と叔父さん

豫二 熊澤博文

肌を刺すような寒い風をもともせず、選手達は薄いユニフォーム一枚で奮闘してゐます。霜どけのグラウンドはよくすべるので、選手達はみんな泥まみれです。英雄君は叔父さんと一しよにさつきから一生懸命見てゐます。英雄君は初めてこのアツソシエーション、フットボールを見に来たのでした。叔父さんがいつも、あんな面白いものはない野球以上だと言つて居られるので、ベースボールに熱を昂めてゐた英雄君は叔父さんに誘はれたのを幸に寒いのを我慢してやつて來たのでした。叔父さんは例の調子でフットボールの説明をしてゐます。

「フットボールといふのは英雄さん、すいぶん古い時代からあるのだよ。それも今でこそすつかり外國式になつてゐるが我が國でも蹴鞠と言つて昔からあるのだよ。英雄さんは中臣鎌足といふ人のことを國史でならつたかい。鎌足が蘇我氏を滅ぼさんとして、中大兄皇子に心中をうちあけなさらうとしたが機會がなかつた。或日皇子が蹴鞠の御遊にお出でなされた。その折皇子の御靴のぬげたのを取つてさし上げたので、それから皇子に親しみなされることが出來たといふ話があるのだよ。その蹴鞠も一種のフットボールさ」

「その話なら僕知つてゐますよ」

「ところが外國では、フットボールは野蠻人が始めたんだと言つて居るのだ」

「どうしてですか」

「あの丸いボールがちようど人間の首の大きさ位だらう。昔の野蠻時代には敵の首を取ることが第一の名譽だつたのだ。今でも台灣の奥の方へ行くとな人の首を澤山取つたもの程偉い事になつてゐる所があるさうだ」

「あ、僕台灣の吳鳳といふ人の話讀本でならひました」

「さうだ、吳鳳といふ人は首取の惡習をやめやうとした偉い

人だよ。それと同じやうな時代があつたのです。その時代に首を取つた野蠻人は嬉しさの餘り有頂天になつて、その首をなげ上げたり蹴飛ばしたりして喜んだのです。その風習がだん／＼變化して來て今のやうなフットボールになつたのです。つまり昔の首が今のボールさ」

「ちやあ、すゝ分残酷な野蠻なゲームですな叔父さん」

「いや／＼今では決してそんなことはない。現在ではフットボールは最も高尚な、立派な紳士のゲームとなつてゐるのですよ。英國ではフットボールの選手と言へば代表的なジェントルマンとして世間の尊敬を受け、間違ひのない人として非常に信用されてゐるのだ」

「さうですかね」

「だから歐米各國に於てフットボールの盛んなことは驚くばかりで、日本のベースボールなど比較になりません。ベースボールはアメリカだけです。そのアメリカでもプロフェショナルの中の大リーグ戦、殊に世界選手権試合こそ國民の視聽を集めてゐますが、その他のものゝ中ではフットボールが一番人氣あるものです。本場のイギリスでは尙更です。これは實際自分で経験した人の話ですから本當のことですが、ある

てロンドンの町は二つの色にわけられるといふ位です」

「すいぶん大變ですね」

「そんなわけだから前にも話したやうに、その選手の尊敬さるゝ事は非常なもので、鼻の曲つた人や耳の變てこになつた人があつてもそれがフットボールのためだと解ると軍人が名譽の負傷をした時のやうに、武士の向ふ傷として敬意を拂はれるのです」

「フットボールには二種類あるのですね」

「さうです」

「ア式とラ式でせう」

「さう。ア式といふのはアツソシエーションフットボール、ラ式といふのはラグビーフットボールのことです。アツソシエーションは英國蹴球協會の規則ではサッカーとよばれてゐます。日本では單に蹴球と言へば本當はアツソシエーションのことです。ラグビーはアメリカンラグビーなどもあるがやつぱり本場は英國でラグビーといふ學校が始めたのでこの名が出たやうだが叔父さんはくわしいことは知りません。これに對してサッカーは一六二〇年代に、英國のイートンといふ學校で始めて一個の競技に組織立てたやうです。けれどやつ

日本人が洋行した時のことです。ロンドンに到着してその日早速町へ買物に出かけたのです。ところが何處の店もしまつて居て商賣をして居ません。その人は、日曜でもないのに變だなあと思ひながらだん／＼行くと、今店先をかたづけられてる所が一軒見つかつたんです。そこで

「どうして今日はお休みですか」と聞いて見ると、店の人は妙な顔をして

「君は今日は見に行かないのですか」と聞き返すのです。

「何を見に行くのですか」その人も不思議に思つて尋ねると「君は知らないのですか、今日はイングランドとスコットランドのフットボールがあるのですよ。僕は急がしくて少し遅れたから今急いで店を締めて出掛けるところなのです。君も是非見に行き給へ」と言つてさつさと出て行つたのです。その人も之には驚いて、又非常に感心して自分も宿屋に歸つてゆつくり休む積りであつたが、この話を聞いて早速行つて見ますと、もう満員で到底入場することが出来なかつたのであきらめて歸つて來たさうです。こんな工合に英國人は我々に想像の出来ない程フットボールに熱心で、試合當日などは各々そのひいき／＼の色の旗を持つたり胸に徽章をつけたりし

ばり相當ラフだつたらしい」

「ラフつて叔父さん何ですか」

「つまり亂暴なのさ。イートン校で始めるまでは規則も何もない。町の中がグラウンドさ、だからフットボールをやつた跡は實に慘憺たるもので、塀に穴があいたり垣が倒れたり窓がメチャ／＼だつたさうだ。それで度々法律で禁止されたり告訴されたりした。イートン校で組織立てられる一寸前、一六〇八年にマンチェスター法廷は蹴球禁止令を出して違犯者には十二片の罰金を課したといひます。その理由なるものが「下等無頼なる若者が自分達の愉快のために市民の財産を損傷し暴行の限りを盡して……」とか何んとかいふのだから面白いぢやないか。今日の紳士的スポーツになるまで長い歴史があるわけさアハ、ハ、ハ。日本に始めて來たのは明治二十年頃だが實際に行はれだしたのは明治三十五六年で、東京高等師範がやりだしたのだ。然し一般的に世間に知られだしたのは大正八九年以後で、東西の諸大學がやり始めてからのことです」

英雄君は叔父さんに色々面白いことを聞かされながら試合を見て居ました。叔父さんも試合について色々な規則を一生

懸命説明してゐます。

「といふのがオフサイドです。つまり同数以上の敵が守つてゐる時に始めて正々堂々と之を破つて得點することが出来るのです。これがこのゲームの特徴であり、立派なゲームと言へる點であるのです。ペナルティキックなどもさうです。それからこのゲームはレフェリーに完全なる権力が與へられて居ますから、總ての判断や宣告はレフェリーの見る所によつて決定され、プレーヤーは一言もいふことは出来ません。この點ベースボールなどと全く異つてゐるのです。又プレーヤーの方から言へば廣い所を疾驅してゐるのだから、レフェリーに見えない場合も澤山あります。そんな時不正な事をしようとするれば幾らでも出来ます。又混戦の時など手を使つても解らないことなどよくあります。けれどもそれをやらない所にプレーヤーの立派なところが有り、このゲームも價値があるのです。レフェリーには絶對權があると言つたが、プレーヤーの中で眼に餘る亂暴などをした者は、レフェリーの權限で除名することも出来ます。又今のは當然ゴールインだつたのに相手が反則をやつたためにゴールとならなかつた。その不法行爲がなければ完全にゴールインだといふやうな場合、そ

れを得點の中に數へることも出来るのです。これらに就てプレーヤーは一言半句も文句をいふ事は出来ません。

こういふ風に不正な行を罰しあくまでフェアプレーを行ふといふのがこのゲームの精神です。

このゲームはまだ日本人には熟練が足らないので國際競技に進出することが出来ない程です。極東大會にも、昭和二年上海で始めてフィリッピンを負かして二等となつたので、斯界の人は非常に喜んだのだが、國際的に勝つたのは之が初めてです。その時は二對一だつたが、昭和六年に東京でやつた時には七對二といふ進歩を見せてやつぱり第二位になりました。けれど足を自由に使ふ事や走力の遅い事などあつてまだ

世界におして出ること出来ません。

「世界では何處が強いのですか」

「世界一強いのはウルガイといふ國です。英雄さんはウルガイといふ國を知つてゐますか」

「ウルガイつて南米でせう」

「さうです。南アメリカの小さな獨立國ですが、この小さな國が先年のパリーのオリンピックにもフットボールで優賞し昭和三年のオリンピックにも優賞し、また翌年の第一回

世界蹴球選手權大會にも優賞して世界に覇を稱へたのです。

「ずいぶん驚いたでせう」

「全く驚きました。どうしてそんな小さな國がサッカーの猛者なのでせう」

「それには又非常な努力があつたのです。ウルガイは非常にサッカーの盛んな國で到る所で之をやつてゐます。その盛んな事ときたら、例へば子供のある家にお土産を持つて行く場合にそれが男の子であつても女の子であつてもフットボールの球をお土産にすれば両親も子供も大喜びする位なのです。そんな風にこのゲームが歡迎され何處でも一寸した空地があると、英雄さんの位の子供までがボールを蹴つてゐるといふのです。そして廿五年間といふものこのゲームの爲に研究され練習され遂に今日になつたのです」

「全く偉いですね」

「今年あたりきつと第二回の世界選手權大會が行はれるだらう」

「ずいぶん寒くなりましたね」

「だが選手は汗と泥で眞黒だよ」

「僕も大きくなつたらフットボールをやらう」

英雄さんはすつかりフットボールが好きになつてしまひました。

試合は後半に入つてますます接戦を續けてゐました。

………完………



## 送別の辭

我々蹴球部より長瀬兄を送る事は實に感慨無量である。

顧みるに松本川村諸先輩に依りて蹴球部の誕生が齎らされてより凡そ十年其の間數多の迂余曲折波瀾重疊を経て後漸く今日其の礎を獲得たものである。殊に最近四ヶ年乃至五ヶ年間の歴史こそ我々は到底涙なくしては其の頁一頁を繕き得難く且つ波瀾を極めたものであつた。此の涙の歴史の中にあつて常に何ものも捨て、顧みず一心に蹴球部の興生に文字通り心血を注いだ人而して蹴球部正に潰滅せんとした此の危機を眞面目なまごころを以て救ひし人として長瀬兄を推し得る事は自他共に認め許す所と考へる。蹴球部の長瀬か長瀬の蹴球部かけに當を得たる言葉であつた。

然るに長瀬兄の此の眞剣なる努力の甲斐ありて蹴球部の基礎漸く固からんとする今日早くも兄を送るを余儀なくされし我等部員一同の感慨や如何。暗夜に燈明を失ひたる船の如く、又慈母を失ひたる孤兒に似て兄を失ひたる蹴球部の歩み危惧の念無きにもあらず。然しながら我々茲に勇躍して兄の志を継ぎ、兄の遺業を全く成遂ぐべく覺悟強きものあり。兄も假令其の地相離ると云へども陰に陽に我々部員一同の努力の力強き應援者として今後も大いに御盡力されん事を祈る次第である。

終りに當り兄も蹴球部先輩の一員として部生活で得たる貴い体験を根本と爲し、兄の信念を理想を現實の生活に於て實現さすべく緊蹙一番力強き御奮闘あらん事を衷心より祈念するものである。

昭和九年三月

昭和九年度主將

二階堂謹司



ながせ

本三

二階堂謹司

我が事として、心から眞面目に蹴球部の事を考へて呉れた長瀬……

緻密な頭で精細な計畫を立て、熱心に其を實行して行つた長瀬……

蹴球部の爲に學校の爲に終始した長瀬。一寸聞くと變に聞えるが、自分は蹴球部と戀愛してゐると長瀬は始終云つたものだ。之こそ蹴球人の到達すべき最終の境地であらう。兎に角蹴球部に衷心感謝して、蹴球部の爲に何ものをも辭せずと盡力しようと思ひ考へて努力したのが蹴球部と戀愛した長瀬の態度であつた。眞面目に考へて努力すればする程蹴球部生活其自体が有形の又無形の貴いものを長瀬に與へて行つた。更に之に感謝して益々蹴球部を愛する氣持が起つて進んで蹴球部のためにする長瀬は、次第次第に

蹴球部の向上に盡して効あると同時に、自らを蹴球部生活を通じて大いに磨く事が出来た。長瀬の今日持つてゐる強く正しく微動だに許さない信念、又何事に拘らず緻密に考へる頭腦等何れも蹴球部生活から得た所の貴い体験であらう。又蹴球部が此の先年來の不振に事代へて、一昨年昨年と三部二部へと昇級して來た其の發展も、長瀬の此の蹴球部を愛するが爲に爲す努力に負ふ所又大なりと考へる。かくして始めて長瀬も伸び蹴球部も伸びて行き、又伸び方も次第に加速度的に増して來る。

蹴球部は長瀬に感謝し長瀬も蹴球部に感謝する。之が長瀬が蹴球部と戀愛した最も貴い境地である。蹴球部がどんでん蹴いでゐた時から最近漸く其の基礎成り確然とした存在を齎し得た今日に到るまで常に一人で背負つて何事に拘らず考へて得る事が出来た。此の重鎮の長瀬をこの度送る事は我々蹴球部の愛人を失ふと同時に蹴球知識を博く深く有ち導きともなるべき人を失ふ事に於て我々として淋しく感ずるを禁じ得ないのである。

然し又目出度く無事に學校を卒業して愈々晴れの繪舞台社

會に乗り出さんとする第一歩の就職も蹴球生活に於て得たる長瀬なる人となり依り難く突破する事が出来、今や波濤逆巻く大洋へ萬帆に風を孕んで出で行かんとする帆船に似たモリ／＼の張り切りを持つ長瀬には心から祝福しなくてはならない。そして此の容易ならざる長き航海をも、着實にして思慮ある一歩一歩を踏みしめて行かれん事を心から祈る。

又我々も力を併せて及ばずながら眞剣なる努力を爲し緒に就かんとする蹴球部の創業守成の業に微なれども懸命の貢献を致さんものと覺悟してゐる。

## 長瀬君を送る

本二 神野光司

蹴球生活六年間、波瀾極りなき商大蹴球部を雙肩に擔つて力強く一歩／＼を踏み固めて行つた長瀬君を今春愈々社會へ送ることになつた。

先づ長瀬君の卒業を心からお祝ひすると共に、斯くの如き

も餘り話が無かつた。これには當時の部の氣分も餘程影響してゐたのであらう。

とにかく日常誰に對しても非常に親しみある長瀬が事部に關しては強い熱と鋭さを深く藏してゐたのを知つたのは僕が豫科三になつた時だ。

本一の時の病から全快されて元氣になつた長瀬が本二の春頃からは本當に身を投じた眞剣さで部の將來を考えられた。今にしてみれば豫科三の四月委員長を命ぜられて長瀬の家に行つた頃、その話の一言一句仕事に關する用意周到なる準備總べてに於て今迄の蹴球部では駄目だ、これを何んとか建直して行かなければと云ふ意氣と熱が言外に溢れてゐた。當時にしてその熱の如何に大きなものであつたか、その意志の如何に強固なものであつたかをよりよく知り得たならば萬事に於てもつとはつきり出来たであらうと遺憾に思つてゐる。

この年から部員の淘汰に關する長瀬の鋭い英斷が始つた事は誰しも知るところであらう。去る者は追はない。部の生活を中心として眞面目な氣持で練習を考えてゆかない者は除名するとも厭はない。その根本に於て從來とは變つた方針となつた。

先輩を出すことの出来るのは、我々蹴球部は云ふに及ばず商科大學の名譽に於て此の上も無い喜びである。

内には我々部員の生活の中に残された尊いあるもの、外には過去の戰跡が示す堂々たる成果からして今更長瀬先輩のことに就て拙筆なる僕がとやかく云ふに及ばない。

然し乍ら入學以來四年間蹴球生活を通じて共に長い時を接しられたことから、何時かの機會に長瀬君から受けた多くの尊いものゝ一端でも書いて見度いと願つてゐたので、今度の二階堂君の試みも大いに意味あるものと嬉しく思つてゐる。

扱長瀬先輩と云ふところであらうが今迄の習慣から先輩等とくつつけると、どうも親しみが出ないから、やはり「ながせ」と云ひ度い。

願れば今から四年前始めて豫科の帽子を被つて石神井原へ出かけた頃、長瀬から豫科一の教科書を一揃ひ世話して貰つて買ふ積りだつた金で直ぐに蹴球靴をつくつたのが、そも／＼ボールを蹴りだした最初である。

豫科一年の頃はプレイを通してのみ長瀬と接し、それ以外には麻雀等を教えて貰つたぐらいで當時豫科三で何時も晝からは必ず部室に一人ぼつんと煙草を吹かして考えてゐた長瀬と

この年多數の部員を失つた。が同時に從來迄とは一新した緊張した雰圍氣が次第に強くなつて來た。運動部らしい張切つた部の生活が始つた。

根本に熱と強い信念を藏してこれを以て斷乎として部の革新を實現して行つた長瀬の英斷、こゝに蹴球部更生の第一歩がある。

次にこの年の夏季合宿の問題がある。病後の長瀬の體は家の方々から非常に心配されて合宿に部員と共に宿泊する事は絶対に禁じられた。これに就ては長瀬も随分考えられたらしい。なにしろ當時は部の氣持も變り何か新しい方向へ進まうとしてゐた時であり、合宿地の選定に於ても意見がまち／＼であつたから、長瀬としては部員全体として希望する所何處へでも行つて行動を共にし度いと云ふ氣持で一杯だつたに違いない。

しかし一方長瀬の体を心配された家の方の意見この二つの中にその苦しい立場は當時の氣持を書かれたものゝ中に部の事に關して些細な點まで氣を付けられてゐたのを見ても心情が察せられる。

合宿の一件に限らず根本を定めてこれを行ふにその仕事の

細部に到る迄慎重に考えられ、少しの努力も惜しまれ無かつたのは強い熱なくては出来ない事だと思ふ。

リーグの試合に對してもその一つ／＼の試合を常に慎重に考へて臨んで行つたと云ふ商大チームの評も長瀬の性格の一端をよく現してゐる。

部の生活も一つの社會であり、お互の氣持が交互に働いて獨特な雰圍氣を作つてゆく。部員が部の事を考へて眞面目な日常生活を歩んで行く時、その氣持は直ぐ練習に現れて来る。しかし一面こうした眞面目な張切つた氣持を培つて行くにはその指導者の働きが如何に大きなものか、指導者にその人を得なければ決して團結の力を望むことは出来ないであらう。

チームが強くなる爲にはその各メンバーの眞剣な氣持これを輔ける後輩の力そして全体を一括して人心を收攬してゆく指導者の熱意がなくてはならない。

長瀬が「人事の問題は難しい」と云はれるのをよく聞いたが適材適所において初めて人の和と云ふ事もよく保たれるだらうと思ふ。

一つの纏まつたチームを作り上げる迄、人の和と云ふことに實に細心の注意を拂つてゆかれたのは、長瀬の日常生活

からよく知る事が出来る。

グラウンドに於ける研究的なプレイ、勇敢にして謙讓な態度直面目な日常生活、事に關する判斷の妥當なこと、此等總べてに一貫する強い信念が現在の部を築く柱石となつてゐるのを考えれば實に感謝と感激で一杯になつて来る。

蹴球部は力強い先輩を持つた。

この先輩の残された尊いものを決して失つてはならない。

長瀬が部の建直しに如何に苦心され努力され、そして二部への昇格を如何に喜ばれたかは六年間ボールを蹴つてみなければ本當に解らないであらう。

現實に直面して始めて先輩の氣持を一つ／＼知る事が出来る様に思ふ。

大きい目からみれば大なるものになるし、小さいものがみれば小さいものになつて了ふ。

未だ小さい自分が先輩の偉大なる功績を見ても決してその總べてを捕える事は出来ない。

## 長瀬先輩を送る

本二 水島 茂

過去の商大蹴球部それは

敗るゝことのみを知り

勝利の感激を忘れたる

憐れむべき存在であつた

今日の商大蹴球部

それは常勝チームの名のもとに

四部から三部へ二部へと躍進し

更に一部進出を企つ

蹴球界のダークホースたる感あり

長瀬先輩の努力の跡は

斯くまで明らかに現はれてゐる

長瀬先輩の商大蹴球部中興の偉業は

永久に燦然と我が部史に輝く

昭和九年春未だ淺き頃

我が一橋より 我が蹴球部より

長瀬先輩を社會に送り出す時

感謝の念と寂別の情とが交錯する

## 長瀬兄へ

本一 淺枝彦太郎

荒井君がよくこんな事を言ひ／＼したものだ。

「長瀬さん一年落第しろよ」

我が蹴球部から一人の長瀬君を送り出す事が大きな誇りであり後に残る我々として嬉ばなければならぬのに、この言葉は恐らく部員全部の言葉である様に思はれる。僕が豫科へ入つてからの三年間に於いても長瀬君の存在は蹴球部の大きな存在であつた。三部から四部へ轉落して忍苦二年漸く昔の商大蹴球部に還つて來た間に於ける長瀬君の残された足跡は大きいものであつた。

去年の日記を読んで居たらこんなのがあつた。五月だから長瀬君の病癒えて可成り経つては居たけれど、練習中に於いて何とはなく長瀬君の体を心配して居る様な様子が感ぜられた。練習中不用意の一言として何でも病氣された長瀬君に言つてならない様な事を言つてとても後悔した事が書いてある。

今から考へて見ても「不用意の一言」がどんな言葉であつ

たか思出せないけれど、歸りの電車の中で隣り合せて坐りながら殆んど一言も口をきかなかつた事、家へ歸つてからも落付かず手紙を書いて詫びようかと思つた様子など、氣持の悪い程はつきりと思ひ出される。長瀬君に悪い事を言つたと後悔しながら卒直に詫びられない自分をどんなに惨めに思つた事だらう。

グランドでひどく衝突してぎよつとした事又自分許り叱られてる様で癩に觸つた事など、三年の蹴球部の生活には幾多の思ひ出が盛られて居る事だらう。

我々は常に教へられ導かれて來た。そしてこれからもその通りである。今の蹴球部とこれからの蹴球部を同じ精神の上に進めて行くことが我々の残された責任であると思へない。長瀬君の六年間の中に蹴球が動いて居り、我々のために残されたものは何と言つてよいか分らない精神である。我々はこの精神を自分の中にも生かし、長く／＼傳へて行く事が勞多くして學窓を去られる長瀬兄への唯一の報恩である。

我々から長瀬兄に言ひ得る事は唯一つである。よくこんな事を耳にする。學生時代に運動をやつて居た人達が卒業すると間もなくよく病氣する事を。

を教へて呉れたのも長瀬さんでした。

私達は蹴球生活の外に於ても少からず御厄介になりました。悩みは一處に惱んで頂き、喜びは共に喜んで頂き言ひ知れぬ親しみと尊敬とを捧げて來た長瀬さんです。その長瀬さんが、今私達のと異なる社會へ飛び込むんです。

親しい尊敬する人に去られる悲しみ淋しみ、私達は其の中に今浸つて居ます。

私達が四部より三部へ三部より二部へ上つたのも皆長瀬さんのよき指導によつたのでした。

精神の上にも、技巧の上にも私達は皆長瀬さんの指導を仰ぎました。そして長瀬さんの言ふが儘に安心して身を任す事が出來ました。長瀬さんの深く貫いた考へ方は私達の行動を間違なく規定したからです。

私達は随分辛い思ひもし、苦い經驗をしてゐます。然もそれよりもつと辛い思ひもし、苦い經驗もし荆棘の道を歩み千仞の谷を彷徨ふて來た人、長瀬さんを知つてゐます。

それゆえに私達はせめて長瀬さんの居る中に一部へ昇進したかつたです。せめて高商大會だけでも全國と言ふタイトルを得たかつたです。そして長瀬さんを心残りなく送り出した

我々は教へられ導かれて來た。これからも教へられ、導かれるであらう。我々は長瀬兄の益々御自愛あらん事を祈つて止まない。

## 長瀬さんへ贈る言葉

本一 荒井文雄

長瀬さんお目出度う御座います。首尾よく卒業なされ芽出度く就職なされた事に對し、私達は此の上も無い祝意を捧げると共に此の上も無い喜びを感じます。何しろ私達のお父さんであり、兄さんであつた長瀬さんが、卒業し就職なされたんですから……。

然し乍らさう感ずる直ぐ裏から、私達は離別の悲しみを淋しみを感じます。「會ふは別れの始め」とか言ふ言葉も此の悲しみを淋しみを決して打ち消して呉れないです。

過去幾星霜或時は大厦をその手一つに支へなければならぬ様な場合に立ち、又或時は病の床に斃れ乍ら、而も志を變へず私達を指導して下さいました。そして蹴球生活を通して私達に男らしい心を吹き込んで呉れたのも、又試合に勝つ事

かつたです。言ふますまい。呼んで見ても返らない日の事は。それも叶はない今となつては、私達は長瀬さんの後を辱めぬ様に務めるだけです。私達は長瀬さんの教へを胸に更にその意志を引き繼いで、一路全國制覇へ邁進します。之は強ち架空の事ではありません。まだ私達は若い血に燃え闘志に燃えてゐるのです。安心して下さい。私達は慢心してゐるのではありません。私達は全國制覇に向つて邁進する事が、長瀬さんから受けた恩に對する最適の御恩返しと心得ます。

例へそれが一足飛びにならずとも、柳に飛び付く蛙の様に飽く迄試みます。

長瀬さんどうぞ心残りなく卒業して下さい。私達は徒らに長瀬さんの送別を悲しむものでありません。例へ長瀬さんの体は我が部から離れても魂は私達の五体に宿つてゐます。私達は其の長瀬さんの魂を只閉ぢ込めて私達の五体の中に朽ち果てさせる事は止めて、必ずその魂の躍動を來る可き秋のシーズンその次のシーズン、否永劫に燦然たるものとして示しませう。

之が私の長瀬さんへ贈る言葉です

……完……

# 離別

(長瀬兄へ)

荒井文雄

今宵お別れ松が枝に  
月も朧に泣いて居る  
柳の枝に吹く風も  
今宵は悲しサヨウナラ  
樂しき昔も今は只  
悲しく残る語り草  
街の灯淡く泣く今宵  
君は去り行く筑紫路へ  
濱名の湖の岸邊にも  
君戀ふ千鳥は鳴くならん  
筑紫の海のなぎさにも  
君戀ふ波は寄するらん  
高き望みを胸にして  
遠く都を去りて行く  
君が姿は恨まねど  
別れ心の切なさよ  
今宵お別れ街角に  
人も淋しく泣いてゐる  
瞳に残るみすがたも  
今宵は悲しサヨウナラ

筑紫の君へ  
幼き日々の物語り  
遠いお國と聞かされし  
筑紫の國よ波超えて  
遠く思ひを君に馳す  
呼べど答へず今君は  
遠き遙けき筑紫路に  
涙に霞む月を見て  
遠く故郷を忍ぶらん  
遠く離れし君なれど  
筑紫の春の葉草にも  
君忍ばずやグラントの  
昔踏みにし露草を  
流れる水と過ぎし日の  
はかなき命は白露野露  
筑紫の空は今日も雨かよ  
眠れぬ夜半の夢通ふ

## 長瀬兄に捧ぐ

本一田島輝重

幾くそ度迎へ送りし春なれど

今逝く春ぞわけて戀ひしき

「長瀬さん」一人ソツト貴兄を呼びますと不思議に私は心靜かに落着をとり戻します。まつたく物事をぐつと考へ究める事の出来ない程疲れ果てた時、心の亂れさわぐ時、常に私は兄の姿を想ひ浮べ、自らを救ひ勵ますのです。雨が降り風が吹き、櫻の色の褪せて散る頃は氣も重く寂しくなります、が又暖いのかな日にはたゞ愉快で朗かになります。涙の春、笑の春、年毎に變つた感興を味ひましたが兄は六年、私は三年の螢雪をつんで今入れ違に國立を出入すると思ひますと、此の春は何と異つた感じを興へて呉れますか、一人落花の小平に昔しのべば一しほ無常をおぼへます。

久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらん …古歌…

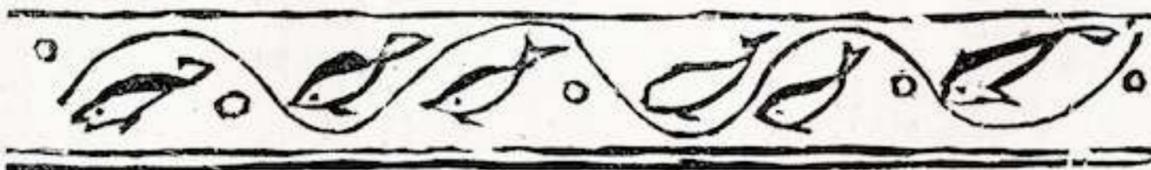
一人追憶にふけりつゝ何時か我が身を國立に見出ししました。貴兄にも想出多き國立に、新しき角帽の姿に心持恥ぢらひ

つゝ、明朗な春の一日、グラントの芝生の上にねそべれば、青い空澄んだ空は私をスーツと呑み込んでしまひます。すると想出は走馬燈の如くチラツ／＼と片影を大空に描くのです。

西へ西へ悠々と飛び行く一片の雲、その白雲を追ひかけて大空遙かに瞳をやれば何時しか長瀬さんの顔が浮び出てきました。別れたあの日もまだ昨日としか思はれません。たゞ懐しき貴兄の在りし頃を虚空にゑがきつゝ、春めく芝草の上を横轉するのではした。

想へば三ヶ年に満たぬ短い交友といつても常に受身に立つての導かれ行く交りでした。始めは恐る／＼次には引ずられてそうして遂には進んで自ら此の身を打ち込んでいつた蹴球部に於ける生活。さうです。眞の意味で長瀬さんと呼び得る様になつたのは此處一年半の事で其間に私は驚く程色々の出来事に會ひ然も常に暖く理解され助けて下さつた兄の御蔭で今も未熟ながら部の末席を汚して居ます。

或時は自暴自棄となり、又絶望の淵に立つたり心の惱みに幾度か闇に一人生きる道を求めて求め得ず、深夜の街をさすらひ歩いた事もありました。が長瀬兄二階堂兄等好き先輩と



同學年の部員諸君との交情は常に私を地獄より救ふ一條の蜘蛛の糸でした。彼等なかりせばと今に感謝の念深く及ばずながら前途多難の蹴球部に我が學生生活を捧げんと覺悟して居ます。かかる私が比較的樂に全部員の空氣に浸れる様になつたのは長瀬さんの感化深かつた事は疑ふべくもありません。

今兄は遠く九州福岡にあり、我が身に千里の翼なき限り親しく警咳に接する事も時間的空間的に制約されて居ると思ひますと、相會ふ日又近き明日にあらんと慰めつゝも別れは悲しいものでした。

東京驛へ馳せつけた發車間際の四分前。悲壯な中にも烈々たるキャブテンオブイングストリーたる氣魂をこめた、「長煙遠く……」の歌聲。その中に深くうなだれた兄の面貌。

この一瞬私は深き哀愁の虜となり行く自分を引きとめんと空しい努力に懸命でした。がそれも次の瞬間萬感胸に迫る感情の流れに負けてしまひました。まこと今、激情の嵐の中に沈黙のまゝ立つ兄の姿を見上げその心の中を推し量つた時、強い人長瀬さん、男といふような文字の中から感情の人長瀬さんといふ文字が次第に大きく映つてきました。

したようにさへ思はれたのです。二階堂さん達は私の沈黙を心配したらしいが私には他人の心など考へる餘裕はありませんでした。一人靜にそつとしておいてもらひたかつたのです。あゝ現實に幾度か夢破られつゝも、持前の涙にもろき私は未だにロマンティックな夢をしたふのか。だがあの強い感情の嗚咽に會つては赤裸々の自己に歸らざるを得ませんでした。貴兄は何を女々しいと御叱りかも知れませんが幼き時より人一倍人の情に感泣しつゝ育つた私には、身体に似合はず細い自己を持つて居ます。そして私は常に美を心の美を追求してやまぬ、ピュリタンに近い修道者に憧れを持つ若人なのです。

長瀬さん……貴兄の去つた事は悲しい。が私にはそれがかへつて天の與へた試練のような氣がします。悲しみは人に分つなかれとは思ひますものゝ暖い慰めは之を消して呉れる氣がします。さうして多くの人は他人に慰めを求めます。然し自ら自己を制服するのでなければ確たる信念に生きる事は難しいと思ひます。

他人に全てを頼る生活は他目には平安に見えますがその人は自ら道を拓く力を果して持つて居ませうか。部員の無邪氣な

目に涙せねど心に泣く男

晴れの門出が何悲しい

乃公は責務を果すのだ

いざさらば行くぞ筑紫へただ一人

君よ知らずや不知火は

燃ゆる蕪望のシンボルだ

シュツ／＼と次第にスピードを増して去り行く列車を見送りつゝ帽子振り／＼泣いた人も多かつたでしょうが一人私共を残し行く貴兄の御心はそれよりは更に深刻なものだつたでせう。私達は一人の兄に別れたのです。が貴兄は全ての弟に別れたのですから。多忙の中にしのびよる時のいたづらに、フット私共を想出す毎に苦笑ひする御顔が見たく存じます。

さう／＼あの歸り皆と一緒に八重州茶寮とかいふ家に集合した事は已に御知らせ致しましたが、皆が部の事、練習の事他愛なき雑談と元氣にさゞめくに反し私は自己の心をあざむき得ず反射的に益々沈んで行くのでした。

このきらびやかな女性群と流れ出る甘美なメロディー、中年男共の世紀末的な視線の交叉、ほんの僅許り前に悲喜錯綜した涙の中に貴兄を見送つた私には何だか神聖なものを冒瀆

批評を外に私は校友會の指導者として最高の立場、ひくにひかれぬ絶對の立場に立つて始めてこの心境を悟り得ました。そうして蹴球部に指導の大役を果して來られた兄につまり心配を幾度かかけ、絶對の立場の兄を苦しめた事かと今考へても冷汗の出る程濟まなかつたと思ひます。最後の解決を自ら苦しくとも爲す人道なき山に道を拓く人かゝる人こそ他人の事を考へ相談にも乗れるのです。かくて私は兄の後を追ひつゝ、求めよさらば與へられんといふ消極的な心を教へられた衆人より一步を進め「求めよいざ與へん」といふ積極的な力を得た氣がして來ました。之も今更ながら兄が不知不識の中に一寸した談話等により、私にかゝる考へを與へたのだといふ事がわかつてきました。ですから兄の去つた事は私に取つてこの意味に於ての絶對の試練と思ふのです。

兄は個性の強い主觀的な線の太い反面理性の力により全体を握み信と斷の二字に部を指導されました。信ずる事厚きその情愴には私の如き複雑な感情の持主も、境遇的に明るい性質を暗くして居つた私も昔の暖い和かな自己に戻つて來たのです。一昨年昨年と引きつゞき、父母、祖父母を失ひ、然もリーグ戦最中の事として人一倍氣儘に振まひまして大事な試合

を休んだ事もあつた私を、そのまゝに信ぜられた兄の態度に部員の情に拘らず家庭の都合上部を辭めて働かねばなりませんでしたが、兄が腕を痛めた時毎日付き添ふて来て下さつた情に遂に止るべく決心してしまひました。想へば十月十七日母の世を去りし日、我が校友会役員五十の男女は涙と共に私を慰め會の爲に辭する事を願せんと致しました。私には満座の泣聲とほふり落つる涙に聲も出ませんでした。つまり私をかかも信じて下さるのかと感泣の末、男として私は固く手を握つて校友会の爲に盡すと誓つたのです。いはなくともよい事ですが部員の方々の誤解をとく爲に一言私が狂的に迄校友會の爲に働く理由を申し上げましたが、果して之はつまりぬ理由でしょうか。私は確信を持つて今迄終始しましたし今後とて私には校友会が生命の泉です。長瀬さんが「乃公は蹴球部と戀をしてる」と言はれましたが私も「校友会と戀をしてる」といつても大げさでない氣がします。といつて蹴球部の御恩は決して忘れませんから御安心下さい。義理と情に生命を打ち込むのが男侠なら私にだつて九州男子の血は流れて居ます。今報恩に更生する私は緊張した心と健康な身体の爲、多少の事は辛いと思ひません。兄を想ふては及ば

ファイティングスピリットを養ふと同時に常日頃から和かに他人の心を結びつける様にして下さい。さうく「煙草と言へば關内遠征の歸り、貴兄が酔ふてすゝめた一本の煙草のほろ苦い味こそ私が煙草を吸つた唯一の經驗でした。」

書けば盡きぬ長話ながら、不言實行ならで「言ふも易く、行ふも易し」といふ最高道徳の一言をモットーに進む私の前途に、如何に兄の感化が私の感謝の努力となつてあらはれるかといふ 題を宿題として今後長き指導を御願ひ致します。最後に私が誇とする校友会の指導精神を書き記して兄並びに部員諸兄へ捧げます。「進歩の無い存在は許されない」この精神に基き輝ける歴史は形成され連綿と存続されて來ました。我が蹴球部又さうだと思ひます。詳言すれば此の指導精神は理想―多くの事實に基いたに―迄到達するを目的として採用され且實行されて來ました。事實發展を望む事の出來ない存在は、没落か、滅亡か、衰退の一路をたどる事と思ひます。此の時に我々の指導精神は躊躇なく直に我々を迷路から救助し、正しい方向を教へて呉れるのです。即ち「衰退の原因を(結果を誤り無く)客觀的に探究せよ」而して「以上の事實を誤る事なき方針を樹立し、發展の舞台に飛躍せよ」この

ぬ私の心の戒として居ます。

病身の兄があれ迄に頑張つた事を思へば睡眠時間の減少も何等の負荷とは思ひません。全ての部員が一致して部の名譽の爲に生きるなら兄への謝思の一部ともなし得ると思ひます。今後私は部内に表立つて働く事も世話する事も事が許さなれないと思ひますが常に部員の一人として選手の一入として最大の努力を拂ふて末席を追はれないよう努力致します。部内外の諸兄の御指導のまゝに拙い私を生かしていただきたく存じます。

幼い時のキリスト教信仰の感化か、心の底に生々としてゐるキリスト信者的な眞面目な氣持から煙草も吸はず酒も申譯的にしかたしなまない私には兄の眞面目さがうれしい事でした。

スポーツマンは眞面目でなければと私は常に思つて居ます。眞面目な人それは信用ある人にとつて必須の要件です。他人に信ぜられぬ人程哀な事はないと思ひます。スポーツマンは運動のみに生きてはならない。心の修養をつめばつむ程眞のスポーツマンとしての輝きがあらはれると思ひます。

幸に蹴球部の諸兄は全て立派な人であります。試合により

教義を守りつゝ私は校友会事業を續けて居ますが、之が學生生活に別れを告げた兄が新生活に於て、一部に躍進せんとする我が部に取つても當はまると考へてます。

兄は社會へ我等はリーグへ

制覇目指して共に進まん

等と青空の下一人口ずさみつゝ四圍を願れば鳴く雲雀も聲和かに午後の日さしものどかに春も逝かんとする名残惜しき一日でした。兄と共に再びグラウンドに球を蹴る日の速かに來らん事を希望しつゝ今後益々兄がその本領を發揮なさらん事を期待し前途の多幸を御祈りして拙いながら兄へ捧げる一文を結びます。

—九、五、一六—

—送別の辭に代へて—

長瀬兄を語る

本 一 角 田 昇

六年に渡る一橋學窓生活を終へられて今長瀬兄は豊滿な人生への希望を目指して雄々しくも社會への輝しき第一歩を踏まれる。

學窓生活それは吾々若人にとつて單なる學問修業の爲に與へられた過程ではない。激瀾たる若人のみが持ち得る力と熱と意氣を思ふ存分に發揮しやがて人生の荒波に乗り出す堅き礎を築く點にこそ學窓生活の主たる意義が存在するのであらう。

飽く迄青春の血に生きて長瀬兄が血あり涙ある六ヶ年の蹴球生活を通じて最も有意義にこの學窓生活を卒へられた事は一人長瀬兄自身の喜びに止らず、かゝる有爲な先輩を社會に送り得た吾が部全体の無上の喜びであり誇りである。こゝにこそ我々が絶大の歡喜と祝福を以て長瀬兄を世に送る所以が存在するのだと思ふ。然し乍ら翻つて我々部員が我々の親しい部員の一人吾々の良き父としての長瀬兄を我々の家族から遠い所に送らなければならぬのだといふ事實に思ひ至る時我々は非常な喜びを以て長瀬兄を送りたい反面又非常な淋しさを感ぜざるをえない。

抑々私が一橋の門をくぐつて蹴球部の一員となつたのは今より三年餘り前丁度花開く四月の頃であつた。以來三年間蹴球の指導者として或ひは又吾々の父として長瀬兄の御教を受けた事は一方ではなかつた。私は性來氣の弱い考の纏らない

## 思ひ出

### 本一 森田 昭之

早いもので僕が石神井の土を始めてふんでから參年間にたちました。その間には實に色々な事ほんとうに色々な事が起りました。今思ひ出しては冷汗を流す程恥しい事もあり、今考へても涙が出る程感激させられた事もありました。やつとおかげ様で角帽がかぶれる様になりました一人前の大學生らしくなれましたが、僕が少年から青年になつたと云ふと語弊がありますが、我が轉換期は實に豫科參年の間であつたと内省して見て云へるのであります。長瀬兄や二階堂さんの話を聞き、又田島の話も聞き「田島君は僕より年下ですが或意味に於て遙かに僕より年上です」成程大人と云ふものは色々にむづかしい心遣ひをするものだ、自分の香氣さ加減を呆れた事もあります。此の參年間の生活を通じて僕の生活感情は蹴球部を中心として殆んどその中に没入してしまふ事はあつてもその外に出た事はありませんでした。殊に貳年からは特にさう云ふ事が云へます。僕がサッカー部を眞に愛する様に自覺した部員としての自分を見出したのは貳年からのなのであ

所謂優柔不斷な性質であつた。蹴球部に入つてもその性質はたちまち表れて部員の氣分を損ふ事も少くなかつたと思ふ。然し乍ら三年間の蹴球生活とりわけ父としての長瀬兄の人格は當時の弱々しい私の氣持に強い精氣を與へてくれた。

無論長瀬兄のかうした力強い影響は單に個人としての私のみ止らなかつた事は云ふ迄もない。奈落の底に落ち込んだ當時の蹴球部が暗黒に包まれた中に唯一すぢの光明を求め得たのは全く長瀬兄の存在に依つてであつた。爾來沈滞から脱し得た吾が部が四部から三部更に三部から二部へと一路發展の過程を辿つた時長瀬兄が如何に熱誠を込めて吾が部を指導し續けたかは私が敢てこゝに述べる要はないと思ふ。

要は我々蹴球部の偉大なバイオニヤたる我々部員の父であり眞の意味に於るキャプテンたりし長瀬兄のこの蹴球部に残した足跡の如何に偉大なりしかを想ひ浮べる時、我々部員が徒らに安閑としては居られぬのだといふ各自の自覺こそこの父に對する子又キャプテンに對する一部員として吾々の深く感銘すべき事柄であらうと思ふ。

最後にこの點部員諸兄と共に更に絶えざる奮闘を誓つて、遠く九州に營々として働く長瀬兄の御健康を祈りたいと思ふ。

ります。僕が蹴球をやり始めたのは小學校からで、主としてハーフをやり時にはゴールキーパーをやらされた事がありました。當時の僕にとつてキーパーをやらされるのは死ぬより辛かつたので何故かと云ふと今ではキーパーが點を入られるのはメンバーの全責任であると思へばならぬし、事實さうなのですが、小學生にはそんな考へはありませんから、入る度にフルバックに睨まれるのが實に辛かつた。當時の僕らの小學校チームの中から慶應の伊藤、早稻田の大越、一高の稻川などが居ますが、僕も今年から同窓生の様に神宮で一邊か二邊位やれるらしいので大に期待して居ります。スタンドで見られるとなると自分乍ら今迄の様な下手なプレーではみつともないし、もつとうまくならうと決心したのですが、確かに一部が二部以下と違つて見えるのも、此の邊に原因が多分にあるんじゃないかと睨んで居ます。入學の當初身体検査の時君はどの運動部に入るかねと聞かれて、ア式蹴球部と書いてあるのが眼に入つて、商大にも蹴球部があるので、と聞いたら ありますとも、と云はれたのも耳に残つて居ます。石神井で後藤さんに授業が済んだら練習に來たまへと云はれて初めて、部室を訪れた時第一印象は室も薄汚いと思つたが

随分薄汚いのが揃つてゐるなあと思ひましたが、皆に親しみを以て迎へられて兄のない僕には新しい兄を持つた様な気がしました。長瀬さんに聞くと勧誘をしないで五人も新部員が一边にどか／＼来るのは滅多にない事ださうですが、その割に蹴れる者も少かつた。特に僕と鈴木なんか一中式のインチキな蹴り方で、始終球をあげちや後藤さんに文句を云はれました。鈴木とは當分の間ゴールの後で蹴り方の競争をしたものです。

當時の蹴球部の最年長者は長瀬さんでした。西田さんもたまには來られました。練習する本科生は長瀬さんだけででした。一年の時は角帽はそれこそ畏敬の念を以てながめたものでした。今では本科生が九人も居るのでから變つたものです。

豊田先輩も卒業したて、ちよ／＼遊びに來られました。始めはだれだか知らないでボール屋かとも思ひました。始めは例によつてストツピング許りやらされた様な気がしますが、荒井も當時は可愛らしい少年だつたです。黄色のパンツ

## 長瀬先輩のお別れに臨んで

豫三 大掛隆久

長瀬先輩なんて云ふと何となく固苦しくなつてしまつて妙にぎこちなくなつてしまひますので長瀬さんと云はせて頂きます。

「光陰矢の如し」とは云ひ古された言葉ですけど、僕が輝かしい希望にもえて豫科に入學してから早や二年、其の二年の間、或ひはグラウンドに於いて、或ひは平生に於いて兄の如くしたひ親しんだ長瀬さんを、學窓より、いや商大サッカー部からお送りするに際し萬感交々胸に迫り、つたない筆をとり思ひの一端を筆のまゝに綴らざるを得なくなりました。

長瀬さんとは中學を同じくする關係等で、豫科に入學致す以前から御名前は存じて居りました。

入學當時の事は何だか遠い昔の事の様思はれて、細かい事は想ひ出せる様な想ひ出せない様な……唯心に強く印象されてゐる事は「長瀬さんを目標として頑張らう」と思つた事です。中學に居た頃は良くボールは蹴つて居ましたけれど、試合に引つぱり出されたのが二、三回で、プレイとしてのフツボールは型ばかりしか知らず。唯ころがつてゐるボールを蹴るより外に能無しでした。それなのに當時は部員が今の様に多くなかつたので、直ぐに試合に出なければならぬ事となつ

が特に目立つてすぐ名前を覺えたのは彼でした。一番親しみにくかつたのは角田です。彼のシャツをキチント襟迄かけてるのを見て始めは地方の人かと思ひましたが、五中出身だつたのは意外でした。

一番始めにやつた對外試合はアラン俱樂部でした。その時も左のハーフをやらされましたが、實に涙ぐましくなる程純眞に全力を盡しました。そのせいだかどうだか知らないが、五對二で辛勝して大に氣をよくしちやつたです。兎角動き方を覺へると人間はするくなつていけないものです。一年の秋のシーズンは實の所、有耶無耶に四部に落ちてしまひましたが、參年間に一番こわかつたのは二年の春に皆が何だかだられて練習して、長瀬さんにこんな事では又落ちるぞと云はれた時です。その時はほんとにさうだと思ひましたが、部の空氣も自分には一轉機を劃した様に感じました。

今當時を顧みて長瀬先輩の精神力の感化の偉大なるを思ひ長瀬、二階堂、後藤のトリオの一人を社會に送らねばならぬ秋に當り、僕らにとつて一番怖いのは心のゆるみである事を強調して筆を置きます。

てしまひました。一番印象の深いのは何と云つても始めにやつた立教との試合でした。あの時はたしかインナーをやつて居たのですが始めての事とて、いさゝか上り氣味で相手の黄色なストツキングばかり目について、自分乍らなさけなくなつてしまひました。

然し長瀬さんの御指導を受けて練習し、他のメンバーに助けられ段々フットボールをおぼへて來たのですが、其の頃自分にはフアイティングが殆んど無かつたと云つても良いのです。若しも今自分に少しでもフアイティングが有るとしたならば、之も長瀬さんから受けた尊い感化と信じます。

斯う云つては失禮と思ひますが、長瀬さんはスポーツマンとして充分な体格をそなへては居られませんが、グラウンドに於いては人一倍良く動かれ、人一倍強いボールを蹴られ、常にベストを盡す氣力を持つて居られます。僕も体格は良い方でなく、少し疲れると動けなくなり、又ボールも蹴れなくなつてしまふ。こんな事でどうする！長瀬さんを見ろ！斯う自ら勵まして練習して來ました。此のお蔭で、少しばかりへばつても、何の此の位でへばつてなるものか、どうしても勝つんだと云ふ氣力が出る様になりました。

此の様な事は僕一人の事では無いと思ひます。以前にはあまりボールを蹴らなかつた人々が商大に入つてボールを蹴り出し、立派なプレーヤーとなつて行くのは、勿論各人の絶え

ざる努力に依るにはちがひ無いのですが、立派な指導者が有つてこそ始めて此の様に立派なまとまつた部が出来上つたものと信じて止みません。

想ひ出せば、愉快だつた事、楽しかつた事は数限りも無く胸に浮んで來ます。

何と云つても合宿練習は、忘れ得られぬ強い印象として腦裡に刻みつけられて居ます。夏の日が直射する道を、足をそろへてグラウンド迄走つた事、どろにまみれて猛練習をやつた事、練習終つて風呂で一日の汗を流し乍ら大聲をあげて校歌を唱つた事、夢中で麻雀を打つた事、球をついて夜遅くこつそり歸つた事、想ひ出はそれからそれへと續いて行く。

秋のリーグ戦も近づき、練習も日増しに熱を帯び練習試合の後には必ず白十字に集つて長瀬さんの批評を聞いた。之はどんなに僕等を勵まし且つ利益を興へた事だらう。

此の様にして部員の心は一つにしめくゝられて行き、團結して試合に臨んだ爲、四部より三部へ、三部より二部へと昇る事が出来たのだ。

嗚呼!! 祝勝會の感激は何にたとへよう。汗と努力の結晶である優勝カップで乾杯した時皆は泣いた。何と云ふ嬉しい涙だらう。何と云ふ清らかな涙だらう。

之を思ふ時僕はスポーツマンとしての喜びをしみじみ感じるのである。

## 長瀬先輩を送る

豫 三 重 見 敏 之

「三年たてば三つになる」で長瀬氏も學部に在る事三年、螢雪の功空しからずいよ／＼三月目出度く御卒業されるが、私は長瀬氏と御交際の榮に與る事二年、しかも其の時は蹴球部は四部から三部へ二部へと連續優勝していはば順境にあつた時であり、人間の眞價の最も現はれる逆境時代の氏を知る事が出来なかつた故、其の全幅は知らないが、私の知る限りに於ては當時四部にあつた蹴球部にとつては、氏は全くの育ての親の地位に在つたと云つても過言ではないだらう。

私が入部した時、他の運動部の人達は「何んだ四部じゃなにか」と侮蔑と嘲笑とを交ぜた言葉を私達に投げかけた。まだ蹴球部そのものに完全に遣入り切らない私達にとつてさへそれが非常に口惜しかつた。況んや部の指導者の地位にあつた氏の立場が如何に辛かつたか想像してもあまりがある。傳統によつて二部にかじり付いて居た部が、三部に落ち四部に落ちた時、常人なれば全く見限つたであらうに致々として復活に努力された氏の功勞たるや實に大である。

この部を建て直す爲に、氏は先ず第一に部の内部の一致に努力された。そして部員各自の接觸の機會を多くする爲に、或は外に、或は氏の邸に於て種々の會合を催された。僅か數

いよ／＼今年度の練習も間もなく始まらうとしてゐる。僕等が豫科に入つてからは、吾がサッカー部は幸運にめぐまれて實に順調に發展して來た。そして努力の甲斐あつて二部に昇る事が出來た。

然し僕等は決して現在の状態に甘んじてはならない。お天氣の日ばかり續くものではない。時には雨の降る事が有る。僕等は此の雨の日に備へて大いに心を引きしめ、今年は一歩を目標として一層努力しなければならぬ。若しも萬一の事が有つたら、切角之迄努力して來て下さつた長瀬さんに合せ顔が無いではないか。

長瀬さん! 僕等は今貴兄を吾がサッカー部からお送りしなければならぬのかと思ふと、實にお名残おしく又淋しく感ぜられてなりません。然し貴兄が學窓を去られる日は、即ち貴兄が社會に勇飛せられる日であると思へば大いにお喜び申し上げねばなりません。

長瀬さん! 僕等は必ずベストを盡します。此の誓ひを實現する事が、貴兄の今迄の御盡力に報ひる最善の道と信じます。



人でさへ其の氣分を一致させる事は相當困難である。それが少いとは云へ二十人近くの部員の氣分を全く一致させ其の上何等部員を知らなかつた當時の新人部員であつた私達が他の人々と親しめる様になつたのも全く氏の御蔭である。

日頃温厚であつた氏も、練習の時になると全く人が變つたかの様だつた。一昨年の秋、石神井のグラウンドで部で紅白試合をやつた時、部員が對外試合と違ふので張り切らずダラ／＼してゐたのを見て、試合後「また落つこちるぞ」と叱り飛ばされたの覚えてゐる。氏の日頃の行動を知る私達部員の胸にこの一喝が如何にこたへた事か、當時の私の日記を見てさへ、如何に私が後悔したかがあり／＼と書かれてあるのを見て分かる。

此程迄練習に熱心であつた氏も、練習外の事に於ては、中々朗らかであつた。氏は學生の本分たる學問については云ふ迄もなく、麻雀、撞球、座談、雑談などに就いても蹴球部ではまづ一流の達者であつた。酒も煙草も人並以上に其の優秀さを示された。この様に氏の私生活に於ける態度は全く開けてゐたので、部員の氏に對する尊敬の觀念も麻雀や撞球の時には全くフツ飛んで何等固くなる所なくまるで遊び友達の様にならう不心得者も居る。かゝる場合には氏も持前の口達者でジャン／＼遣り返しては居られたものゝ、心の中ではきつと

微笑して居られたらう。

氏の部員生活の最後の試合であつた高商大會に單に私のスタートに對する不熟練や技の拙さから専門部に二點も入れさせ遂に惨敗し勝利を以つて氏に對する餞別する事が出来なかつた事を深く御詫する。私自身は全力を盡した心算だけれどどうしても防ぎ切れなかつたあの二點、しかも去年關東で優勝してゐるだけにいくら不出場だとは云へ氏にとつてはこの試合は諦め様と思つても諦め切れなかつたと思ふ。

蹴球部に對する功勞者である氏を今更失ふ事は私達にとつては大變な痛手である。せめてもう一年若くは二年、即ち蹴球部が一部に上がる時まで、部に居て貰ひたかつた。しかしその希望は無理であり、又就職されてから遠方に赴任される氏に對し向後部の面倒を見て頂く事も不可能となつた今日、僅か書信を以つてだけしか勵して戴けないのかと思ふと何だか淋しく感じる。

氏も今は立派な一社會人として獨立される。そして今まで部に對し熱心であられた様に、其の業務に對しても熱心に務められる事と思ふ。私達も氏の恩恵に對し更に二部優勝一部へ昇進更に全國の覇權を夢みつつ精進し、氏に對する御恩返しをしなければならぬ。爾後數年氏の感化も部員の卒業と共に次第に消え失せるかも知れない。しかし氏の部に對する功績は長く部史の上に輝くだらう。私達は氏の前途を祝福し

て止まないこれを以つて送別の辭にかへる次第である。

## 長瀬氏を送るに臨んで

豫三 村井恒典

共に遇した僅か二年の間に長瀬氏の全人格を完知したと思ふのは大なる誤かもしれぬだが、一横顔位は確かに知り得たと思ふ以下筆を進まうに。

小生の入部した時長瀬氏は本科の二年であつた當時、入學した許りの自分にとつて長瀬さんとはなんて恐い人だらうと言ふ觀念を植えつけられた。二年間不幸にも連續轉落した我部の恢復はこの時と許り病後を推してはりきつて居られた兄の姿を見てかく見たのは小生許りでなくおそらく小生の同期に入部したのも亦然りだと思ふ。この觀念を最も強く植つけられたのは浦高戦の前の練習に我々の熱の足りない或日の事だつた。長瀬氏の雷が我等の頭上に落ちた。この雷の効果は甚大で我愛す可きゴツサン初め皆しよんぼりとのこされた。長瀬氏のみ孤影奮然とグラウンドを去つたこの時の恐かつた印象は今でもよく覚えてゐる。之は熱情の人である長瀬氏の面目を遺憾なく發揮してゐると思ふ。それ以來と言ふわけではないが、部員の間にて於てグラウンドの遙かに長瀬氏の姿が

見えるや否や急にはりきり出すかの様子が見えた。かげひなたは悪い事には違ひないが部員の等しく認めらるゝ所だと思ふ。かく長瀬氏の不在が能く部員間の氣分をかへ得る事は同兄の或る一面を表す事は確である。

七月より合宿にかけて長瀬氏に對する恐れはなくなつた只恐い人とのみ思つてゐた自分の觀は誤りだつた。グラウンドでは相當きびしい彼氏も平常に於ては最も善き遊び友達である事を知つた事だ。麻雀圍碁撞球何でもござれの遊び人——ちと失禮かもしれないが——たのだ。こゝに勝負事の好きな彼氏の一面が表れてゐる。確に長瀬さんは勝負事が好きだ。そして又強い。

この觀方は随分長く續いてゐる。今猶そう思つてゐる。最近になつて一面が表れだした。長瀬氏は遊び事は好きだが一方勉強家である點だらう。之は本三になつた長瀬氏に當然起る問題かも知れないが非常な勉強家である事は誤りのない事實であらう。自分も勝負事は好きだ。蹴球も好きだが勉強は餘り好きでない。やり出せば好きになるとは思ふがやり出せない。よく遊びよく暴れてゐる長瀬氏がよく學んでゐるのは確に偉いと思ふ。

次に面白く感ずる事は長瀬氏の性質が全部員の間にて波及してゐる事である。極端な例では長瀬氏の軽いどもりが今や部員の間にも相當發見せられる事だ。長瀬氏の性質を眞似よう

としてゐる部員の間にて吃音まで似るのは潜在意識下の面白い事實である。

勝つては必ず泣き負けては口惜涙に泣き奮慨しては怒る生一本な熱情家としての彼に一面理想家としての人格を見る時その複雑した全人格は到底短時日の交際では知る事の出来なものであるが長瀬氏と交友する事によつて吾人は大きな或るものを得たような氣がする。とにかく没落しかけた我部を舊位置まで復活させた事は長瀬に蒙る事大なりと言ふ可しである。

## 長瀬兄を送る

豫二 熊澤博文

一部から三部へ、三部から四部へ、四部から三部へ、そして三部から二部へと幾變遷。私は幸か不幸か、その中の三部から二部へ昇る最も喜ばしい(これまでの我が部として)時にきり合つて居ない。多年の辛苦が固まつてこの榮譽となつたのであらうが、たつた一年間の商大サッカー部に於ける私の休験でも今日あるは無理ならぬことと感ずるのである。あの熱。あの努力。あの共同心。あの團結力。いくら口や筆で述べたつて、この氣持は我々サッカー部員ならでは到底解らな

優勝カップを圍んで我々は祝盃を舉げた。踊つた。笑つた。歡聲を上げた。感激して泣いた。けれどあの涙は決して簡単な涙では……ない。二部から落ちてそして又二部への苦しい経験やら、部の爲に私を捨て、精進してきたつらさやら、そして今日を得た嬉しさやら言ふに言はれぬ感情のカクテルがこの涙なのだ。だから自分にはその眞の涙は出せないわけかも知れない。しかし自分には、さうした苦しみを充分察しられた。そして泣かざるを得ない程感激してゐた。

我が國体が外人にどうしても解らないやうに我がサッカー部の精神は他の者に正しく理解出来ないだらう。この精神だけでも優賞出来なければならなかつた。

ローマは一日では出来なかつた我が部も幾年かの陰忍自重の後にこの譽が來たのだ、とはいふものの直接の原因は、あの過去一ケ年に於ける「共同した努力」にあるのだと思ふ。サッカー部精神に基づける努力だつたと思ふ。練習のやり方がよかつたとか技術が上つたとか、そんなことをみんなひつくるめて兎に角、相共に結びついたことが原因してゐる。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずとか、實に我が部員の團結の力が今日を礎き上げたのだ。

けれど私等はもう一步踏み込んで考へる必要があると思ふ。即ち烏合の衆には團結がないといふことである。之を指

### 長瀬凱昭兄を送る

豫二 小西正夫

先づ兄の御卒業と御就職を心から御祝ひ致します。次ぎにこの一年間拙ない僕を拙ないながらも兎に角今日の僕に仕上げて下さつた兄に對し只々感謝の外は御座いません。惟ふに兄の我が一橋蹴球部史上に残された足跡は仲々大きいものであつたと存じます。それだけに又兄の御苦心といふものは並大低のものではなかつたでせう。それはこの隆盛期に立つ蹴球部に入つて來た僕には一寸想像のつかぬものでしたでせう。僕はこれ迄に育つて來た一橋蹴球部の一員として兄の勞苦の萬分の一でも味はひながら將來必ず蹴球一橋の名を成すべく専心努力する決心です。御卒業後も何かといたらぬ僕を御指導されん事を御願ひし、又兄の洋々たる前途に幸多かれと祈つて筆を措きます。

### 長瀬さんの印象

豫二 後藤虎雄

長瀬さんは愈々今春御卒業である。

導し、之を結合せしむる指揮者がなければ駄目である。その指導者の下に心をそろへて始めて團結も生れ活動も出来る。つまり、よき監督はよきチームを作るのである。我が部の場合に於てそれは明らかに証せられることである。

即ち長瀬大兄のよき監督ぶりがこの優勝をもたらしたのだ。長瀬大兄の下に一致團結したといふよりはむしろ、長瀬大兄の爲に一致團結出來たのだ。この事は我が部員の悉くが認めることであり、又大いに感謝してゐる點であると思ふ。勿論、長瀬大兄を補助して精神的にも又實際的にも大いに活躍せられた二階堂兄や後藤兄の努力も大いにあづかつて力あるのである。そして長瀬大兄は、熱のある研究的態度と、体験から得た沈着さと、敬服すべき精神とに依つて知らず知らずうちに我々に團結の精神を植ゑつけ眞のスポーツマンを養つた。

考へて見ればかく團結出來たのも結局部員の誰もがさうした立派な精神の持主であつたことに歸するかも知れないが、その精神を活用せしむべく誘導された長瀬大兄の力があつたからなのだ。

亂文を綴り、大兄の卒業と就職をお祝ひし、兄に心からなる敬服と感謝の意を表すと共に、サッカー部のよりよき將來を誓ひ、併せて兄の變らざる指導をお願ひするものである。

私が初めて長瀬さんにお目にかゝつたのは、昨年の四月、新部員歡迎會席上に於てである。未だ入學したばかりで友人も先輩も持つてゐなかつた私は、未知の先輩の中に不安に似た落着かない氣持でちよこまつてゐた。數人の部員が次々に立つて自己紹介をした後長瀬さんが立たれた。

一本科三年、長瀬です………と澄んだ聲で自己紹介を始められた。其の時長瀬さんがどんな話をされたかははつきり覚えて居ないが御話の中に次の様な意味の言葉があつた様に記憶してゐる。

「兵隊の分列式に於て、整然と足並を揃へて行進してゐる中に、たつた一人でも足並の揃はない兵士が居たら外觀の見にくいのは勿論の事、仲間の兵士達も非常にやりにくいだらう。蹴球の如き團體競技に於ては、全員揃つて足並を揃へる事が最も必要である。

たつた一人でも足並の揃はない兵士がない様に、お互に今後努力して行かうと思ふ。殊に新入生諸君はよく我が部の精神を休して共に足並を揃へて邁進して頂きたい」

私は長瀬さんの此の終始、微笑をさへ含まれた御話振に先刻迄私が感じて居た、落着かない不安な氣持が一掃されるのを覺えた。それは長瀬さんの御話振、態度の中に「新入生を固くさせまい」と云ふやさしい心づかひをはつきり見出したからである。未知の人々の中にボツンと置かれた手持無沙汰な

私達の心を和げ歓迎會の愉快な雰圍氣の中に融けこませようとされた心づかひを感じたからである。

私は此の時商大の蹴球部を支配する氣分精神と云ふものはつきりと掴み得た様な氣がした。之が長瀬さんに對する私の第一印象である。

.....◇.....

私は現在の商大の蹴球部の地位について、屢々他校の友人から次の様な美望と揶揄とを混へた質問を受ける。

「商大は案外強いね。一体どうしてそんなに強いんだ」

無口な私は、苦笑して何とも答へないが心の中では、何時も此の間に答へてゐる。即ち商大の蹴球部にはチームワークがある。所謂「まとまり」があるのである。個人的技術的に見れば他のチームにも秀れたプレイヤーを見出し得る。

然し商大には、他のチームにない精神的技術的の「まとまり」がある。和氣霽々の中に、全部員の氣持が統一されてゐる。此の「協同の精神」がプレイヤーを支配するのである。此の氣持がプレイに表はれるのである。即ち團體生活に最も重要な精神的結合を有してゐるから、商大の蹴球部は強いのであると考へてゐる。

更に私は商大蹴球部を今日あらしめた此の精神は、長瀬さんんに依つて養成され來たと云ひたいのである。長瀬さんは技術的方面の御指導は勿論の事、總ての原動力たる蹴球部の

精神を指導し養成されて來られたのである。

.....◇.....

私は長瀬さんには蹴球を通じて種々の場合、時には個人的にも御世話をかけたのであるのが、長瀬さんは、凡ゆる場合物事を冷靜に判斷されると共に、常に多大の同情を以て處置された。

例へば一つの試合後には、その試合に於ける各人のプレイを批評されるのであるが、その批評はあくまで理智的に冷靜に批判されたものであり、同時に其の時の凡ゆるコンディションを斟酌して爲されたものである。此の熱心な御指導、親切な態度は私達をして將來一層の奮勵、努力を促しめるもので不知不識の中に、些細ではあるが私達は努力して來た積りなのである。

「凡そ蹴球部は、個人の我を捨て、皆一致協力して試合に勝ち、母校の名譽をあげねばならないが、又一方個人の發展を期さねばならない」

と云ふ平生の御言葉に背かぬ様に、我々は注意し努力して來たのである。即ち我々にとつては是等は皆尊い御指導なのである。

.....◇.....

昨年の秋リーグ戦に於て、既に國大、日齒、中大、慈大を破つて餘す所工大のみとなり全部員張り切つて猛練習をしてゐる。

たその練習の一日、長瀬さんが皆に激勵の辭を與へられたのは私達にとつて忘れられぬ想ひ出である。即ち長瀬さんは集つた全部員に次の様に言はれたのである。

「昔一人の木上りの名人があつた。此の名人は人が木に上つて高い所に居る時は何も言はないが、次第に下りて來て低い所になると「危いから注意しろ」と言ふので、或人がその理由を問ふと、其の名人は「それは高い所では、誰も細心の注意を拂ふから落ちる事はないが、低い所になると油断して注意しない。そこで低い所になるとよく落ちるのである」と答へた話がある。今我々の場合は丁度此の話と同じである。

今迄我々は緊張して戦つて來た。その甲斐あつて、あと工大を破れば優勝出來ると云ふ所迄漕ぎ付けて來た長い間の奮闘で、皆身体が弱つてゐるだらう。中には負傷してゐる人さへある。然し苦しくてももう一歩だ。低い所になつて木から落ちては駄目だ。もう一歩頑張らう」

私は長瀬さんの激勵の言葉を聞いてゐる中に胸が一杯になつて來た。何故か知らないが胸が迫つて來た。夏から一生懸命張りつめて來た心にソツと柔らかに觸れられて、感傷的になつたのだらうか。心の底に、もう安心だと云ふ油断があつてそれを悔いる氣持だらうか。然し私達が悲壯な氣持になつたのはもつと他の理由があつた。長瀬さんは元來蒲柳の質で、

身体は丈夫の方ではない。而も長い間共に奮闘されたので、定めし身体も弱つて居られるだらう。その長瀬さんが言はれた「もう一歩だ頑張らう」と云ふ激勵の言葉が私達にとつては余りに痛々しく餘りに悲壯に響いたからである。誰の胸にも「必ず勝つて見せる」と云ふ意氣が此の時益々強められたのだと思ふ。

その結果強敵工大を堂々八對一の快スコアで破つたのである。そして全勝したのである。之は私達にとつて永久に忘れられない悲壯な喜びである。

.....◇.....

色々想ひ出して見ると、長瀬さんの御骨折は實に莫大なものだと思ふ。

私達は此の御骨折に對して心から感謝すると同時に、長瀬さんの残された精神を以て我々蹴球部の將來、一層の活躍の爲に努力せんとするものであります。

終に臨んで長瀬さんの御幸福をお祈り致します。

(僅か一ヶ年の御近付にも拘はらず、色々失禮を申しました事を御許し下さる)

# 一年を送つて

予二 岩崎寛貞

去春四月兩頬を喜びに赤らまして校門を潜つて以來最早一年新入生を迎へる身と相成つた。大學生活始めの懐疑と初心と落着きの無さもすつかり洗ひ去つて今日の今では全く中學生としての氣持ちも昔のもので、豫科生らしい氣持に變つて來た。考へて見れば此の一年全く愉快なうね／＼した曲線の中の生活であつた。去春四月大學生活の第一歩又蹴球生活の第一歩を踏み出した譯だが、果して今の今第二歩に足を運び得たかと言ふ事は全くの疑問だ。

知識の向上もプレイの向上も見られない。只進歩したのは怠情とすう／＼しさとだけだ。

蹴球、それは私に取つて全く才能がないのではないかとしば／＼思ふ。然しスポーツを味ひ行つて居る天下の一人だと思ふ時に一寸朗かに慰められるものだ。

事實私のキツクの進歩しない事、運動神経の鈍い事愛想が盡きて終ふ。諸先輩各位の御指導を全く私の鈍才が受けつけない。情なくなる恥しくなる。之はしば／＼の事だ。

扱て自分の一年の蹴球生活中得たものは何か。それは種々ある。社會上團體精神は最要のものだ。教練でも此の團體精神の涵養を一大目的としてゐる。だが教練で實の所がこの心が養はれるだらうか？、教練はさぼらうと言ふ心さへ起れ、こんな素張らしい道徳的な心なんか起るものでない。だが我々蹴球部生活をするものは敵對心と相伴つて、又多分に團體精神が知らず／＼養はれるので、實際にこの精神の發生しない様ではその年の強さと言ふものは表はせぬ。故に僅か乍らも此の心が自分の心に引つ着いた事であらう。

一般にスポーツは青春の感激を謳歌するに最適のものだ。プレイ上私はこんな考が出た。蹴球には精神の統一力の無いものはたとへ体力あり、技倆あらうと適した人間でないと言ふ事で、斯んな事を今更考へるのは凡々の事だと思はれようが、全くは私が今の頃深く感じ、この力なきを深く恥じ之を所有しようと思つてゐるのである。實際之はむづかしい。この力の完成は或は人格の完成の重大な段階かも知れぬ。

まあ一年の間で私の得た主なものとして、前述の如く一小部分の一鱗にしか過ぎぬ。結局蹴球部に最もよく親しみ精神の統一力を深め、技をねるならば理想のプレーヤーを得るには難くないだらうと今頃の私は秘かに思ふ。

終りに諸兄の御指導に多謝々々。(九、四、廿五)



× × ×

## 蹴球部回顧録

〔その一〕

### 創立より大正帝崩御まで

故兵藤先輩を中心として……………川村 通

蹴球部の今昔……………渡邊 弘

保田の合宿……………伊東健吉



二年に成つて氣も落ちつくと、何か自分の營みらしいものが欲しくなる。此の時分であつた。猫額大の校庭に体操教官から借用の古びた籠球用ボールを二人で蹴つて遊ぶ一壯漢を見出したのは、而も打ち見れば、彼氏聊か年輩の高商生である。註に曰く、當時末だ舊高商が残存してゐた。陽春四月の陽を浴びて萬年シャツにパンツ一つ。ドタ靴踏み鳴らして鞠を蹴る。而して誰に見しよとて、蹴るでもない。孤りに甘んじて獨を樂しみ、天地間我と鞠在るのみと云はん許りの自適の狀心憎き限りと見た。食堂の壁に蹴あてし鞠は、轉じて以て學生集會所の窓を襲ひ、鞠を受け鞠を追ひ、縦横無盡の大活躍だ。破れた帽子をぬげば短く刈つたヅク入頭、ロイド眼鏡の奥に人なつこい眼が笑ふ。是が我が兵藤先輩であつた。何とはなしに惹きつけられて話したのが縁の端、忽ち僕も此の清貧孤獨にして而も鞍馬山は義經の一人劍術的蹴鞠（敢て後年の蹴球と分つ）の仲間入をした。同クラスの明石毅君（現在大阪瓦斯に居る）も一緒であつた。さあ、之が妙に面白い。いや蹴るの何の、朝は始業前から蹴る。晝休勿論蹴る。放課後は最も蹴る。日没に至つて纔に止む。日曜日にも登校して終日蹴つた。従つて仲間も日増しにふえた。そして何時となく

方が云ひ出した。僕等も亦無鐵砲さに於て敢て人後に落ちぬ時分だから、よし來たと言下に賛成した。そこで當時之亦出來たてのホヤ／＼と云ふ早稻田の高等學院に掛け合つて、高等師範のグラウンドでやるときまつた。景氣をつけようと云ふので親方一流の名文で檄を草したのを僕等が悪筆を揮つて、模造紙何枚かに大書し、生徒控室に高々と掲げたものだ。「公孫樹梢綠葉濃かに」とか何とか書き出して、茲に商大蹴球團を結成し、強敵早大に當らんとするによつて、全學を擧げて來り援けよ。」と云つた様な大變なものであつた。メムバーはと云ふと、E.W.に王さん干さん吳さん張さんなど、支那人をズラリと並べて親方が采配を振らうと云ふわけ、H.H.にトモさん明石君、吉野君、H.H.に進藤君は良いとして相棒がこの寄せつこけた貧弱な僕、O.N.が紅顔の美少年マーチヤンと云ふ。チームワークもヘツタクレも無い。皆便衣隊みたいな連中で、第一線が奇聲をあげて例の玉なぶりの足どりよろしく敵陣めがけて揉み込むと、あとから竹馬に乗つたトモさんがヒョイ／＼と大股に出て、馬力脚で敵の向すねごとボールを蹴つとばしてのけようとふ仕掛けである。さていよ／＼試合に臨んでみると、敵もさるもの、葬式の鯨幕の様な黒白「は

氏を呼ぶに「親方」なる名稱を以てする様になつた。其の頃一味に加はつた乾分連の顔ぶれを二三紹介しよう。トモさん事、廣島一中出の高橋朝次郎君は、いつも頬に淡く血ののぼつた如何にも純眞なる少年と云ふ顔だちだつた。只むやみに背が高くて竹馬にでも乗つてゐるやうな感じがしたものである。但し其の蹴つとばす馬力に至つては、眞に凄じいものがあつた。我がマーチヤン事松本正雄君の如きは、勿論今日の如く禿げては居らん。恰も神宮外苑繪畫館前の芝生の如く美しき三分刈の頭を振り立て、ゆで蛸の如く常に赤面しつゝ蹴つたものである。一級上の進藤靜太郎君はエスペランチストであつた。だから、足のさばきも國際的で、傍に見てゐた一生曰く「あの男日本人か、いやに蹴りやがるな。支那人だらう」と云ふ位。一休此の頃は支那人の留學生が多かつた。支那人は由來足わざが巧である。従つて彼等は、僕等の不器用に於て亂暴なる蹴飛ばしを見るに見兼ねたのであらう。續々と現れ來つて、其の「玉なぶり」の妙を示し始めたものである。

其の年の六月頃であつたらうか。大分仲間も出來たから此際一チーム作つて、何處かと一試合しようぢやないかと、親「ぎ」合せのユニホームを着てゐる所はなか／＼勇ましいが、よく見ると、よくしたもので、あちらにも張三季四とか何とか言ふ面がまへがゐるぢやないか。だから此の試合期せずして、兩軍の戦法が一致した譯で、互に得點なしの引分であつた。レフェリーは誰だか忘れたがさぞをかしかつたであらう。試合後の紀念撮影寫眞は多分本誌の巻頭に掲載されるであらうから、就いて篤と御覽を願ひたい。試合の場所が僕の出身學校々庭と來てゐるのだから大いに我チームの武者振りを兒て貰はうと思つて居たのに、何にも知らない見物の中學生が「ヤアこつちは支那人の學校だよ」と許り僕までアツサリ支那人の中へぶち込まれ、トント同情がないのはがっかりした。其の後頻りにあちこちと試合をやつたが、先づ武運拙い方で勝つたためしは嘗てなかつた。其の中あまり校庭であばれすぎた爲、ボールを体操教官が貸してくれなくなり、互のポケットマネーを齧出して買つた事もあるが、いよ／＼それも詰つた時、親方が一案を立てた。誰か先輩から寄附を仰がうと云ふのである。白羽の矢を立てられたのが、大先輩田中虎之輔氏であつた。氏は天下の糸平の御子孫ださうな。親方が云ふ様は「田中さんの兄様は慶應大學でラクビーを始めた人だ

から、弟さんの方はサッカーの後援をして下さる筈だ。』珍妙なロチックだが當時の僕等は成程さうだと大いに肯いたのである。所で田中さんと我々とは素より一面の識もないし、何しろあちらは桁外れに年長のえらい實業家で、こちらは黄口白面ではない赤面内至黒面の蹴つとばし團員だ。明石君、マーチャン、僕の三羽鳥を率ゐた親方はどうして知つて居たか、兎に角田中さんの銀行に僕等を引っぱり込んだ。そして首尾よく氏に面會して確かに大枚五十圓也を頂戴したのである。しやべつたのは親方一人で僕等乾兒は唯畏つてむやみに拳骨を膝の上で握りしめてゐたのみであつた。今にして思へば、氏はよく怪しみもせず斯かる大金を下すつたものと思議に堪へぬ。氏の太つ腹もさる事乍ら、氏をしてかくせしめたる我が親方の外交術も亦相當以上であつたと見ゆる。其の後此の拜領金は實に大事に用ひたもので、後年の我が部の基本となつた次第である。而して其の時から、五年後、本科を出る迄僕は部の台所方會計方をやらされたのは妙な因縁であつた。

親方に就いては實に思出多く、到底一時に述べ盡し難い。只諸君も折に觸れて、マーチャンからでもきかされたらうが

度は確かに首を吊つたんだが、繩が切れよつてね。そんな事も云つた。面白い人である。亡くなる少し前の三月末、僕が東京府の木つ葉役人生活の終頃、大阪へ出張した歸り道、親方を岐阜の病院に見舞つたのが、生前最後の對面であつた。傷しく衰へた手を伸して、到來ものぢやがと云ひながら、パ、イアの一切を進めてくれた事も忘れられぬ。

親方に就いてはマーチャンも明石君もトモサンも、古い馴染は皆盡きぬ思出をもつ。そして誰もが此の不思議な徳をもつた人の事を、それぞれの視野の角度から見直して噛みしめそれを新しい部の諸君にも語り度いと願ふだらう。

兎に角蹴球團時代の僕等の學生々活は、此の親方を中にして、一種の輝かしい世界を形造つた。方法も理論も只蹴つ飛ばして、鞠の如くまろやかに弾力のある結びつき、其處に清く楽しき生きがひを見出したのだつた。土煙を揚げてボールを追つた代々木の原、火鉢を圍んで清談に時を忘れた下宿の二階、豫科も本科も専門部も何もない。朝鮮人も、台湾人も、藤さんも陳さんも、團員である限りは親しかつた。無條件で友愛の眞情が通うた。洵に不思議な團結であつた。

嗚呼當時の友よ！スキフト先生に教はつた。テニソンの詩

高商部最後の卒業生として世に出るや、大阪朝日の社會部記者と成つての大活躍は恰も往年のグラウンドに於ける『もみ』込み的ドリブリング其のまゝに恐るべき威力を示したものである。然るに不幸胃潰瘍に罹り百方治療に力められし効もななく、昭和三年初夏、其の御郷里岐阜市の縣病院で逝去せられたのである。兵藤世平治と云ふと、何やら昔の草双紙中の人物めいて聞えるが、御本人は非常に進歩的にして、而も洒脱な性格、一見野人禮にならざるかの如にして實は近代人の特に江戸つ子によく見るデリカシーの持主、噛みしめるに従つて味の出る、眞に良き人であつた。學生時代、巢鴨の下宿でチプスにかゝつて死にさうになつた時、『あゝ！エライ、あゝエライ。』と途方もない大聲でどなつたのが、つい此間の事の様記憶してゐる。

僕等乾兒連が寄つてたかつて看護したのも今は、悲しき思出である。九段の中坂に下宿して居られた頃、押しかけて行つた僕等に、人は何んでもいゝからユニークな存在を確保しなれりやいかんといふ論を聞かしてくれた事もあつた。夫子自身慥かにその理想通りに其の生活を導いた事を今にして想ふ。何かの打明け話の節に、僕は二度自殺しそこねてね。一

ぢやないが

『人は來りて又行けど

とはに行くべき我身とて』

己がむきむきの暮の川に流れ／＼て再び戻る源のありやう筈は無いのである

されど懐しき心の故郷――

其處には昔乍らの若やぎの誰彼の面わが浮び出る

回想の糸は果しなく――

伸びて止まる處を知らぬ

併し――

此度は茲に惜しい筆を擱かう、  
我が親方の

冥福を祈りつゝ――

――九・七・一三――



# 蹴球部の今昔

渡邊 弘

[上]

年々歳々花相似。歳々年々人不同。とか、人間萬事塞翁馬とかいふけれども、移りゆくものは、只浮世の姿のみではない。我が商大ア式蹴球部内の轉變も、決して平凡な現實論者の想像も及ばぬところであると信ずる。實にや榮枯盛衰波瀾萬疊の蹴球部の十有餘年の變遷史こそ、我々現代青年にとつては又なき好箇の活教訓でなくてはならぬ。流轉の世相。輪廻の姿。眞に世は様々といひながら、——蹴球部の過去を顧みる度毎に感慨一入深く。涙一入新たなるものがある。

顧みるに私が商大豫科に入學したのは大正十三年であり、昭和五年卒業に至る六ヶ年の學生々活は蹴球部に關する苦闘の歴史であつた。私が豫科一年の時分は試合の度毎に殆んど平素顔を見せた事のない様な人が出場し、決して一定したメンバーを構成した事がなかつた。それで先輩諸氏に改めて事情を聞いて見ると、蹴球部には元來留學生が多く、それが爲

に統一が困難であるとの事だつた。事實私が豫科に入學した時の豫科の主將の林君は臺灣の出身であり、もう二人王といふ臺灣の人、吳といふ支那の留學生が居り。それ等は何れも豫科三年生であり、三宅君が委員長として只一人の内地人、二年には瀬社家君が居られたに過ぎない。従つて、殘餘のメンバーは一年生を以て補充しなければならぬ状態であつた。こゝに於て私は三宅、瀬社家兩君、並びに松本、河村の兩先輩の知遇によつて、遂に商大六年の學生生活を蹴球部に捧げることに決意せしめられたのであつた。

尤も私が積極的に部に關係したのは二學期以後の事であり一學期には對關西大學、對青山學院の二試合を見學したに過ぎなかつた。

而して私が奇異の感を抱かしめられたのは、對關大の試合であつた。勿論到底勝算なき試合と思つてゐたに拘らず、結た。同時に渡邊(村)君の所屬する一年三組即ち青丘會のメンバーも同君の力によつて、立ちどころに構成されるといふ有様だつた。然らばかやうに多くの人員の揃ふ一年生のメンバーは如何といふに、渡邊君の様な特別優秀選手は別として城島君が大連中學でクラスの選手をしてゐられた爲に、直ちに使用するを得るといふだけで、他は何れも速成選手のみだつた。けれども熱心な練習は次第に各人の技倆を向上していつた事勿論である。

さてその年のリーグ戦の成績であるが、これは極めて惨めなものだつた。リーグ戦はこの年始めて出來たものであり、一部に帝大、早大、慶大、高師、農大、法大の六校、二部に商大、明大、一高、東齒、青學、外語の六校であつた。一部では早大の優勝、農大の最下位、二部では一高の優勝、東齒の最下位、即ち次年度に一高と農大と入換へとなつたのである。ところで商大の成績はといへば

對外語 一——二 敗

- (メンバー)
- |     |       |   |
|-----|-------|---|
| L.W | 神     | 戸 |
| L.I | 渡邊(弘) | 村 |
| C.F | 野     | 島 |
| R.I | 吳     | 城 |
| R.W | 森     | 森 |
| L.H | 拜     | 司 |
| C.H | 星     | 野 |
| R.H | 張     |   |
| L.F | 進藤(本) |   |
| B.F | 林     |   |
| G.K |       |   |

局は零對零のドロンゲームに終つた。これには素よりゴールキーパー渡邊(村)君の奮闘を挙げねばならないが、それにしてチーム全体として決して弱いものではなかつた。各人についても相當の技量を有するのを認めないわけにはいかなかつた。然るに秋のリーグ戦以後部が非常に苦境に立つに至り、爾來全く對關大戦とは似てもつかぬチームとなつてしまつた。私が對關大戦に奇異の眼を見開いた所以は一にここにある。然らばかくの如き變異は何が故であつたらうか? それはその後石神井グラウンドにおける不統一の練習と對關大戦には二、三の他部に屬するけれども蹴球技に長ずる人が加入してゐたからであつた。以下これからの商大六ヶ年の蹴球部に關聯する苦闘史である。

元來私は何も蹴球部に盡さねばならぬ義理はなかつたけれど、十月に部の大會が行はれた時、一年五組即ち黎明會のメンバーを構成して出場した時に部との關係は深められたのであつた。黎明會の蹴球メンバーは實によく私を中心として團結してくれたこれは私が未だに感謝に堪えぬところである。

私は前後四回に亘つて黎明會のメンバーを構成するの機會に遭遇したが、何時も何の苦勞もなく、スラ〜と運んでいつ

對青山學院 ○—四敗  
對第一高等學校 ○—四敗

F W	部(豫)	井(專)	社家(豫)	藤(本)	戸(豫)	司(豫)	宅(專)	島(豫)	橋(本)	橋(豫)
	田	藤	瀬	進	神	拜	三	城	高	林
H B										渡
										邊
F B										高
										林
G K										渡
										邊

對東京商科醫專 三—一勝  
對明治大學 一—三敗

F W	司(豫)	野(豫)	(城)	島(豫)	戸(豫)	東(豫)	藤(本)	本(本)	社家(豫)	橋(本)	橋(豫)
	拜	星	吳	豫	神	伊	進	松	瀬	社	家
H B										高	
										林	
F B										高	
										林	
G K										高	
										林	

で僅かに最下位からまぬがれたといふ状態だった。試合は初年度のこととして、學校間の協定がうまく出来なかつた爲か年内には外語との一試合のみであり、他は何れも次の年の二月に延期され、爲にメンバー作成にも非常な悩みがあつたらしい。いふまでもなく、グラウンドに一度も顔を出した事のない人の出場さへ數回見られた位だった。この五試合を通じて出場した一年生は渡邊、拜司、城島、星野、森、伊東、神

せしめず、いはゞ昔とつた杵柄といふ人達を好んで出場せしめたからである。無理をしたメンバーの事として對一高戦の時のフオワードは東京日日新聞の如き商大の前衛頗る弱く云々の記事さへ掲載した位だった。バック以後は拜司、城島、高橋(朝)林、渡邊の諸君が居られたけれど、結局纏りのつかないメンバーだから遂に零對四で敗北してしまつた。

かうして出場選手の姓名を並べて見ると當時の一年生だけでも既に、拜司、神戸、田口の三君は故人となり、それに當年豫科の主將林君も逝き、轉た悲惨の感なきを得ない。この内拜司君は正式部員ではなかつたが、高師附中のハーフセンター乃至レフト、ハーフ或はレフト、ウイングを務めた人だけにその死は非常に惜しまれた。

リーグ戦のことはこれ位にして、一寸インターハイのことに言及する。この時程醜態な試合は私が小學校の六年生以來見學して來た幾多の試合中未だ嘗てなかつた。尤もだらしない試合といふのは別だけれど……。

相手は八高であり、得點は零對二で如何にも接戦の様であるがこれは得點から見た観測で、試合そのものはとても見てはゐられなかつた。極端に云へば八高のゴール・シュートの練

戸、吉田、田部、田口君並に私、都合十一名の多きに及んだ。尤も對青學戦には猶一、二のラグビー部の人が出場されたかも知れない。この時など全くひどいもので、丁度雪が午後から止んだといふ悪天候の土曜日だった。私はメンバーを揃へるべく豫科主將林君に試合の時間を確めに行つたところ、同君はこんな日だから試合はないと答へられ、早々歸つてしまつたので、一同にこの旨を通じた。然るに午後になつて青學の人が來石され、どうしても試合をしなければならぬ破目となつた。幸にして瀬社家君が寄宿舎に居られたからいゝ様なものゝ、もし同君なかりせばとんだ大恥をかゝねばならなかつた。そこで瀬社家君は寄宿舎の人を總動員して漸くメンバーを整へたといふわけで、正選手としては、瀬社家、城島の二名に過ぎなかつたといふ事である。けれども、これは私が實際に見た試合でないからどんな人達が出場されたかよく分らない。

要するにメンバーの一番揃つたのは對一高戦の時だつたらう。然しこの時のメンバー構成には私は甚だ不満を持つた。私がメンバー構成に不満を持つたのは全國高專學校ア式蹴球大會以來の事である。何故なら平素練習に出てゐる人を出場

習見たいなものだつた。何度も返練りす様だが、一回だつて練習に出た事のない人が多く、コンピネーションはゼロ、八高にゴールキックを蹴らしたのがたゞの一回、勿論商大は一のコーナー・キックをさへ得るに至らず、ハーフ・ラインを越した事僅かに數回然るに得點の開きが少なかつたのは何故かといへば、商大メンバーが後退して守勢を餘儀なくせしめられたので、却つて八高側がやりにくかつた爲もあつたらうがこの時の試合は一にゴール・キーパー渡邊君の健闘にかゝつてゐたのであつた。渡邊君がゐなかつたら、二十點位は入れられたに違ない。試合は醜態の限りを盡し、たゞ渡邊君の名聲を高めたに止まつた。この時だつて平素練習をしてゐる人を出場させたら、たとへ得點するに至らずとも、あんな醜態を呈さずすんだらうと思ふ。

かくの如く不統一なメンバーでありながら、いつの試合も得點上からは割合に好成绩に終つたのは、當時各校のチームがそれ程強くなかつたからである。當時商大チームが私の豫科三年の時のチーム位の實力であつたら、必ず二部で優勝したらう。それに高橋、拜司二君を加へれば一部の中位を得ることさへさ程困難ではなかつたらうと思はれる。

大正十四年二月十四日の懇親會の席上、川村、松本、高橋三先輩の御懇請によつて、私は正式にマネジャーに就任し、同年四月より新主將瀨社家君を補佐する事となつた。私が一年の時は本科主將は進藤君、豫科主將は林君だつたが、新學年よりは瀨社家君が本科、豫科の主將を兼任する事になり、事實上本科の蹴球部は唯豫科の指導役といふ格になつた。

さて私が二年の時の正選手、補缺選手の各顔振れは、三年瀨社家、二年渡邊、伊藤、城島、神戸、森、星野、萩野屋、中山、近藤、奥村、一年津田、平松、惠藤、半澤（後の安野）豊田、坂口、井上の諸君だつた。而してこの年から、私は幹部として働いたのだから事大小となく瀨社家、渡邊兩君との合議決定にまつこととなり、従つてこれからは部の内外の事情は細大洩らさず記録する事を得るが、今回はたゞ概略に止める。

この年三巨頭相談の結果、部にコーチヤをおく事とし、渡邊君のチームたるアストラクラブの川村、足立兩氏（主として川村氏）を招聘し、五月四日川村氏、翌日川村、足立兩氏來石され、その日よりずつと正式コーチヤして頂く事になつた。かくて同月二十三日、小手調べとして、アストラクラブ

ーフとして活躍した平松君の入部を見たのも津田君のおかげである。更に一年生の間に蹴球熱を盛ならしめたのは惠藤、半澤兩君の力によること亦大であつた。

部の前途益々光輝を添へんとする折柄、ここに悲しき事を擧げねばならぬ。それは七月七日に前年度の試合に於て奮闘努力された拜司君の葬儀に、私は部を代表して渡邊、伊東兩君と共に列席した記録である。傳手を以て謹んで同君の死を哀悼する。猶、惠藤、萩屋兩君も今は故人となり、哀惜の念愈々切なるものがある。

部の團結力もいやが上にも強固なものとなり、從來一回だに行はれなかつた、畫期的事業として、夏期合宿を七月十七日より八月十一日まで、約一ヶ月の間、房州保田に於て行つた。會するもの渡邊、伊東、神戸、近藤、星野、惠藤、豊田平松、津田諸君及び私、それに應援として中尾、舟木兩君、並にアストラクラブの牧野君も参加された。この合宿は私が商大六ヶ年の學生生活中、最も意義深く、最も愉快であつた然し、この時の事を詳述すると私個人に對する誤解が生じて來さうだし、それに紙數にも限りがある事だしするから、それは親友伊東君の筆に待ち、私自身の感想は他日の機會に讓

と試合を行つた。この結果は零對一で敗北したが、相當手應へあるゲームをなすを得た。而も渡邊君がアストラ側に出場されたにも拘らず……もしこれが前年度の様なチームであつたら、かうまで好試合は行はれなかつたらうが。新學期からは練習も正確に行はれ、チームとしての團結力も出來て來たので、新メンバーとしての成績から見て、先づ上々のものだつた。

その後對外試合の時は勿論、六月十日の一年四組對二年、一組對五組の試合、同月十七日の一年對二、三年の試合の度に、川村氏は常にコーチヤとして指導の任に當つて居られた。従つて各人の練習振りなど、到底前年度に於ては見られない程の熱心さだつた。といふと如何にも私がマネジャーとして大いに活躍し、努力した様に思はれるが、事實相當の功績を残したのだから多少の自己宣傳は大目に見て頂きたい。けれども、これは決して私獨りの力ではなく、瀨社家、渡邊二君の盡力は素より、一年では津田、半澤、惠藤三君の健闘をあげねばならない。後年蹴球部の爲非常な努力を盡された豊田君が、自己の技倆の完成しかゝつた籠球部から轉部されたのもこの時だし、選手としては壽命は短かつたが、名ハ

る事とするが、この時の合宿程、切實に友情を感じた事はなく、又團結力の強きを思はしめた事もなかつた。従つて保田の生活こそ私にとつては永遠に忘れ難き思ひ出ではある。けれども一方あれ程苦樂を共にしたメンバーのうちで、神戸、惠藤兩君を失つた事を思へば、又堪え難き空漠、寂寥の感なきを得ず、自ら心の痛みを禁ずる事が出來ない。而もこの合宿に於て、多少の部費を融通した事が次年度の豫算會議で問題になつたが、これなどは全然意味のない事であつて、部としての事業に部費を流用させる事は些の不思議もない筈である。然しながら、これは私一個人に對する悪感情から生じた誤解であるからその事に關しては、私の不徳の致すところとして、ひたすら部員諸君に對してまことに相濟まなく思つた次第だが、又一方多少不快の感ないわけでもなかつた。

かうして當時の回想に耽つて來ると、何んとはなしに胸がしめつけられる様な思がするが、九月の新學期において商大創立五十週年記年に際しての部の活躍、部員同志の友情を書き記すに及んでは、再び當年細やかなりし友誼に只々感涙を催し、これだけでもかなりの紙數を費す事となるので、ほんのこんな事があつたといふだけを書き残すに止める。

新學期開始早々五十週年記念の準備にとりかゝり、合宿に  
 參加した諸君は早くから登校し、これに餘念がない程だった。  
 又城島君も私の手紙によつて、故郷大連を引き上げ、石神井  
 に姿を見せてくれた。その他の人達も何れも熱心に部の事業  
 に盡された。何しろ一橋と石神井兩校舎に於て、記念祭は催  
 されるので、中々忙しかつた。而もこの間練習は怠りなく續  
 け、運動會に出場すべきチームを定めるなど東奔西走の形だ  
 った。記念祭は九月十九日より二十五日まで一週間に亘つて  
 催されたのである。然しながら、この間の出来事は一切省略  
 し、直ちにシーズンに入つてからの事に筆をすゝめる。

十月四日に明治神宮競技大會の豫選が、駒込本郷中學校庭  
 に於て行はれた。ここで又悲しい思ひ出を残すのは當日レフ  
 ト・フルバックとして出場した島君が、たしか翌年だつたと  
 思ふが、不歸の客となつた事で、かうまでして蹴球部の人達  
 は薄命に終らなければならぬかと思へば、轉た哀痛の念禁ず  
 る能はず、自ら膚寒きを覺へる。

この年のリーグ戦は十月二十八日。對青山學院の試合を以  
 て開始された。左にリーグ戦の成績及びメンバーを挙げる。

對青山學院 二——一 勝

通じて見れば前年度より僅に好成績となつてゐるが、これに  
 ついては辯解の様だけれども、一言當時の事情を述べるを許  
 して頂きたい。

新メンバーは何れも考朽淘汰、練習不参加者は全然オミツ  
 トしてしまつたから、本科乃至専門部で心得のある人があり  
 豫科でも相當な人があつたが、練習不参加者はすべて除外し  
 僅に専門部から山下君を起用したのみだつた。而して山下君  
 の参加は農大、東齒の兩試合だけであつた。従つて新メンバ  
 ーは瀬社家、渡邊兩君を中心とした、チームであつて、兩君の  
 内一人が缺けると全くチームの三分一位の力が減せられると  
 いふ有様であつた。即ち對外語戦には瀬社家君が丹毒の爲不  
 参加、對明大戦には渡邊君の祖父上が逝くなつたので歸省さ  
 れた爲、この二試合は非常な不利なコンディションに於て戦  
 はねばならなかつた。

對東齒戦にも渡邊君の不参加を見たが、この時は高橋君が  
 出場して下さつたので、その補ひをつけるを得た。かくの如  
 く新メンバーは只その強固な團結力のみによつて戦つたとい  
 つても、敢へて過言ではなかるべく、これは一に夏期合宿か  
 ら得た尊い賜ものだつた。

藤澤 戸田 東野 (森) 家松 島邊 田  
 惠半 神津 伊星 (瀬社) 平 城渡 豊

對外國語學校 一——三 敗

藤澤 戸田 東野 森 平 松 島邊 田  
 惠半 神津 伊星 城渡 豊

對明治大學 一——三 敗

前メンバーに星野退き瀬社家入る。

對農業大學 一——二 敗

C・F山下入り神戸及津田退く。

バックの位置の變動はあるもメンバー同前。

對東京齒科醫專 一——〇 勝

半澤(神戸) 神戶(半澤) 山下 星野(近藤) 近藤(星野) 森 瀬社 家松 橋 島 田  
 平 高 城 豊

青學戦の得點者神戸、伊東、外語戦は惠藤、明大戦は半澤  
 農大戦は山下。東齒戦は瀬社家の諸君であつた。この成績を

リーグ戦を通観して痛切に感ぜられた事は、各ラインとも  
 コムピネーションは非常に好つたにも拘らず、得點が少かつ  
 たといふことで、之はフォワードラインがいつももう一步と  
 いふところで押しが足らなかつた爲と、これはすつと商大チ  
 ームの弊害として残つたのだが、スピードのない爲とであつ  
 た。後者については練習以上に先天的素質の支配を受けるの  
 で已むを得ぬが、フォワードラインに於ては僅かに伊東、山  
 下兩君にスピードを見たのみであつた。

十二月の學期休暇に入つてからは前年度の失敗に鑑み、全  
 國高校ア式蹴球大會出場準備として正しい練習を行つた。明  
 けて大正十五年一月二日に法政大學豫科と對し。一對二で敗  
 れたが、この時も渡邊君の参加を見なかつたし、神戸君も既  
 に病み、爲にチーム編成の上に一大支障を來したのみならず  
 士氣の上にも影響する所が頗る大であつた。この時の出場メ  
 ムバーは、

LW 惠藤、LI 半澤、CF 山下、RI 近藤、RW 津田、LH 森、  
 CH 平松、LF 瀬社家、RF 城島、GK 豊田であり、得點者は惠藤  
 君であつた。

該年度は一月二十七日の對東京高等工業學校の試合を以て

終了した。得點は二對一で我部の勝利に歸し、ゴールゲツタ  
ーは渡邊、山下兩君であつた。試合終了後間もなく、夜の帳  
は除々に垂れ下り、大岡山の大グラウンドに寒月ほのかに冴  
え渡り、芙蓉の麗姿は残りの夕陽に暗影を投じ、小川のせゝ  
らぎも聞え來て、森羅萬象に満ち渡る宇宙創始の大いなるも  
のゝ力を感じつゝ、しばし忘我の境地に浸つたのである。

見渡せば夜の帳りにくれはてゝ

大岡山に月ぞのぼれる

家毎にのぼる煙におのづから

もの思はする夕まぐれかな

いつか又姿仰ぶか富士の根に

過ぎし昔のことを問はまし

當時の私の感興としてこの三つの拙歌がある。之でシーズ  
ンも終つたので、大正十四年度の決算は松本、川村、瀬社家  
三君と私とで、又大正十五年度の豫算は川村、瀬社家兩君と  
私とで作成した。かくて我部の大功勞者たる川村、松本兩君  
は愈その年の三月を以て學窓を出られるので、多年の功績に  
酬ゆべく二月十四日、數奇屋橋畔珍紅亭に於て送別會を催し  
た。會するもの川村、松本、高橋、瀬社家、渡邊、伊東、城

の内無難だつたのは酒井君唯一人であり、而もその酒井君も  
本年一月物故され、人生朝露の如しの感を深くせしめられた。  
何故酒井君を除く他の諸君が無難でなかつたかといへば、高  
橋、栗山、小林の三君——特に高橋君——は蹴球部との關係  
黄、西川、文の三君はラ式部との關係が面倒であつて、これ  
等諸君の入部を得るまでの私の努力といふものは並大抵では  
なかつた。これだけは後年蹴球部に席をおかるゝ方の記憶に  
止めておいて頂きたい所の私の貧しき功績である。

新學年度最初の試合は昨年に準じて、アストラクラブと五  
月九日に行つた。零對一のスコアを以つて敗れたが、前年の  
試合より遙かに優勢な試合で、殊に後半戦は非常な好機に恵  
まれてゐたが、何時ももう一步といふところで得點を逸して  
ゐた。これと反對にこの時のハーフ(左酒井、中黄、右平松)の  
堅實なことは驚くべき程で、正に商大ハーフの黄金時代を作  
つた。——尤も次年度におけるハーフも中々優秀であつ  
たが——川村、足立兩氏から、このハーフなら大いに將來有望  
だと絶讚の辭を頂いた。フオワードに於ては高橋君のプレー  
が目立つたが、同君が器用で非常に細かいプレーをなすに比  
し、從來商大フオワードのプレーが細かくないので、連絡上

島、惠藤、平松、津田十君並に私都合十一名であつた。

四月に入つて私はア式蹴球部委員長に就任し、主將には渡  
邊君が就任した。オール一橋の主將は本科瀬社家君である事  
勿論である。實にこの一ケ年間は私が精神的に最も悩んだ年  
であつた。即ち常に私の指導的立場に立つて居られた松本、  
川村兩君は卒業され、瀬社家君は本科へ進み、おまけに伊東  
神戸兩君は病み、石神井に於て頼るべきは渡邊君只一人とな  
つてしまつた。幸ひ渡邊君が私の苦衷を察せられて、アスト  
ラクラブとの關係は關係とし、我部の爲に献身的努力を誓は  
れたので、私も漸く安堵の胸を撫で下した。

元來、伊東、神戸の兩君はたゞに同じ蹴球部員といふばか  
りでなく、個人的にも私と非常に親しかつたので、この兩君  
の挫折は私にとつてどんなにか辛かつたらう。之は他人の到  
底想像もつかない程だつた。だから私はこの年程ほんとうの  
人間の苦しみといふものを知つた事はなかつた。

たとへ如何なる難事に逢着、遭遇するとも、素志貫徹に向  
つて邁進すべきは男子のとるべき道であるから、四月早々渡  
邊君と相談して、新メムバー編成に着手した。一年から高橋  
酒井、黄、栗山、小林、文、西川の諸君が入部されたが、こ

困難を來たし、高橋君もやりにくかつたらうと思ふ。

この頃の商大チームと現在のそれとを比較して非常に面白  
い事は、從來商大チームは前弱後強の狀を呈したに對し、今  
のは前強後弱である。勿論新チームは未だ見聞しないから分  
らぬが、昨年の對慈惠大學、一昨年の對拓殖大學の兩試合を  
見ての觀測である。昨年の時はフルバックには難點はなかつ  
たが、ハーフが如何にも弱かつた。拓大の時に至つてはこん  
なバックでよく優勝したとさへ思つた。

かう云つたからとて、それは私の先輩としての批判である  
から、部員諸君におかれても氣に留めず、これから一層の努  
力をして頂きたいものである。

生來私は不徳の爲か、何事によらず責任ある地位に立つと  
必ず問題が生ずるが、私が豫料の蹴球部の委員長に就任する  
と例の豫算削減問題といふのが起つた。この時の厄に會つた  
のが蹴球部、庭球部、野球部の三部であつた。この内野球部の  
みは多少の理由がないでもなかつたが、我部と庭球部とにつ  
いては全然意味なきものだつた。他部の事は別として、蹴球  
部に關する限り私一個人への惡感情から來た不當極まるもの  
であつた。その理由として、私がある婦人との關係によつて  
その〇〇費に部費を流用したといふのである。尤もこの事に  
關しては私の不徳は十分認めるが、世の常としてすべてが針  
小棒大に云ひふらされ、専ら私に對する惡評が放たれたわけ

である。大体部の公金を私用の爲に費消出来るかどうか、少し常識あるものならかゝる疑惑を抱く筈がない。ところがこの放送が意外にも某方面の宣傳によること分り、私は思はざるところからの裏切に啞然として云ふべきすべを知らなかつた。もし私個人に對する悪感情なら、たゞ私に向つて蹴球部の委員長を辭すべきを勸告すればよいものを、豫算審議會に於ての云ひがかりは、蹴球部はボール代を菓子代に代へたといふ様な荒唐無稽の外れの無禮至極なるものだつた。私への個人的悪感情を部全体に及ぼすとは實に怪しからぬ譯である。私は豫算審議會に於て、極力その不當なる事實を指摘したので、流石豫算委員も良心に咎めるところあつたか、涙金十三圓を追加して呉れた。第二讀會では森君が端艇部の豫算を削減して蹴球部に追加すべきを主張されたが、之は不幸にして通過しなかつた。かやうにして大正十五年度豫算は結局前年度より八十圓程減少したが、この點から考へて部員も少く、試合の時もメンバー寄せ集めといふ窮狀にありながらよく多額の豫算を獲得された瀬社家君の手腕に敬服するばかりである。

かくて私一個人の不徳から部全体に迷惑をかけた事は眞に相濟まぬ仕儀と思ひ、蹴球部の回想に當つて特にこの一事に強いショックを受け、慚愧に堪えない次第である。

蹴球部がこんなつまらぬ誤解を受けても、部員諸君は熱心

に練習を積み、團結を固くし、リーグの戦績によつて、この雪辱をなさん事を誓つた。又部員以外に於ても部の精神を理解して下さる諸君も多く、この問題の爲、私は却つて部の内外から非常な同情を受けた。

商大蹴球部建設の主旨は私にはよくわからなかつたが、私に關する限り、特に私が豫科二年の時は商大蹴球部の爲にといふよりも、我々の仲間——蹴球部員として結合してゐる我々の團体——の爲にといふ氣持の方が強かつた。然し新學年度からは部員の考へが多少在來のものと同つて來た。それはその年夏期の合宿の時の氣分が前年度のそれと餘程の變化を來たして來たのみならず、平素の氣持ちに於ても、それがはつきりと現れて來た事を知つたからである。

部の氣分は段々變化して來るし、部員は多くなるし——私が本科へいつてからとはこの邊大分變つてしまつた様だけだ——メンバー構成には相當の苦慮が拂はれた。ところが六月下旬、將來に非常の期待をかけられた平松君が突然發病され、遂に正選手として使用に堪えなくなつてしまひ、私は落膽、失望、暗然と涙を呑んだ。且つ近藤君の父上が逝くなられ、同君は長男の故を以て戸主として働く以上、従來の如く部に深く關係する事が出來なくなり、星野君亦病の爲休學する。等次から次へと悲報が傳つて來る折柄、豊田君が退學を

決意されるに至り、私は昏迷、悲痛その極に達した。既に伊東、神戸兩君を失つた我部は又々これ等の苦難の試練にあひ實際私がこの事に受けた心の痛手といふものはとても筆紙には盡されない。蹴球部の歴史を書き、思ひを當年の私の心事に致される時、讀者諸君よ！一掬の同情の涙を注いで頂き度。

けれども幸にして豊田君は私の依頼を受けて、快く起られた松本君の忠告によつて、初志を翻へされるに至り、漸く一の難關だけは切り抜けられた。

九月には横濱二中で合宿練習を行つたが、この時の栗山君の努力には改めて感謝の意を表しておく。九日横濱二中の請によつて、練習試合を舉行、○對○のスコアで終つた。又夕食後横濱の街を彷徨ひ、十一時頃宿に歸つたが、神奈川臺上から百千の明滅する横濱市街の人家の燈火を眺め、松吹く風に誘はれて既往回顧の情に浸れば、思ひは自づと前年度の合宿に至り、斷腸の思ひ切々たるものがあつた。

合宿を終り、愈々シーズンに入るや、春の豫算の事もあり部員一同の熱ゆるが如き意氣は頗る盛んで、今年こそは必ず覇業を遂げんと誓つたが左の如き成績を以て一同は無念の涙を呑んだ。

對青山學院 一——一 引分

藤澤下橋田	井	邊	田
惠半山高澤	瀨社家	黃	酒
對明治大學	一——○	勝	
藤澤下橋田	井	島	邊
惠半山高津	瀨社家	森	城
對外國語學校	一——一	引分	
藤澤橋島田	井	邊	田
惠半高城津	森	黃	酒
對慶應大學	○——二	敗	
藤澤川橋下	邊	井	田
惠半西高山	森	渡	酒
對東京齒科醫專	六——二	勝	
藤澤川橋口	邊	井	田
惠半西高田	森	渡	酒
瀨社家	黃	酒	田
瀨社家	黃	酒	田
瀨社家	黃	酒	田
瀨社家	黃	酒	田

學院戰の得點者惠藤、明大戰は瀨社家、外語戰は高橋、東齒戰は高橋、惠藤、西川、半澤(二)黃、の諸氏であつた。但

# 保田の合宿



伊 東 健 吉

その頃のことをおもひ出さうとしてもあまりに遠い姿になつてしまつてゐる。大正十四年もう八年も前のことだ。往事茫々如夢なんて云つてもみたくなる。合宿についておもひ出されるのはたゞそのかみの若々しく朗らかだつたわれ／＼自らの心情の追憶が漠とした一つのなつかしいおもひを呼び起すだけである。

その頃の蹴球部と云ふものは今の様な組織を持たない。部と云ふ形態を持つかさへ、はつきりしない寄り合ひ世帯だつた。リーグの試合があると云ふと外の部あたり居た連中で少し蹴球に堪能だと云ふ様なのが集つて来て一寸練習して試合すると云ふ状態が大正十三年頃のA式蹴球部である。それをとともかくも一つのものにまとめ上げ様と努力してゐたのが渡邊弘だつた。そしてA式蹴球部を一つ

し右の試合の内明大との試合はもう一點藤君の得點があつたのだが、この時はボールにネットなく、レフエリーが誤審し、後で明大マネジャーより了解を求められたので、當方としては一對零でも二對零でも勝は勝だから、そんな事でお互の間に氣まづい思ひをするにも及ばじとて先方の了解を十分諒解した。又慶應との決勝戦は非常な大試合であつたが、陣前の亂戦よりの流れ球と、タイム直前のペナルティーキックとの爲惜しくも二點を獲得された。けれどもこの時の試合は前々年の關大との試合とこの年の明大戦と共に特筆大書さるべき程のものであつた。

出場者中、山下、澤田兩君は専門部、瀬社家君は本科、他は全て豫科であつた。

優勝を目指しての該シーズンに於ける成績を通観すると案外得點が少く、結局二位に甘んじなければならず、流星光底裡に長蛇を逸するに至つたのはチーム編成上に多少の落度があつた爲で、これについてはマネジャーたる私の責任は頗る重大であつた。虫のいゝ云ひ分かも知れぬが、前半期において私の心に受けた打撃を幾分でも割引して下されば幸甚である。即ち専門部の中島君の起用が不能となつた事、津田君が親友平松君の挫折により氣を腐らしたのか、意氣昂らず僅かに明大外語の二試合にしか出場されなかつた事などはその主たる原因である。——津田君には青學との試合に出てもらひ

たかつたのだが——それに未だに残念で堪らぬ事は、もし栗山君にしてもう一年前あれだけの技術になつてゐてくれたら如何に我部にとつて多幸であつたらうという點である。尙それにして伊東、神戸、平松諸君の挫折は大きかつた。而も城島君までがシーズンの終り頃神經衰弱に胃される等、右しても左しても悲しい事のみだつた。

而して私達の悲しみは年の暮れに至つて、その極致に達した。それは申すも畏き事ながら、先帝陛下の崩御である。十二月中旬頃より、陛下の御惱み重らせられた爲に、一切の蹴球としての年中行事は中止となり、月の二十五日には遂に神去られた。かくて全國民悲しみのうちに昭和元年は暮れてゆく。

——以下次第——

〔お断り〕 先頃田島君よりの御依頼によつて、蹴球部の回顧史を書くお約束をしたが、強度の不眠症より來た神經衰弱の爲め十分思考力なく、遂に擲書で、こゝまで來たけれどもこれ以上は疲勞して書けなくなつてしまつた。これから先は次號に廻して頂く事にする。尙各試合の状況、並に之等に對する批判等は改めて胸を新にもつゞ／＼身のある文章を書いて今回の埋合せにしたいと思ふ。〔筆者〕

右の如き快作を得た事は一人の喜びではなく、讀みて涙する者多きを知る。然もその文成る、實に病床にある氏の血肉を削る難産であり、醫師の執筆禁止をおしきつたその熱に、往年の君が姿も想像されやせた君が身体の何處より來るか、盡きざる熱情の前に部の爲さはいへ、強ひて執筆を願つた私自身願つて頭を垂れ、快談數時間大いに將來の部を語り辭し去る時や夜十一時。再び誌上よりその健康を取戻されん事を祈り、來年には、詳細なる部史を彩られん事を希望して擲筆す。

——田島——



# 最近蹴球部戦績

[11]

## ◆昭和六年度戦績

〔四月〕

商大豫科二軍対アラン倶楽部

4  
2 2  
0 2  
2 勝

メンバー  
野井野原田 (岡田)  
神荒水佐角  
堂瀬 良枝  
橋二荒 世堀 茂

(當日、相手はメンバー揃はず九人にて戦ひ、我軍もベストメンバー揃はず、新人を入れて戦ふ。先づ第一戦に決勝す。)

〔五月〕

豫科対—法政

1  
0 1  
1 0  
1 分

メンバー  
野井野原田  
神荒水佐角  
堂瀬 藤枝  
橋二荒 堀後 茂

〔六月〕

◎豫科対浦高定期戦

2  
1 1  
0 0  
0 勝

メンバー  
野井野原田 堂瀬 藤枝  
神荒水佐角 橋二荒 堀後 茂

此の日我軍は元氣よく、終始敵を押し、快勝せしも得点僅かに、二點なるは遺憾なり。

豫科対—東高

0  
0 0  
2 1  
3 敗

メンバー  
浦高戦に同じ

豫科対—府立高校

(0—0) 分

豫科対—早稻田新人

3  
1 2  
1 1  
2 勝

此の二戦のメンバー共に前に同じ。

〔六月〕

豫科対—法政

3—2 敗 メンバー同前。

以上三勝二敗二引分にて豫科シーズンを終る。

## ◇秋のシーズン

〔九月〕

商大對國學院大學

8  
6 2  
1 0  
1 敗 明薬グラウンド

Member  
角田 後藤 堀田 浅枝  
高橋 二階堂 西田  
吉村 橋 西田  
荒井 橋 西田  
神野

去年の屈辱に燃えて奮ひ立ちしに、實力の不足か、運命の神の我に與せざるか、早くも第一戦に我々は、敗惨の涙に咽んだ。そぼ降る雨に泣きぬれ乍らも、我々は來る可き四試合に全勝せんものと明薬を引き上げた。

〔十月〕

商大對—日齒

3  
0 3  
3 0  
3 分

野井野原田 藤堂瀬 田 枝  
神荒長佐角 後二荒 西堀 茂

此の日籠城事件の魁たる、文政當局の斷案飛んで一橋學園内に凄惨なる風を捲き起さんとする日、我々は決死の覺悟にて試合に望めり。

前半我が軍の死物狂ひの奮闘功を奏し、三點リードせしも後半肉体的疲勞に、加ふるに精神的疲勞を以てし、遂に第二戦も引分に終り。赤の色は再び地に落ちた。

〔十一月〕

商大對—中大

6  
3 3  
0 0  
0 敗

野井野原田 堂瀬 藤枝  
神荒西佐角 橋二荒 堀後 茂

日齒戦の過勞より、長瀬病んで遂に立たず、西田を起用してCFとするもチームの力無きを如何せん。又々惨敗に終り再び立つべからざる深淵に陥れり。

〔十一月〕

商大對—立教

1  
0 1 1  
4 1 5 敗

野井野原田 藤堂瀨 田 枝

神荒水佐角 後二荒 西堀 淺

此の日我軍好調にスタートし、開始五分にして一點得れども、コンビなきを如何せん。後半次第に離されて、中大戦の涙乾かざるに再び惨敗の汚名に泣く。

〔十一月〕

商大對—商船

5  
3 2 0  
0 0 0 敗

木井野原田 藤堂瀨 田 枝

鈴木水佐角 後二荒 西堀 淺

商船も全敗の後を受けて、我を屠らんとせば、我も全敗の恥を一氣に注がんと、相戦ふ。試合開始前、長瀬病を押して馳せつく。我に悲壯の氣漲り、奮然立つも遂に武運拙く惨敗す。

燃えて空焼く夕焼も消え、夕闇暗き頃、二年連続陥落に泣く我部よ――

永遠に汝は呪はれしか？ 商大の名は永遠に我部に汚さるるか。

〔十一月〕

豫科對—浦高

1  
1 1 0  
1 1 1 分

野井野原田 堂瀨 藤 枝

神荒水佐角 橋二荒 堀後 淺

以上、三勝六敗四引分。

### ◆昭和七年度戦績

◇春

〔五月〕

商大對—立教

5  
1 1 1  
1 1 1 敗

野掛枝野田 木堂瀨 井藤 井

神大淺水角 鈴木二荒 村後 荒

商大對—法政

1  
1 0 0 敗

野掛部井田 田瀨木 井見 田島

神大阿荒角 森荒鈴 村重 田島

〔六月〕

豫科對—東高

2  
2 2 2

野掛枝野田 田瀨木 井井 田島  
神大淺水角 森荒鈴 村荒 田島

豫科對—浦高定期戦

2  
1 1 勝 メムベ―は同じ。

只水野が後半悲壯の負傷に退き重見代る。

商大對—東高

1  
1 0 0 敗

堂掛枝井田 田瀨見 井木 島  
二大淺荒角 森荒重 村鈴 田

〔九月〕

商大對—武高

2  
2 1 1 敗

野藤枝田井 田堂瀨 井木 島  
神後淺角荒 森二荒 村鈴 田

此の試合にオール一橋のメムベ―にて、對戦するも未だ練習不足の爲か、遂に惜敗す。しかれども我軍の得意とするスクラムトライを此の試合に會得す。

對—日齒

〔十月三日〕

◎對—外語(リーグ第一戦)

4  
1 3 0  
1 0 0 勝 (東伏見)

野藤枝井掛 田堂瀨 井木 島  
神後淺荒大 森二荒 村鈴 田

〔十一月〕

對—府高

3  
1 2 1  
1 1 0 1 勝

野藤枝田掛 田堂瀨 井木 井  
神後淺角大 森二荒 村鈴 荒

對—明薬 8—0 勝 メムベ―同前。

對—日齒 2—1 敗 メムベ―同前。

對—BRB 2—1 敗 全 全

(リーグ第二戦) 對—東商

6 (3 3) | | 1 勝 (清水組)

野瀬枝田掛 田堂藤 井瀬 井  
神長淺角大 森二階 村荒 荒

(リーグ第三戦) 對—拓大

3 (0 3) | | 3 分 (清水組)

野瀬枝田掛 田堂藤 井木 井  
神長淺角大 森二階 村鈴 荒

對—府高 1—0 勝 メムバー同前。

對—日大 1—1 分 (リーグ第四戦) (清水組)

野瀬枝田掛 田堂藤 井木 島  
神長淺角大 森二階 村鈴 田

(大掛負傷し十人にて戦ふ。)

對—成蹊 5—0 勝 (リーグ第五戦) (清水組)

メムバー日大の時のメムバーに荒井入り大掛退く。

對—浦高定期戦 2—0 勝

野田枝田掛 森田 荒井 荒瀬 井木 島  
神林淺角大 森二階 荒瀬 村鈴 田

對—成城 10—0 惨敗

野田枝田掛 見田 森田 荒井 荒瀬 井木 島  
神林淺角大 森二階 荒瀬 村鈴 田

(十二月)

大阪遠征(十二月於甲子園)

對—大阪商大

5 (2 3) | | 2 3 敗

野瀬枝藤井 田堂 瀬 井木 島  
神長淺後荒 森二階 荒 村鈴 田

對—神戸

4 (2 2) | | 1 2 勝

野井枝田野掛 田堂 瀬 見 井木 島  
神荒淺角水大 森荒重 村鈴 田

高商大會、メムバー左の通り。

對—高千穂 5—0 勝

對—横濱高商 4—2 勝

對—大倉 4—3 勝

以上にて關東代表となる。

對—關學 2—1 敗

村井

鈴木

◆昭和八年度戦績

四月三十一日

商大對—武高

2 (1 1) | | 0 勝

田井枝田掛 田堂 見 井木 島  
林荒淺角大 森二階 重 村鈴 田

五月六日

商大豫科對—法政一軍

商大混成軍對—法政二軍

0 (0 0) | | 1 敗  
2 (1 1) | | 0 勝

Member  
田井枝田掛 西堂 見 井木 島  
林荒淺角大 小二階 重 村鈴 田  
野瀬澤藤虎 井堂 田 井島  
神長熊後後藤 坪二階 淺 村水

五月十日

商大對—立教

5 (2 3) | | 2 勝

田井枝田掛 西堂 見 井木 島  
林荒淺角大 小二階 重 村鈴 田

五月十三日

商大對—東高

1 (1 0) | | 1 分

野井枝田掛 小西 後藤 見 井木 島  
神荒淺角大 小後 重 水島 鈴木 田

五月二十六日

商大對—法政

1 (1 0) | | 0 勝

澤井枝田掛 (後藤) 野藤 (森田) 見 井木 島  
熊荒淺角大 神後 重 水島 鈴木 (田)

(今迄破つた事のなかつた法政を遂に破る。)

六月一日

商大對—早大新人

3 (1 2) | | 1 敗

野井枝田掛 西堂 見 井木 島  
神荒淺角大 小森 重 村鈴 田

商大對——帝大OB

5—2 敗  
MEMBER前ノMEMBERに神野の代りに林田入る。

林田毅

六月に這入つてから、スラムブ氣味にて調子出す。比較的好調だつた本年度の成績に惜氣もなく、敗北を記せしは遺憾なり。

六月十七日

豫科對——浦高定期戦

1 (0 1 | 1 0) 1 分

田井枝田掛 西田見井木  
林荒淺角大 小森重村鈴木  
(田島)

林田毅

九月二十二日

商大對——明薬

7 (3 4 | 1 0) 0 勝

MEMBER成城の時に同じ。

九月二十三日

商大對——武高

6 (4 2 | 0 1) 1 勝

野井枝田掛 田堂藤井島  
神荒淺角大 森二階後村水  
(田島)

故郷

故郷

故郷

九月二十六日

對——府高

9 (6 3 | 0 0) 0 勝

野井枝瀨掛 田堂藤井島  
神荒淺長大 森二階後村水  
(田島)

去年十對零で惨敗を喫した、一部の雄成城に見事に報服なる。

十月二日

對——國大 (リーグ第一戦)

5 (4 1 | 0 1) 1 勝 MEMBER同前。

十月三十日

對——東高

4 (1 3 | 1 1) 2 敗  
野井枝田掛 田堂藤井島  
神荒淺角大 森二階後村水  
(田島)

練習不足にて敗る。  
以下四試合リーグ戦

十一月六日

商大 6 (3 3 | 3 1) 4 日齒  
野井枝田掛 田堂藤井島  
神荒淺角大 森二階後鈴木島

十一月十一日

商大 2 (0 2 | 0 0) 0 中大 MEMBER同前。

十一月十九日

全 8 (2 6 | 0 1) 1 慈大

十一月二十五日

全 8 (4 4 | 0 1) 1 工大 MEMBER同前。

MEMBER  
瀨井枝田掛 田堂藤井島  
長荒淺角大 森二階後鈴木島  
(田島)

十二月六日

豫科對——浦高定期戦

3 (1 2 | 0 0) 0 勝

田井枝田掛 田堂藤井島  
林荒淺角大 森二階後鈴木島  
(田島)

十二月九日 (豪雨)

商大 2 (0 2 | 0 2) 2 分 大阪商大 定期戦

豫科 1 (1 0 | 1 2) 3 成城 敗

全國高商大會

豫科 1 (1 0 | 0 2) 2 専門部 敗

全く簡略に載せたが、來年から詳しく発表します。本年度の事は一切來年に廻します。

委員



# 一橋了式蹴球部部名簿録

昭和九年  
八月一日現在

編輯部調査

〔部長〕

佐藤 弘助 教授

世田谷區北澤三ノ九九〇  
電 松 澤 六 〇 六

〔先輩〕 大正十四年度〔卒業年度〕

進 藤 靜 太郎

兵庫縣武庫郡住吉村反高村一八七六ノ四四  
電 御 影 五 六 七 八  
自營大阪市北區東梅田町二八 進藤商店  
電 北 一 〇 二 九 九

大正十五年度

松 本 正 雄

杉並區西高井戸一ノ一三九  
辯 護 士 東京市京橋區銀座西一丁目  
實業ビル五階花岡法律事務所  
電 京 橋 大 〇 八 六  
府立第一商業教諭

川 村 通

大森區田園調布四丁目三 電田園調布八三五  
調布高等女學校 電 田園調布五二一

十五年〔專〕

藤 井 泰

東京市京橋區因幡町一集成社貿易部

昭和三年

三 宅 弘 方

和歌山市湊北町一丁目峯萬吉方  
電 和 歌 山 四 三 五  
大阪市西區南堀江三番町六九 大日本製氷  
株式會社大阪出張所 電 櫻川大三八

澤 田 安 二

石神井村下石神井一、七六二  
丸ノ内二丁目・丸ビル大階・齋藤省三事務所

山 下 保

大連市聖德衛新二丁目一四九

昭和四年

瀬 社 家 力

東京市小石川區若荷谷町七 大東紙工所  
電 墨 田 二 二 四 七

小 川 謙 一 郎

横濱市神奈川區御殿町八一三  
川崎市渡田日本鋼管株式會社

昭和二年

高 橋 朝 次 郎

麻布區廣尾五九  
麴町區丸ノ内八重州ビル麒麟酒株式會社

明 石 毅

兵庫縣武庫郡東芦屋藤ヶ谷莊園  
大阪市東區上本町四ノ六三大阪瓦斯株式會社  
上本町營業所 電 南 一 八 〇

檜 垣 延 樹

奉天市青葉町十三  
自營 營 天 元 洋 行 主

大正十三年〔專〕

北 尾 義 人

C/o 10 Osaka Shosen Kaisha, Ltd,  
Connaught Road, Central, Hongkong

十四年〔專〕

三 宅 定 夫

廣島縣廣島市堺町一ノ二一  
自營

昭和五年

渡 邊 弘

豐島區雜司ヶ谷九四八

渡 邊 甚 吉

〔村吉改〕  
岐阜市松屋町一 渡邊殖産株式會社  
芝區白金三光町二七三

城 島 鎮 雄

豐島區長崎仲町一ノ二、四七六  
東邦火災保險株式會社

伊 藤 健 吉

鎌倉町雪ノ下一〇八東京週報社  
大森區馬込町東一丁目一〇八四

森 綠

岐阜市松屋町一渡邊方 渡邊殖産株式會社

近 藤 豊 太 郎

牛込區津久土町二 自營

豐 田 達 治

京橋區靈岸島町二ノ二ノ一 電京二六三四  
日本橋區馬喰町二ノ一二花王石鹼株式會社  
長 瀬 商 會 販 賣 部

昭和七年

平 松 宣 夫  
 麴町區 紀尾井町六  
 日本橋區室町 株式會社三越本店

津 田 弘 精  
 名古屋市東區權木町四 武田方  
 名古屋市中區笹島町四ノ二  
 三井物産株式會社レイヨン掛

西 川 善 一

東京市杉並區馬橋一〇三 坂井方  
 橫濱市山下町五八ライシングサン  
 石油株式會社

高 橋 啓 次 郎

淀橋區下落合八〇八 中島忠男方  
 神田區仲猿樂町三〇帝國書院

栗 山 健 三

橫濱市神奈川區宮ヶ谷七  
 東京市深川區佐賀町一ノ一 峯岸慶藏商店

安 野 貞 治

〔半澤改メ〕  
 下谷區龍泉寺町二二二  
 荒川區日暮里八ノ七九一 半澤方

〔在學生姓名〕 ( )ハ出校名下ボジション 右住所左歸省地

主將 本科三年 [謹二改] (廣一中) CH  
 二 階 堂 謹 司

杉並區大宮前六ノ三五三丹野方  
 廣島縣佐伯郡大竹町五三二ノ三

後 藤 博 基

(高師附中) HB

協會庶務 赤坂區青山南町六ノ廿一 電青山 六四二

神 野 光 司

委員長 二年 [清一郎改] (高師附中) FW

品川區五反田六ノ一九一 電高輪一五二二

水 島 茂

(名古屋高商) FB

中野區上高田一ノ四四 嶺方  
 濱松市名殘町三六〇

淺 枝 彦 太 郎

(廣一中) FW

中野區千光前二四世木方  
 廣島市廣瀬元町二三一ノ一

昭和八年

星 野 弘 一  
 杉並區高圓寺二二二

小 林 昌 一  
 小石川區高田老松町十七  
 片倉製糸

高 橋 重 彌  
 杉並區和田本町八五二  
 明治火災保險株式會社

西 田 敏 介

下谷區上野町二ノ一七 電下谷二七三  
 三井物産株式會社

勝 田 一 郎

赤坂區表町三ノ二一 庄川水力電氣株式會社

橋 本 林 三

世田ヶ谷區下北澤三ノ一〇三 住友鑛業

長 瀬 凱 昭

福岡縣戶畑市千防三菱明和寮内 三菱鑛業

吉 村 豐 三

丸ノ内株式會社 高田商會

荒 井 文 雄

(松山中) FW

杉並區井荻二ノ二七 南波方  
 埼玉縣比企郡松山町松葉町

田 島 輝 重

(四中) GK

世田ヶ谷區池尻町四三〇

角 田 昇

(五中) FW

小石川區林町一六

森 田 昭 之

(一中) HB

淀橋區諏訪町一九九

枝 村 藤 三 郎

(青師) FB

澁谷區千駄ヶ谷町四ノ八二五 濱中方

鈴 木 彰

(一中) FB

赤坂區青山南町四ノ廿二

大 掛 隆 久

(高師附中) FW

豊島區堀之内町三十三

淺田

英暉

〔英三改メ〕(京一中) GK

杉並區上荻窪三ノ一二一 松川方  
大阪市天王寺區北河堀町六七小 川方

重見

敏之

(神戸一中) HB

杉並區荻窪二ノ一二一 中村方  
京都市浄土寺南田町一〇三

林田

毅

(青島日本中)

杉並區天沼一ノ一〇七尙學林内  
長崎縣島原町釣鐘町  
中華民國上海北四川路一三  
ノーザンアパート フラット二號

井恒

典

(一中) HW

中野區永川町四電 四谷五・八〇一

岩崎

寬貞

(二中) HB

北多摩郡府中町五五三六

熊澤

博文

(松山中) HW

杉並區大宮前六ノ三九三 松井方  
埼玉縣松山町本町三丁目

小西

正夫

(廣高師附中) HB

北多摩郡谷保村口立山水内  
廣島縣尾道市土堂町二一五

藤後

虎雄

(湘南中) HB

杉並區荻窪二ノ一二七古畑方  
神奈川縣平塚市本町三ノ七〇九

池尾

隆二

(五中)

杉並區上荻窪七五二  
千葉市向寒川町二六二

狩森

正雄

(上野中)

品川區五反田六ノ二〇二

菅瀬

十朗

小石川區久堅町七四  
廣島縣安佐郡口田村天口

高原

龍雄

(一中)

東京府小金井村二・八八四

二階

堂晴三

(廣一中)

全兄

西田

徳治

(高師附中)

杉並區高圓寺町四ノ五五〇

長谷

川勉

(岡一中)

澁谷區代々木初台町五一六  
岡山縣岡山市東田町七四

安田

祐之

(横濱一中)

横濱市中區住吉町一ノ七

物故部員

大正十二年高商卒

兵藤

世平

治

昭和六年卒

惠藤

勤一

一

昭和七年卒

酒井

孝吉

吉

在學中物故部員

神戶

力

力

拜司

隆

一

萩屋

英

夫

島吉

郎

林 (台灣ノ人)

後記

甚だ時日が切迫致しまして思ふにまかせず、部員名簿も之を以て一先づ打切りとしました。時しも一橋蹴球部に専門部の問題起りて解決せざる時、無心に並べられし名簿は往年の和なりし三位一体を默示して居ます。愛一橋！ 大一橋！ を目指す時に、我々は先づ、専門部に偏見を捨てさせる自ら省みて寛容なりや自問すべきの時と思ひます。逝きし幾多の先人に謹んで哀悼の意を表し以てこの一書を手向ませう。尚渡邊弘、松本二先輩の御援助を感謝致します。(田島記)



編輯後記

〇〇〇

〇〇〇

◇長い夏休みが来た。暑さは激しい。皆さん御元気に、御活躍の程を祈ります。

◇昔懐しい二部に返つて一部を見上げる時、この部誌にしみく過去を振り返りみられる。

◇部誌編輯はノビて——又ノビて——やつと一段落だ。朝來の雨に唯感慨無量、あゝ！難事なるかな！！と、幾度部誌編輯をやめかけた事よ！

◇皆さん！私を泣かせないで下さい。原稿締切を守つて郵税の不足を取られないように一寸注意します。

◇此の勞や何時報いらるゝか？只、一部昇進のみ、自ら慰めて喜びあり。◇一ツ橋蹴球部！何と懐しみあふれた言葉よ！我々のホームなのだもの無理もなし。

◇編輯は練習の終るまで落ちつかず、時間の少い私は一人あせつてしまひ、粗末なものとなつてしまつた。

◇諸君！何回でも読んで下さい。そして部の爲に、無爲に過し來た私の爲に改めておしかりを——。

◇尙此の編輯に多大の御盡力を下さつた、二階堂、荒井、角田、淺枝、森田諸君に、部誌發行に際し満腔の感謝を捧げたい。

◇先輩を訪ねて疲れた足、ペンを走らせて疲れた手、獨斷専行した私は寛大な友の前に、自責の念を馳つて更に手足を動かすのです。そして今や眠れる

時が近づいて來る。

◇辛かつた練習、悲しかつた過去、が夏は來ました。諸君は何處へ！！好き便りを待つてます。では御元気で又來る秋まで——。互に自重ませう。さよなら——。

昭和九年七月十三日

〔田島記〕

昭和九年八月一日 印刷  
昭和九年八月十日 發行

〔非賣品〕

商科 大學 校内

編輯兼 田島輝重  
發行人

埼玉縣浦和市一〇七

印刷所 栗原勘三郎  
印刷人

發行所 商大蹴球部

正誤表

〔頁〕

〔行〕

〔誤〕

〔正〕

目次  
(一) (二)

124 103 94 91 90 72 70 51 51 50 48 46 43 41 30 26 26 26 24 23 21 21 21 5 同

上終 2  
上 1  
上終 2  
上 9  
下終 13  
下終 7  
終ヨリ 8  
下 7  
上 1  
下 4  
下 6  
1  
4  
5  
9  
8  
8  
終ヨリ 3  
3  
6  
5  
5  
6  
上ノ 10  
終ヨリ 3

高橋長次郎  
本科 角田  
体験出きる。  
何時敵の  
恐怖とはならぬ  
以つてゐる  
ドツヂを  
敵の O.S A  
良い方には  
はまらない——事  
球を以て  
高橋長次郎  
とらさん  
KICKAの  
一筋  
ものには  
ベツレムへの道  
知るのもじなれば  
ベツレムへの  
然しながら  
願れば  
であつた當時、  
——たのだ  
養成され来た  
そんな事も  
報復

高橋朝次郎  
本一 角田  
体験出きる  
何等敵の  
恐怖とならぬ  
持つてゐる、  
ドツヂの  
敵の O.S A  
良い方に  
はまらない——事  
球を持つて  
高橋朝次郎  
トウさん  
KICKAの  
一條  
ものには  
ベツレムへの道  
知るのも心なれば  
ベツレムへの  
然しながら  
願れば  
であつた、當時  
——たのだ  
養成されて来た  
そんな事も  
報復

# 〔体操ノ順序ト解説〕

東京商科大学 蹴球部

- 1 攀踵屈膝 (注) 掌ヲ兩膝ニ當ツ今迄ヤツキヲ本向ニ体操ノ第一、足ヲ一足長位南クカテ、  
(目的) 脚、關節及ヒ 筋肉ヲ柔軟ス (回数) 八呼吸 四回
- 2 左右広南脚 片膝屈伸 (注) 手ハ膝 (目的) 膝股關節運動領域ヲ拡大 (回数) 前ト同シ
- 3 輕イ足踏 (目的) 前ニ運動ニヨリ 筋、緊張ヲ解ク 即チ マッサージ、役ヲ入 (回数) 前ト同シ
- 4 頭、前後側屈及迴旋 (注) 手ハ腰 初メユツクリ後強ク  
(目的) 頸部 筋肉、弛緩 (回数) 各方向トモ 八呼吸 四回
- 5 体側屈 (注) 片臂ヲ横カテ上ニアゲ 及動的ニ片側 四回或ハ八回ツ、交互ニ行フ  
(目的) 腹、運動 (回数) 八呼吸 八回
- 6 体、前後屈 (注) 脚ハ南、後屈ノ際ニ臂ハ斜メ上ニ振ル 前屈ノ際ニ強ク腹向  
ニ振ル  
(目的) 腹部、運動 (回数) 八呼吸 四回 以上
- 7 体、側轉 (注) 南脚、片臂ヲ斜メ上ニ後方ニ強ク振り下ラシ 体ヲ四回乃至八回ニ  
交互ニ廻ス  
(目的) 腹、運動
- 8 体、迴旋 (注) 南脚、上体ヲ前側行カテ 交互ニ出來ル方ニ大ニ廻ス  
(目的) 腹部、運動 (回数) 八呼吸 四回乃至八回
- 9 呼吸運動 掌外及ヒ 胸ヲ後方ニ屈シ (回数) 八呼吸 四回
- 10 臂立伏臥 臂屈伸 脚後攀 (目的) 蹴球ニ於テ 倒テ早ク起キ上ルルニ 此ノ練習ニ 則チ上達ス  
(回数) 八呼吸 二回乃至四回
- 11 脚前上振 (注) 交互ニ、臂ヲ前ニ振り下ラシ、片脚ヲ出來ル方ニ上ニ振ル  
(目的) 股筋ヲ弛シ 蹴ヲ卷フ (回数) 十六呼吸 四回
- 12 脚側振 (注) 臂ヲ横カテ斜メ上ニ振り下ラシ 脚ヲ交互ニ左右ニ振ル  
(目的) 股關節、左右ニ伸ルカヲ卷フ (回数) 八呼吸 四回乃至八回
- 13 脚前振 体捻轉 (注) 右脚ヲ強ク前方ニ振上ゲテ下ラシ 上体ヲ右ニ廻シ 且ツ右下方ニ強ク曲ル  
右モ同シ (回数) 八呼吸 四回
- 14 開脚上方跳 (注) 臂ヲ横ニ振り上ゲテ下ラシ 脚ヲ左右及ヒ 前後ニ南行 強ク上方ニ跳上ル  
(回数) 十六回
- 15 呼吸運動 掌外及ヒ 胸後屈 (注) 輕ク臂ヲ外ニカヘテ下ラシ息ヲ吸フ、臂ヲ戻シ息ヲ吐ク

○ 繩跳ビ ・ 連續三分 回数 三回

(注意) 上記ノ回数、標準回数ナルカ、体、強イ人ハ 適當ニ強度ニスル必要カ  
アル  
以上